言語聴覚療法学科　シラバスで使用する略語集

略　語	正式名称	説　明
GW	グループワーク	少人数に分かれて討議などの学習活動を行い、参加者間の経験を共有し、課題解決を目指す
FW	フィールドワーク	対象の現地を訪れて直接観察やインタビューを行うこと
OSCE	Objective Structured Clinical Examination	臨床的技能や態度を評価する客観的臨床能力試験のこと 実習前後や卒業前に行われることが多い
ST	Speech Therapist	言語聴覚士
PBL	Problem Based Learning	問題発見解決型学習
TBL	Team Based Learning	チーム基盤型学習

コミュニケーション論

講師：松尾 康弘

単位数：1単位	時間数：15時間	授業学年：1学年
必修選択：必修		

■科目目標

言語聴覚士はコミュニケーションに障害のある方々やその家族へ専門的に支援を行う。さらに医療においてはチームアプローチが必要であり、介護・福祉・教育の分野においても多職種との連携、つまりコミュニケーションが必要になる。
本科目では対人関係の感性と能力を磨き、臨床現場で円滑にコミュニケーションを図ることができるようになることを目標とする。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	コミュニケーションの基本的な心構えを理解する	講義・TBL	
2	他者との関係を築くコミュニケーション方法を理解する	TBL	
3	演習を通しラポールテクニックを習得することができる	TBL	
4	演習を通しラポールテクニックを習得することができる	TBL	
5	非援助者の理解と情報交換、行動化の支援について理解できる	講義・TBL	
6	チームワークとコミュニケーションについて理解できる	講義・TBL	
7	・視覚障害・聴覚障害のある被援助者とのコミュニケーション ・認知症のある被援助者とのコミュニケーション ・人生の最期を迎える被援助者とのコミュニケーション	講義・TBL	
8	試験・解説	試験・解説	

■受講上の注意

■成績評価の方法

・各回の講義への取り組み・ディスカッション状況（40%）
・最終試験（60%）
により総合的に評価。本試験、再試験ともに60％以上を合格とする。
再試験は願い出により1回行う。

■テキスト参考書など

必要に応じ資料を配布する

■備考

■実務経験

本科目は言語聴覚士、公認心理師として実務経験のある教員による授業である。

心理学

講師：山下 協子

単位数：1単位	時間数：30時間	授業学年：1学年
必修選択：必修		

■科目目標

「こころ」の問題は、特定の人たちの問題ではなく、私たちすべての人間の人生や生活に密接に関係している。本講義では、「こころ」の問題に取り組む姿勢を自分自身で考えることができるようになるために、自分の感情や感覚について体験してもらう体験学習を交えながら、基礎となる心理学および臨床心理学について概説していく。心理学および臨床心理学の基礎的な知識を習得し、関連する用語や療法等について理解できるようになることを目標とする。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	オリエンテーション、心理学・臨床心理学をなぜ学ぶのか。	講義 GW	テキストの該当章を読んでおく。GWでは積極的に自分の意見を伝える。
2	「心理学とは」「感覚・知覚・注意・認知」について理解する。	講義 GW	テキストの該当章を読んでおく。GWでは積極的に自分の意見を伝える。
3	「情動・動機付け・パーソナリティ・社会」について理解する。	講義 GW	テキストの該当章を読んでおく。GWでは積極的に自分の意見を伝える。
4	「記憶・学習」「言語・概念・思考」について理解する。	講義 GW	テキストの該当章を読んでおく。GWでは積極的に自分の意見を伝える。
5	「発達と知能」について理解する。	講義 GW	テキストの該当章を読んでおく。GWでは積極的に自分の意見を伝える。
6	「臨床心理学とは」「心理臨床に必要な精神医学／心身医学の知識」について理解する。	講義 GW	配布資料を確認する。GWでは積極的に自分の意見を伝える。
7	統合失調症について理解する（映画鑑賞①）	講義 DVD	統合失調症について復習しておく。
8	統合失調症について理解する（映画鑑賞②）	講義 GW	統合失調症について復習しておく。GWでは積極的に自分の意見を伝える。映画の感想レポートを課する。
9	「防衛機制」について理解する。	講義 GW	テキストの該当章を読んでおく。GWでは積極的に自分の意見を伝える。
10	「心理アセスメント」「臨床で用いられる心理検査」について理解する。	講義 GW	テキストの該当章を読んでおく。GWでは積極的に自分の意見を伝える。
11	「臨床心理学の介入方法（行動的）」について理解する。	講義 GW	テキストの該当章を読んでおく。GWでは積極的に自分の意見を伝える。
12	「臨床心理学の介入技法（内面的）」について理解する。	講義 GW	テキストの該当章を読んでおく。GWでは積極的に自分の意見を伝える。
13	「臨床心理学の介入技法（相談的）」について理解する。	講義 GW	テキストの該当章を読んでおく。GWでは積極的に自分の意見を伝える。
14	カウンセリングとは何かについて理解する。	講義 GW	GWでは積極的に自分の意見を伝える。
15	終講試験およびまとめ		事前に配布する問題集を参考に復習しておく。

■受講上の注意

講義は基本的にはテキストに沿って進める。当日レジメを配布するが、事前に該当する章を読んで臨んでほしい。また、体験学習を数回取り入れる予定であるが、私語などせず真摯に取り組み、グループワークの際には積極的に意見を述べてほしい。

■成績評価の方法

試験90%、平常点10%（授業における議論への取り組み状況、課題など）により総合的に評価する。
※全体評価60%以上で合格、60%未満で不合格とする。不合格の場合、再試験は願い出により1回行う。

■テキスト参考書など

・『リハベーシック　心理学・臨床心理学　第2版』 内山　靖・藤井　浩美・立石　雅子　編　医歯薬出版株式会社
・授業での配布資料

■備考

講義用のレジメや資料は適宜配布する。

■実務経験

本科目は、公認心理師として実務経験のある教員による授業である。

社会心理学

講師：大薗 博記

単位数：1単位	時間数：30時間	授業学年：1学年
必修選択：必修		

■科目目標

対人関係並びに集団における人の意識、態度及び行動についての心の過程に関する、社会心理学の基礎的な知識と研究法を習得する。さらに、それらの知識を元に、社会での人間関係などの個人の問題から環境破壊や文化摩擦などの社会問題まで、多面的な視点から考察できるようになることを目標とする。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	オリエンテーション	講義・討論	ミニッツペーパーの提出。
2	原因帰属とステレオタイプ：差別を生み出す心理	講義・討論	ミニッツペーパーの提出。
3	自己と態度：自己欺瞞の心理	講義・討論	ミニッツペーパーの提出。
4	格差と公正：平等な社会を阻む心理	講義・討論	ミニッツペーパーの提出。
5	メディアの影響：社会のフィルターを知る	講義・討論	ミニッツペーパーの提出。
6	進化してきた心：ヒトの社会性の起源	講義・討論	ミニッツペーパーの提出。
7	身近な人間関係：恋愛と家族	講義・討論	ミニッツペーパーの提出。
8	友人関係とネットワーク：絆としがらみが作る社会	講義・討論	ミニッツペーパーの提出。
9	社会的ジレンマ：集団での協力と裏切り	講義・討論	ミニッツペーパーの提出。
10	集団間葛藤：ウチとソトの対立	講義・討論	ミニッツペーパーの提出。
11	西洋と東洋の心の違い：文化的自己観と認知スタイル	講義・討論	ミニッツペーパーの提出。
12	文化と適応：文化差の起源を求めて	講義・討論	ミニッツペーパーの提出。
13	幸福感と社会：幸せとは何か？	講義・討論	ミニッツペーパーの提出。
14	社会心理学史：変遷する人間観	講義・討論	ミニッツペーパーの提出。
15	終講試験およびまとめ	講義・討論	

■受講上の注意

毎回、討論を行う予定のため、積極的・主体的に参加すること。

■成績評価の方法

毎回のミニッツペーパー30%と終講試験70%

※全体正答率60%以上で合格、60%未満で不合格とする。不合格の場合、再試験は願い出により1回行う。

■テキスト参考書など

教科書：なし

参考書：社会心理学, 有斐閣。社会心理学キーワード、有斐閣。その他、適宜紹介する。

■備考

資料は適宜配付する。

■実務経験

アイデンティティの心理学

講師：島 義弘

単位数：1単位	時間数：30時間	授業学年：1学年
必修選択：必修		

■科目目標

「アイデンティティ」という観点から自分自身を省察する。将来，対人援助職としての専門性を発揮する基盤としての自己理解を深めることを目標とする。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	自己とは何か	講義	該当箇所の復習（レジュメ）
2	自己と認識	講義	該当箇所の予習・復習（レジュメ）
3	自己概念・アイデンティティ	講義	該当箇所の予習・復習（レジュメ）
4	社会的アイデンティティ	講義	該当箇所の予習・復習（レジュメ）
5	自己概念の変容	講義	該当箇所の予習・復習（レジュメ）
6	乳幼児期の自己の発達	講義	該当箇所の予習・復習（レジュメ）
7	自尊感情と自己評価	講義	該当箇所の予習・復習（レジュメ）
8	乳幼児期の自己の発達	講義	該当箇所の予習・復習（レジュメ）
9	児童期の自己の発達	講義	該当箇所の予習・復習（レジュメ）
10	青年期の自己の発達	講義	該当箇所の予習・復習（レジュメ）
11	成人期・老年期の自己の発達	講義	該当箇所の予習・復習（レジュメ）
12	時間的展望	講義	該当箇所の予習・復習（レジュメ）
13	キャリア発達	講義	該当箇所の予習・復習（レジュメ）
14	脆弱な自己	講義	該当箇所の予習・復習（レジュメ）
15	終講試験とまとめ	筆記試験	

■受講上の注意

授業中は積極的な参加を求める。

■成績評価の方法

毎授業時に課す課題（50%）と終講試験（50%）で評価する。
※全体正答率60%以上で合格、60%未満で不合格とする。不合格の場合、再試験は願い出により1回行う。

■テキスト参考書など

使用しない（資料配付）

■備考

■実務経験

医療倫理

講師：松尾 康弘

単位数：1単位	時間数：30時間	授業学年：1学年
必修選択：必修		

■科目目標

日本言語聴覚士協会における倫理綱領序文では「言語聴覚士は、自らの責任を自覚し、人類愛の精神のもと、全ての人々に奉仕する」と記されている。言語聴覚士は普遍的に他者を尊重し、自己研鑽を積み、対象者と社会に対して最善を尽くさなければならない。
本科目では、臨床において、対象者の人生観や価値観を尊重し、本人のQOLの向上やwell-beingに寄与できる倫理観を得ることを目指す。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	人間の尊厳を考える	PBL・TBL	チームで実施するため、活発なディスカッションを期待する
2	倫理4原則について理解する	PBL・TBL	チームで実施するため、活発なディスカッションを期待する
3	対象者の自己決定を尊重することの意義について理解する	PBL・TBL	チームで実施するため、活発なディスカッションを期待する
4	告知について理解する	PBL・TBL	チームで実施するため、活発なディスカッションを期待する
5	身体拘束と行動コントロールの倫理について理解する	PBL・TBL	チームで実施するため、活発なディスカッションを期待する
6	守秘義務とその解除・個人情報保護について理解する	PBL・TBL	チームで実施するため、活発なディスカッションを期待する
7	希少な医療資源の公正配分について理解する	PBL・TBL	チームで実施するため、活発なディスカッションを期待する
8	終末期医療の倫理について理解する	PBL・TBL	チームで実施するため、活発なディスカッションを期待する
9	終末期医療（DNAR）の倫理について理解する	PBL・TBL	チームで実施するため、活発なディスカッションを期待する
10	生殖補助医療の倫理について理解する	PBL・TBL	チームで実施するため、活発なディスカッションを期待する
11	遺伝性疾患における倫理について理解する	PBL・TBL	チームで実施するため、活発なディスカッションを期待する
12	摂食・嚥下障害の倫理について理解する	PBL・TBL	チームで実施するため、活発なディスカッションを期待する
13	医療者ー患者（対象者）関係について理解する	PBL・TBL	チームで実施するため、活発なディスカッションを期待する
14	倫理コンサルテーションについて理解する	PBL・TBL	チームで実施するため、活発なディスカッションを期待する
15	試験・解説	試験・解説	

■受講上の注意

毎講義終了後、ワークシートを提出してもらいます。

■成績評価の方法

・各回の講義への取り組み・ディスカッション状況（20%）
・ワークシート提出（40%）
・最終試験（40%）
により総合的に評価。本試験、再試験ともに60%以上を合格とする。
再試験は願い出により1回行う。

■テキスト参考書など

■備考

PBL: Problem Based Learning、TBL: Team Based Learning

■実務経験

本科目は言語聴覚士、公認心理師として実務経験のある教員による授業である。

人間理解とキャリア形成Ⅰ

講師：専任教員、松下 裕二、前田 知佳

単位数：1単位　時間数：30時間　授業学年：1学年

必修選択：必修

■科目目標

本講義では、言語聴覚士を志す学生として、また将来言語聴覚士として長く歩むため、自立した価値観を持つことの重要性について学ぶため、自身を顧みること、先人の価値ある言葉を通じて、自己・他者の人間理解を深めていくことが目標である。

また対人関係構築の基礎的な視点を身に付けるため、マナーアップに触れる機会を設け、具体的に実践する機会につながることを期待している。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	キャリアデザインについて学ぶ。	講義 演習	
2	自身のこれまでのキャリアデザインを振り返る。 これからのキャリアデザインのイメージを形にしてみる。	演習	自身を客観的に把握するよう意識する。
3	マナーアップの視点と重要性を理解する(1)	演習	自身を客観的に把握するよう意識する。
4	マナーアップの視点と重要性を理解する(2)	演習	自身を客観的に把握するよう意識する。
5	マナーアップを実践し活用のイメージを得る(1)	演習	
6	マナーアップを実践し活用のイメージを得る(2)	演習	
7	当事者と接し主観的・客観的に経験を得る機会とする。	演習	共感的視点と客観的視点を意識する。
8	当事者から話を聞く機会から社会的側面に対する視野を持つ。	演習	共感的視点と客観的視点を意識する。
9	当事者から話を聞く機会を経てより多様な意見や印象を取り入れる.。	GW	共感的視点と客観的視点を意識する。
10	就業者の経験談を聴講する中で自身あるいは他者のキャリアについて関心と理解を深める（1-1）	演習	6講までにで学んだソーシャルスキルを活用する。
11	就業者の経験談を聴講する中で自身あるいは他者のキャリアについて関心と理解を深める（1-2）	演習	6講までにで学んだソーシャルスキルを活用する。
12	就業者から話を聞く機会を経てより多様な意見や印象を取り入れる.(1-3)	GW	共感的視点と客観的視点を言語化する。
13	就業者の経験談を聴講する中で自身あるいは他者のキャリアについて関心と理解を深める（2-1）	演習	6講までにで学んだソーシャルスキルを活用する。
14	就業者の経験談を聴講する中で自身あるいは他者のキャリアについて関心と理解を深める（2-2）	演習	6講までにで学んだソーシャルスキルを活用する。
15	就業者から話を聞く機会を経てより多様な意見や印象を取り入れる.(2-3)	GW	共感的視点と客観的視点を言語化する。

■受講上の注意

授業活動の状況や施設使用状況により、上記の内容や順番を一部変更する場合がある。

■成績評価の方法

テーマごとのレポート（提出物）評価にて行う。

※全体評価60点以上で合格、60点未満で不合格とする。不合格の場合、再評価は願い出により1回行う。

■テキスト参考書など

■備考

GW＝グループワーク

■実務経験

人間理解とキャリア形成Ⅱ

講師：専任教員、松下 裕二、前田 知佳

単位数：1単位	時間数：15時間	授業学年：2学年
必修選択：必修		

■科目目標

本講義では、言語聴覚士を志す学生として、また将来言語聴覚士として長く歩むため、自立した価値観を持つことの重要性について学ぶため、自身を顧みること、先人の価値ある言葉を通じて、自己・他者の人間理解を深めていくことが目標である。

また対人関係構築の基礎的な視点を身に付けるため、マナーアップに触れる機会を設け、具体的に実践する機会につながることを期待している。前学年での講義後の各人の経験を本講義に反映することで、より印象的な効果を実感してもらいたい。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	自身のキャリアの変化について客観視する。	GW 演習	
2	臨床実習・就業を意識したキャリアデザインを意識・視覚化する(1)	GW 演習	
3	臨床実習・就業を意識したキャリアデザインを意識・視覚化する(2)	GW 演習	
4	臨床実習・就業に活用できるソーシャルスキルを体験する。	GW 演習	
5	マナーアップの実践例を体験する（1）	演習	
6	マナーアップの実践例を体験する（2）	演習	
7	就業者からの職能体験例をもとに職業イメージを強くする (1) 役割分担から周囲に意図を伝え、また聴取し情報取得のプロセスを実行につなげる。	GW 演習	前講までに学んだソーシャルスキルを活用する。
8	就業者からの職能体験例をもとに職業イメージを強くする (2) 情報取得のプロセスを実行後に、フィードバックの方向性と内容を確認する。	GW 演習	前講までに学んだソーシャルスキルを活用する

■受講上の注意

授業活動の状況や施設使用状況により、上記の内容や順番を一部変更する場合がある。

■成績評価の方法

テーマごとのレポート（提出物）評価にて行う。

※全体評価60点以上で合格、60点未満で不合格とする。不合格の場合、再評価は願い出により1回行う。

■テキスト参考書など

■備考

GW＝グループワーク

■実務経験

学びの基礎と発展Ⅰ

講師：専任教員

単位数：1単位	時間数：30時間	授業学年：1学年
必修選択：必修		

■科目目標

本講義の「学び」には、教科学習そのものだけでなく、さまざまな「学び」の形を含む。学びの方略を正しく持つこと、複数持つことは生涯学習の上で非常に有効である。それらを知識をして得て、体験することはその後の個々の成長における学びのあり方に応用される。その中には独りでの学びだけでなく、複数人によるグループあるいはそれに類する方略も含まれ、学校という環境下でしか経験しづらい学び方もある。自身の目指す学習や成長に対していかに効果的・積極的に取り組めるか、具体的な方略を通して手ごたえを得て欲しい。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	予習と復習のグループワークを体験する(1)	GW演習	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
2	予習と復習のグループワークを体験する(2)	GW演習	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
3	情報共有の方法、5択への対応を知る	GW演習	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
4	まとめ・実力テスト	筆記試験	
5	領域別対応のグループワークの有用性を理解する(1)	GW演習	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
6	領域別対応のグループワークの有用性を理解する(2)	GW演習	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
7	情報共有の実践を経験する(1)	GW演習	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
8	情報共有の実践を経験する(2)	GW演習	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
9	実力テスト（模試形式）	筆記試験	
10	実力テスト（模試形式）	筆記試験	
11	まとめとフィードバック	GW演習	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
12	グループワークで知識を共有する方略を活用する	GW演習	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
13	グループワークで知識を共有する必要性を理解する	GW演習	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
14	グループワークで知識を共有する方略を活用する	GW演習	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
15	まとめ・実力テスト	筆記試験	

■受講上の注意

授業活動の状況や施設使用状況により、上記の内容や順番を一部変更する場合がある。

■成績評価の方法

中間試験・本試験結果を合算とする。
※全体正答率60%以上で合格、60%未満で不合格とする。不合格の場合、再試験は願い出により1回行う。

■テキスト参考書など

関連科目の指定教科書等、適時資料配付を予定

■備考

GW＝グループワーク

■実務経験

学びの基礎と発展Ⅱ

講師：専任教員

単位数：2単位　時間数：60時間　授業学年：2学年

必修選択：必修

■科目目標

本講義の「学び」には、教科学習そのものだけでなく、さまざまな「学び」の形を含む。学びの方略を正しく持つこと、複数持つことは生涯学習の上で非常に有効である。それらを知識をして得て、体験することはその後の個々の成長における学びのあり方に応用される。その中には独りでの学びだけでなく、複数人によるグループあるいはそれに類する方略も含まれ、学校という環境下でしか経験しづらい学び方もある。自身の目指す学習や成長に対していかに効果的・積極的に取り組めるか、具体的な方略を通して手ごたえを得て欲しい。本講義は1年次に行った方略を改めて踏襲する部分とより応用的に活用する部分に分けられる。1年間を通して工夫と実践を重ね生涯の学びにつなげて欲しい。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	領域別の予習と復習のグループワークを実践する(1)	GW演習	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
2	領域別の予習と復習のグループワークの課題を抽出し対応を検討する	GW演習	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
3	領域別の予習と復習のグループワークを実践する(2)	GW演習	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
4	まとめ・実力テスト	筆記試験	
5	前期講義の振返りと個人・グループワークでの対応を検討する	GW演習	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
6	個人・グループでの学習方略を実践する(1)	GW演習	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
7	個人・グループでの学習方略を実践する(2)	GW演習	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
8	個人・グループでの学習方略を実践する(3)	GW演習	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
9	個人・グループでの学習方略を実践する(4)	GW演習	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
10	実力テスト（模試形式）	筆記試験	
11	実力テスト（模試形式）	筆記試験	
12	まとめとフィードバック	GW演習	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
13	実力テストの振返りと個人・グループワークでの対応を検討する	GW演習	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
14	個人・グループでの学習方略を実践する(5)	GW演習	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
15	個人・グループでの学習方略を実践する(6)	GW演習	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
16	個人・グループでの学習方略を実践する(7)	GW演習	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
17	個人・グループでの学習方略を実践する(8)	GW演習	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
18	実力テスト（模試形式）	筆記試験	
19	実力テスト（模試形式）	筆記試験	
20	まとめとフィードバック	GW演習	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
21	実力テストの振返りと個人・グループワークでの対応を検討する	GW演習	GWと個別学習を適宜切り替えて行う

22	個人・グループでの学習方略を実践する(9)	GW 演習	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
23	個人・グループでの学習方略を実践する(10)	GW 演習	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
24	個人・グループでの学習方略を実践する(11)	GW 演習	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
25	個人・グループでの学習方略を実践する(12)	GW 演習	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
26	まとめ・実力テスト	筆記試 験	
27	後期講義の振返りと個人・グループワークでの対応を検討する	GW 演習	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
28	個人・グループでの学習方略を実践する(13)	GW 演習	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
29	個人・グループでの学習方略を実践する(14)	GW 演習	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
30	個人・グループでの学習方略を実践する(15)	GW 演習	GWと個別学習を適宜切り替えて行う

■受講上の注意

授業活動の状況や施設使用状況により、上記の内容や順番を一部変更する場合がある。

■成績評価の方法

中間試験・本試験結果を合算とする。
※全体正答率60%以上で合格、60%未満で不合格とする。不合格の場合、再試験は願い出により1回行う。

■テキスト参考書など

関連科目の指定教科書等、適時資料配付を予定

■備考

GW＝グループワーク

■実務経験

基礎教育学

講師：髙谷 哲也

単位数：1単位　時間数：30時間　授業学年：2学年

必修選択：必修

■科目目標

教育学分野の基礎的な専門知見を学ぶ。

人間が成長するうえで教育が果たす役割、教えることと学ぶことの関係、生涯にわたり学び続けていくということの意味などについて、理解を深めてもらう。加えて、ものごとを教育学的にみることのできる力を獲得することに重きを置く。そのため、実際に他者と協力しながら学ぶ演習に取り組みながら、そこから専門的な概念や事象の意味を理解したり、様々な学び方を身につけたりする学習方法も獲得してもらう。

基礎的な教育学の専門的概念やものの見方を獲得し、医療やヒューマンサービス分野における営みに自身の力で応用していける専門的力量を身につけてもらう。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	「教育学」という学問の特徴と本授業の進め方を体験する	演習・GW	不安な事があれば遠慮なくお知らせください。
2	学習における自己評価の役割と重要性について理解する	講義・GW・映像視聴	グループでの演習の進め方のコツをつかめるよう意識しましょう。
3	学びと知識獲得のメカニズムについて自身の経験と関連づけて理解する	講義・GW	グループでの演習の進め方のコツを覚えましょう。
4	理想の教育像が経験に左右されることを理解する	講義・GW・映像視聴	自分と価値観・考え方が異なる人に真摯に学ぶスタイルを獲得しましょう。
5	子どもの成長を促す要素について理解する	講義・GW・映像視聴	他者と対話をしやすい空気の作り方を意識しましょう。
6	学習者の成長可能性への着目の重要性を理解する	講義・GW・映像視聴	自分の考えを正確に伝えることを意識しましょう。
7	成長における挑戦と失敗の意味について理解する	講義・GW・映像視聴	自分たちで学びを創りあげる学習に挑戦してもらいます。
8	教育と学習、教えることと学ぶことの関係を整理する	演習・GW	自分たちで学びを創りあげる際に必要なことを意識しましょう。
9	集団の中での学びと社会化について理解する	演習・GW・映像視聴	自分の力だけでは不安な時に、いかに上手に助けを借りるかに挑戦しましょう。
10	学習者の内面にある想いについて想像することのできる知識と力を獲得する	講義・演習・GW	これまでの学びの自分なりの意味づけ・意義づけをする学び方を経験しましょう。
11	教育におけるメディアの概念を理解する	講義・演習・GW	難解な概念や文章を読み解く際に、他者の力をいかに借りるかを考えましょう。
12	院内学級における教師の子どもとの向き合い方に学ぶ	講義・GW・映像視聴	映像資料を細部まで観察しながら視聴することを心がけましょう。
13	「省察」を通した専門職の成長について学ぶ	講義・GW・映像視聴	自分を客観視・メタ認知できるようになるために何が必要か復習しておきましょう
14	学習における相互評価の意味と「ほめる」ことの本質について理解する	講義・GW	他者の課題に対してフィードバックする際の心がけを意識して取り組みましょう。
15	本授業を通した学びをふり返り、最終課題を完成させる	講義・演習試験	個人の力と他者と協働する力の両面を発揮して最終課題に取り組みましょう。

■受講上の注意

他者と協力しながら学ぶ機会を多く設定しているため、互いに学びを楽しめるためには何が必要かを考えるとともに、遠慮なく他者の力を借りることができるようになってもらいたい。

■成績評価の方法

1. 各回の演習・議論への取り組み状況、提出ワークシートの評価（20%）
2. 各回の演習・思考内容を記載していく記録シートの評価（30%）
3. 最終課題（50%）

※全体正答率60%以上で合格、60%未満で不合格とする。不合格の場合、再試験は願い出により1回行う。

■テキスト参考書など

【参考書】木村元編（2015）『系統看護学講座 基礎分野 教育学』医学書院

■備考

授業では適宜資料を配付する。

GW＝グループワーク

■実務経験

日本語学

講師：山下 直子

単位数：1単位	時間数：15時間	授業学年：1学年
必修選択：必修		

■科目目標

①様々なポイントから日本語のしくみを理解し、他の人にも簡単に説明できる。
②自分がどんな日本語使用者であるのかを客観的に振り返ることができる。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	私のことばを知る：自分の母語について客観的に振り返ることができる。	GW 講義	4年間学び合うクラスメートのことを知る機会として、積極的にワークに参加してください。
2	日本語のことばと文字①：日本語の語彙の種類の特徴がわかる。	GW 講義	
3	日本語のことばと文字②：日本語の文字と表記の特徴がわかる。	GW 講義	グループワークではスマートフォンを活用します。
4	日本語のルール：文法から見た日本語の特徴がわかる。	GW 講義	
5	日本語の使い分け①：〈やさしい日本語〉を通して、相手や場面による日本語の使い分けができる。	GW 講義	
6	日本語の使い分け②：〈要約筆記〉を通して話し言葉と書き言葉の違いがわかる。	GW 講義	
7	ことばを使わない日本語表現：日本語のジェスチャーや日本人の会話の特徴がわかる。	GW 講義	グループワークではスマートフォンを使用します。
8	私のことばを語る：日本語の特徴について、他の人に自分のことばで説明できる。	GW 講義	最終レポートの詳しい説明も行います。

■受講上の注意
①グループワークやペアワークを多く行いますので、積極的に参加してください。
②予習の必要はありませんが、復習・振り返りはぜひ行ってください。

■成績評価の方法
最終レポートで評価を行います。（最終講義終了後、期日内に提出。）
構成（10%）、内容（80%）、表現（10%）。 詳細は最終講義で詳しく説明します。

■テキスト参考書など

なし。

■備考
毎回の授業でプリント等を配付します。
各自、配付資料をしっかり自己管理してください。

■実務経験

日本語音声学

講師：山下 直子

単位数：1単位	時間数：15時間	授業学年：1学年
必修選択：必修		

■科目目標

①日本語の音のしくみがわかる。
②日本語の話し方の特徴がわかる。
③自分の話し方の特徴に気づける。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	日本語のリズム①：日本語のアクセントの基本がわかる。	GW 講義	
2	日本語のリズム②：さまざまなアクセントを正確に聞いたり書いたりできる。	GW 講義	
3	日本語のリズム③： ・複合語のアクセントのルールが理解できる。 ・日本語のアクセントの特徴を自分のことばで説明できる。	GW 講義	
4	日本語のいろいろな音①：日本語の音のシステムの全体像がつかめる。	GW 講義	
5	日本語のいろいろな音②：日本語の調音点と調音法のシステムが理解できる。	GW 講義	他科目で学習済みの「音声器官」の図と名称を復習の上、授業に臨んでください。
6	日本語のいろいろな音③：日本語の調音点と調音法の詳細が正確に理解できる。	GW 講義	
7	発話の誤り：誤りのある発話を正確に聞き取り、その問題点が説明できる。	GW 講義	
8	復習と振り返り：日本語の音声的な特徴について、他の人に自分のことばで説明できる。	GW 講義	最終試験の詳しい説明も行います。

■受講上の注意
①グループワークやペアワークを多く行いますので、積極的に参加してください。
②予習の必要はありませんが、復習・振り返りは必ず行ってください。

■成績評価の方法
最終試験（筆記試験）で評価を行います。（最終講義終了後の別日に実施。）
試験は、聴解問題（40%）、多肢選択等の問題（60%）で構成されます。

■テキスト参考書など

なし。

■備考
毎回の授業でプリント等を配付します。
各自配付資料をしっかり自己管理してください。

■実務経験

英語Ⅰ

講師：飯田 敏博

単位数：1単位　時間数：30時間　授業学年：1学年

必修選択：必修

■科目目標

人気企業の社会的な取り組みを英語で学ぶ。授業の各回、Small Chat, Words and Phrases, Dictation, Pre-Knowledge, Speed Reading, Dialog, Expressionの構成で進める。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	7-ELEVEN（英語の4技能をバランスよく学ぶ）	講義・GW	音読を含む予習・復習をすること
2	LINE（英語の4技能をバランスよく学ぶ）	講義 GW	音読を含む予習・復習をすること
3	NISSIN FOODS（英語の4技能をバランスよく学ぶ）	講義 GW	音読を含む予習・復習をすること
4	McDonald's（英語の4技能をバランスよく学ぶ）	講義 GW	音読を含む予習・復習をすること
5	TOYOTA（英語の4技能をバランスよく学ぶ）	講義 GW	音読を含む予習・復習をすること
6	STARBUCKS（英語の4技能をバランスよく学ぶ）	講義 GW	音読を含む予習・復習をすること
7	AEON（英語の4技能をバランスよく学ぶ）	講義 GW	音読を含む予習・復習をすること
8	NIKE（英語の4技能をバランスよく学ぶ）	講義 GW	音読を含む予習・復習をすること
9	MUJI（英語の4技能をバランスよく学ぶ）	講義 GW	音読を含む予習・復習をすること
10	Apple（英語の4技能をバランスよく学ぶ）	講義 GW	音読を含む予習・復習をすること
11	Rakuten Group（英語の4技能をバランスよく学ぶ）	講義 GW	音読を含む予習・復習をすること
12	Amazon（英語の4技能をバランスよく学ぶ）	講義 GW	音読を含む予習・復習をすること
13	IKEA（英語の4技能をバランスよく学ぶ）	講義 GW	音読を含む予習・復習をすること
14	Dyson（英語の4技能をバランスよく学ぶ）	講義 GW	音読を含む予習・復習をすること
15	まとめ・終講試験	筆記試験	

■受講上の注意

テキストの練習問題は必ず解いてくること。予習・復習の際に英語の音読を行うこと。

■成績評価の方法

試験（80%）、授業における課題への取り組み状況（20%）

※全体正答率60%以上で合格、60%未満で不合格とする。不合格の場合、再試験は願い出により1回行う。

■テキスト参考書など

テキスト：Companies for Social Good（英語で学ぶ社会における企業の存在意義）　金星堂

■備考

資料のプリントは適宜配付する。

GW＝グループワーク

■実務経験

英語Ⅱ

講師：飯田 敏博

単位数：1単位	時間数：30時間	授業学年：1学年
必修選択：必修		

■科目目標

医療で使われる英語に親しむとともに、英語の4技能（聞き、話し、読み、書く）の基礎的な力を身に付けることができる。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	ポリオについて理解を深め、受診時の英語でのやりとりができる。	講義 GW	音読を含む予習・復習をすること
2	薬の処方箋について理解を深め、診察時の英語でのやりとりができる。	講義 GW	音読を含む予習・復習をすること
3	片頭痛や、気圧の変化などで生じる頭痛についての英語を理解できる。	講義 GW	音読を含む予習・復習をすること
4	薬について理解を深め、内科診察時の英語でのやりとりができる。	講義 GW	音読を含む予習・復習をすること
5	大腸癌に進行する可能性がある悪性のポリープについての理解を深める。	講義 GW	音読を含む予習・復習をすること
6	SARSについて理解を深め、気管支鏡を用いての検査に関わる表現を身につける。	講義 GW	音読を含む予習・復習をすること
7	復習テストで学習の理解度を測る。また、粘膜の潰瘍などについて学ぶ。	講義 GW	音読を含む予習・復習をすること
8	糖尿病のリスクについて英語での理解を深める。	講義 GW	音読を含む予習・復習をすること
9	動脈疾患について理解を深め、定期検査関連の表現を身につける。	講義 GW	音読を含む予習・復習をすること
10	アメリカにおける健康保険とホームドクターのやりとりを理解する。	講義 GW	音読を含む予習・復習をすること
11	アレルギー反応を抑える物質などについて理解する。	講義 GW	音読を含む予習・復習をすること
12	新型コロナ関連の英語表現やワクチンについての理解を深める。	講義 GW	音読を含む予習・復習をすること
13	内視鏡検査や胸やけなどについて理解を深め、関連表現を身につける。	講義 GW	音読を含む予習・復習をすること
14	中年期以降の身体的変化やホルモン治療について理解を深め、関連する英語表現を身につける。	講義 GW	音読を含む予習・復習をすること
15	まとめ・終講試験	筆記試験	

■受講上の注意

テキストの練習問題は必ず解いてくること。予習・復習の際に英語の音読を行うこと。

■成績評価の方法

試験（80%）、授業における課題への取り組み状況（20%）
※全体正答率60%以上で合格、60%未満で不合格とする。不合格の場合、再試験は願い出により1回行う。

■テキスト参考書など

テキスト：English for Medicine –Revised Edition–（医療・看護のためのやさしい総合英語　改訂版）　金星堂

■備考

資料のプリントは適宜配布する。
GW＝グループワーク

■実務経験

手話言語コミュニケーション

講師:上江 七美、戌亥 啓一

単位数:1単位	時間数:30時間	授業学年:1学年
必修選択:必修		

■科目目標

手話は聴覚障がい者にとって見える言語であり、大切なコミュニケーションの手段である。本講義で聴覚障がいについての基本的な理解と手話で日常会話と伝える能力を習得する。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	聴覚障がいとは？　指文字を覚えよう　自己紹介など	演習 GW	
2	指文字　自己紹介、家族などの手話表現	演習 GW	
3	あいさつ、返事あいづちなど	演習 GW	
4	現在、未来、過去　一週間	演習 GW	
5	数の表し方、時間	演習 GW	
6	天気、気候　今日の天気は？	演習 GW	
7	誘い、約束など	演習 GW	
8	気持ち　感情をあらわす表現	演習 GW	
9	尋ねる　対になる手話	演習 GW	
10	都道府県、いろいろな地名など	演習 GW	
11	体調、病気、医療に関する表現	演習 GW	
12	総復習	演習 GW	
13	コミュニケーション手段①	演習 GW	
14	コミュニケーション手段②	演習 GW	
15	試験とまとめ	試験、解説	

■受講上の注意

授業活動の状況や施設使用状況により、上記の内容や順番を一部変更する場合がある。

■成績評価の方法

終講試験正答60点以上で合格、60点未満で不合格とする。不合格の場合、再試験は願い出により1回行う。

■テキスト参考書など

オールカラーやさしくわかるはじめての手話. ナツメ社

■備考

授業では適宜資料を配付する。

■実務経験

コンピュータサイエンス

講師：小牧 祥太郎

単位数：1単位	時間数：30時間	授業学年：1学年
必修選択：必修		

■科目目標

昨今、医療現場においても適切な情報活用・管理が求められている。適切な管理・運用が行えない場合、情報漏洩リスクが高まり、施設・個人に対して脅威を与えることとなる。本講義では、情報活用に関する運用や管理について学び、情報モラルに関する理解を深めた後、昨今医療機関でも通常業務として使用が一般的となっているコンピューターの使用に関して基本的な操作を習得していく。また、本校の情報通信環境を活用するほか、個人所有のパーソナルコンピューター、スマートフォンを学習や情報取得手段として有効活用する方法を学ぶ。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	学内の情報通信環境（Free Wi-Fi、コンピューター室の利用、アクセス手段、端末・電源等の管理について）について理解を深め、本校において使用するオンラインコミュニケーションツール（Microsoft Teams（以下、Teams））メールソフト、クラウドの使用環境を整備する。	講義・グループワーク	コンピューター室にて実施予定。
2	講義管理（出席・修得状況）ソフトなどの情報通信環境の整備と利用の仕方について学ぶ。 今後の学習や実習で使用に耐えうるコンピュータースペックについて知り、遠隔デジタルデータの管理について学び、情報管理について理解する。	講義・グループワーク	コンピューター室にて実施。 Teamsのパスワードを把握しておくこと。
3	コンピューターの挙動を理解し、Windowsの基本操作になれる。 Microsoft Office Word（以下、Word）の基本操作に慣れる。	講義・グループワーク	コンピューター室にて実施。 Teamsのパスワードを把握しておくこと。
4	Wordの応用操作（図や表の挿入）を習得する。 Wordで作成したデータのPDFへの変換方法を習得する。	講義・グループワーク	コンピューター室にて実施。 Teamsのパスワードを把握しておくこと。
5	メールソフトの利用方法、メールマナーについて学ぶ。 （添付ファイルのPDF化処理など含む）	講義・グループワーク	コンピューター室にて実施。 Teamsのパスワードを把握しておくこと。
6	Microsoft Office PowerPoint（以下、PowerPoint）の基本的な操作を学ぶ。 PowerPointにて自己紹介スライドの大枠を作成する。	講義・グループワーク	コンピューター室にて実施。 Teamsのパスワードを把握しておくこと。
7	作成中の自己紹介スライド（PowerPoint）へ審美的な装飾方法を学ぶ（アニメーションや図・表の挿入等）。	講義・グループワーク	コンピューター室にて実施。 Teamsのパスワードを把握しておくこと。
8	作成中の自己紹介スライド（PowerPoint）の発表準備（仕上げ）とメール添付での送付を行う。	講義・グループワーク	コンピューター室にて実施。 Teamsのパスワードを把握しておくこと。
9	PowerPointにて作成した自己紹介スライドの発表を行う。 インタラクティブ投票ツールを用いて、自己紹介スライドへの好意的な評価を行う。	講義・グループワーク	コンピューター室にて実施。 Teamsのパスワードを把握しておくこと。
10	PowerPointにて作成した自己紹介スライドの発表を行う。 インタラクティブ投票ツールを用いて、自己紹介スライドへの好意的な評価を行う。	講義・グループワーク	コンピューター室にて実施。 Teamsのパスワードを把握しておくこと。
11	Microsoft Office Excel（以下、Excel）の行・列などの基本的な操作を学ぶ。	講義・グループワーク	コンピューター室にて実施。 Teamsのパスワードを把握しておくこと。
12	Excelの基本操作を学ぶ（データ入力操作、簡易な計算（合計・平均）について）。	講義・グループワーク	コンピューター室にて実施。 Teamsのパスワードを把握しておくこと。
13	Excelの基本操作を学ぶ（書式設定等について）。	講義・グループワーク	コンピューター室にて実施。 Teamsのパスワードを把握しておくこと。
14	Excelの応用操作を学ぶ（グラフの作成、可能なら条件判断・処理分岐まで）。 模擬試験を行う。	講義・グループワーク	コンピューター室にて実施。 Teamsのパスワードを把握しておくこと。
15	試験・解説（あるいはまとめ）	試験・講義	コンピューター室にて実施。 Teamsのパスワードを把握しておくこと。

■受講上の注意

毎回の成果物はクラウドにて保存を行う。それにあたり、Teamsのパスワードは把握しておくようにする事。
講義状況によって、上記の内容や順番を変更する場合もある。また、講義内容に応じて遠隔講義を実施する場合もある。

■成績評価の方法

本試験、再試験ともに60％以上を合格とする。

■テキスト参考書など

適宜、資料を配布する。
（基本的には、コンピューター上でデータ資料にて配布を行う）

■備考

基本的にコンピューター室にて講義を行う。

■実務経験

本科目は言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

データサイエンス

講師：小牧 祥太郎

単位数：1単位	時間数：30時間	授業学年：3学年
必修選択：必修		

■科目目標

データの入手・管理・活用方法について学び、データから事象を読み解く力を養う。
また、AIを活用した次世代のツールへの造詣も深め、情報リテラシーの向上を図る。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	ChatGPTやPerplexity AIなどのAIを活用し、講義・学習で必要となる情報取得手段について学ぶ（文献検索・オンライン検索方法など）。各種成果物（レポート）等で根拠として使用する、引用文献の引用方法・リストの作成について学ぶ。	講義・グループワーク	コンピューター室にて実施。Microsoft Teamsのパスワードを把握しておくこと。
2	尺度水準を理解し，データを図表で表すことができる。	講義・グループワーク	該当箇所の復習を行う事。
3	代表値の意味を理解し、求めることができる。	講義・グループワーク	該当箇所の復習を行う事。
4	散布度の意味を理解し、求めることができる。	講義・グループワーク	該当箇所の復習を行う事。
5	標準化の意味を理解し、求めることができる。	講義・グループワーク	該当箇所の復習を行う事。
6	相関係数の意味を理解し、求めることができる。	講義・グループワーク	該当箇所の復習を行う事。
7	推測統計学の考え方を理解できる。	講義・グループワーク	該当箇所の復習を行う事。
8	母集団と標本について理解できる。	講義・グループワーク	該当箇所の復習を行う事。
9	正規分布、不偏性について理解できる。	講義・グループワーク	該当箇所の復習を行う事。
10	2つの平均値の差の検定を行うことができる。	講義・グループワーク	該当箇所の復習を行う事。
11	3つ以上の平均値の差の検定を行うことができる。	講義・グループワーク	該当箇所の復習を行う事。
12	複数の変数の連関を調べることができる（回帰分析など）。	講義・グループワーク	該当箇所の復習を行う事。
13	プログラミングを通して、論理的な思考・問題解決能力を学ぶ（Code.org®を用いて）。	講義・グループワーク	コンピューター室にて実施。Microsoft Teamsのパスワードを把握しておくこと。
14	最新の情報技術と情報サービスについて理解を深める。 AI（従来AI・生成AI）の医療・教育活用について学ぶ。	講義・グループワーク	コンピューター室にて実施。Microsoft Teamsのパスワードを把握しておくこと。
15	試験・解説（あるいはまとめ）	試験・講義	

■受講上の注意

講義中の内容で分からないところは積極的に質問し、理解に努めること。

■成績評価の方法

本試験、再試験ともに60％以上を合格とする。

■テキスト参考書など

独自の資料
参考書：『公認心理師ベーシック講座　心理学統計法』 芝田征司（著） 講談社

■備考

コンピューター室を使用して講義を行う事がある。

■実務経験

本科目は言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

研究入門

講師:松尾 康弘

単位数:1単位	時間数:15時間	授業学年:1学年
必修選択:必修		

■科目目標

高度専門士を目指す学生としてとして研究法を理解することは重要である。「言語聴覚研究Ⅰ・Ⅱ」につながる研究活動の基礎を理解したい。

①適切な用語を使用し文章表現ができる ②論文の構成を理解する ③既存の論文や教科書を検索する方法を学ぶ ④引用・参考を活用できるようになる ④事実を基に考察できるようになる ⑤適切な用語を使用し発表ができる 以上を本講義の目標とする。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	研究について概要を理解する、研究の流れを把握し、今後の活動をイメージする	講義 演習	あいまいな点を指導者に確認するためリストアップする
2	担当指導者との調整を行い、段階を踏んだ具体的な流れを知る	講義 演習	担当指導者との連絡手段を確認する
3	担当指導者との調整を重ね、情報収集、テーマ設定のための活動を進める(1)	講義 演習	担当指導者と積極的な調整を図る
4	担当指導者との調整を重ね、情報収集、テーマ設定のための活動を進める(2)	講義 演習	担当指導者と積極的な調整を図る
5	企画書の作成、計画立案を通して、研究の流れを把握する	講義 演習	担当指導者と積極的な調整を図る
6	情報収集とデータ収集の方法を活動を通して知る	講義 演習	担当指導者と積極的な調整を図る
7	情報の分析と活用の具体的流れを経験し、図表作成および文章化する	講義 演習	担当指導者と積極的な調整を図る
8	発表会	講義 演習	担当指導者と積極的な調整を図る

■受講上の注意

本講義は担当指導役との個別指導を中心に実施される

■成績評価の方法

発表内容およびその他代替と認められる実績にて評価する。

■テキスト参考書など

適宜使用

■備考

■実務経験

本科目は言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

健康とスポーツ

講師：寺前 重幸、酒匂 久光、専任教員

単位数：1単位	時間数：30時間	授業学年：1学年
必修選択：必修		

■科目目標

バレーボール及びバスケットボールの基本的な動きを身につける。さらに、スポーツを通じて、コミュニケーション能力の向上やストレスの軽減を図り、日常生活の中で、運動をする習慣を身につける。また、健康について考え理解し、健康的な生活を送れるようになる。

本講義では、障害者スポーツとそれに関わるリハビリテーションについても学習する。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	科目目標をしっかり理解し、バレーボール及びbasketballのルールをしっかり理解できる。	講義・実技	教室でガイダンスを行い、体育館へ移動するので体育ができる服装に着替えてから、教室で待機する。
2	パス及びサーブができる（バレーボール）	実技	体育ができる服装・シューズを準備する。
3	ゲームでの一連の動きができる（バレーボール）	実技	体育ができる服装・シューズを準備する。
4	パス、ドリブル及びシュートができる（バスケットボール）	実技	体育ができる服装・シューズを準備する。
5	ゲームでの一連の動きができる（バスケットボール）	実技	体育ができる服装・シューズを準備する。
6	自分たちで競技を選び実施できる（選択競技）	実技	体育ができる服装・シューズを準備する。
7	自分たちで競技を選び実施できる（選択競技）	実技	体育ができる服装・シューズを準備する。
8	健康（健康・生活習慣病・食育・運動・休養・喫煙）について理解できる。	講義	事前にプリントを配布するので、講義までに読んでおく。
9	健康（飲酒・薬物乱用・感染症・応急手当・心の健康）について理解できる。	講義	事前にプリントを配布するので、講義までに読んでおく。
10	リハビリテーションの役割とその職域を学ぶ。	講義	事前に資料を配布します。
11	リハビリテーション機器を体験する。	実技	機能訓練室で行う。運動できる服装で受講してください。
12	障がい者スポーツを体験する(1)	実技	体育館で行います。運動できる服装で受講してください。
13	障がい者スポーツを体験する(2)	実技	体育館で行います。運動できる服装で受講してください。
14	障がい者スポーツを体験する(3)	実技	体育館で行います。運動できる服装で受講してください。
15	授業の総括及び終講試験	講義 試験	

■受講上の注意

運動できる服装及び体育館用運動シューズを用意すること。忘れ物の無いようにし、規範意識を持ち、積極的に講義に臨むこと。
配布する資料を忘れずに、講義内容はこまめに追記し、主体的に臨んでください。

■成績評価の方法

平常点（30%）、実技点（40%）、試験・課題レポート（30%）により、本試験、再試験ともに総合的に評価する。
※全体正答率60%以上で合格、60%未満で不合格とする。不合格の場合、再試験は願い出により1回行う。

■テキスト参考書など

適宜資料を配付

■備考

■実務経験

からだのしくみ入門Ⅰ

講師:桑木 共之

単位数:1単位	時間数:30時間	授業学年:1学年
必修選択:必修		

■科目目標

高校時代に生物を選択しなかった学生も含めて、生物学ひいては人体に興味を持ち自ら学ぶ動機付けを得る。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	オリエンテーション:自己紹介と授業の進め方、学習の意義	講義	
2	地球、生物、人間の歴史	講義	
3	遺伝子と細胞	講義	
4	体液と尿	講義	
5	血液と免疫	講義	
6	血液循環、心臓とドキドキ	講義	
7	呼吸と発声	講義	
8	食欲および消化吸収	講義	
9	恒常性の維持、概日リズム	講義	
10	熱中症と体温調節	講義	
11	生殖と性と男と女	講義	
12	発達と老化	講義	
13	感染症とがん	講義	
14	脳と心	講義	
15	終講試験とまとめ	筆記試験	

■受講上の注意

中学や高校で学習した生物学の教科書を復習しておく。

■成績評価の方法

終講試験評価60点以上で合格、60点未満で不合格とする。不合格の場合、再試験は願い出により1回行う。

■テキスト参考書など

適宜配付

■備考

■実務経験

からだのしくみ入門Ⅱ

講師：小牧 祥太郎

単位数：1単位	時間数：15時間	授業学年：1学年
必修選択：必修		

■科目目標

呼吸、発声、発語に関わる器官の基本的な仕組みや機能を理解し、それらがどのように協力して音声や言葉を作り出すかを学ぶ。また、これらの知識を通じて、日常生活や専門的な場面での発声や発語に関する問題に対する理解を深めることを目指す。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	発声・発話を行うための発話発語器官の全体像について学ぶ。	講義	講義資料を読んでおくことが望ましい。
2	発話の動力源としての呼吸器系の解剖について学ぶ。	講義	講義資料を読んでおくことが望ましい。
3	発話の動力源としての呼吸器系の機能について学ぶ。	講義	講義資料を読んでおくことが望ましい。
4	発声を中心とした喉頭の解剖について学ぶ。	講義	講義資料を読んでおくことが望ましい。
5	発声を中心とした喉頭の機能について学ぶ。	講義	講義資料を読んでおくことが望ましい。
6	共鳴を中心とした鼻腔・咽頭（鼻咽腔閉鎖）の解剖・機能について学ぶ。	講義	講義資料を読んでおくことが望ましい。
7	調音を中心とした口腔構音器官の解剖・機能について学ぶ。	講義	講義資料を読んでおくことが望ましい。
8	試験・解説（あるいはまとめ）	試験・講義	

■受講上の注意

授業活動の状況により、上記の内容や順番を一部変更する場合もある。

■成績評価の方法

本試験、再試験ともに60％以上を合格とする。

■テキスト参考書など

資料を配布する。

■備考

講義内容に応じて遠隔講義を実施する場合もある。

■実務経験

本科目は言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

からだのしくみ入門Ⅲ

講師：小牧 祥太郎

単位数：1単位	時間数：15時間	授業学年：1学年
必修選択：必修		

■科目目標

神経系の基本的な構造と機能を理解し、脳や神経がどのように体のさまざまな部分と連携して情報を伝達するかを学ぶ。また、神経系の状態と日常生活におけるその重要性についての理解を深め、専門的な知識の基礎を築くことを目指す。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	神経細胞（灰白質）と神経線維（白質）の違いを理解し、神経の伝達方法（機序や神経伝達物質等）を学ぶ。また、大脳を中心に神経系の概要を把握し、簡潔に他者へ説明できるようになる。	講義	使用テキストを読んでおくことが望ましい。
2	中枢神経系（大脳・辺縁系・基底核・間脳・脳幹・小脳・脊髄）の機能について学ぶ。	講義	使用テキストを読んでおくことが望ましい。
3	中枢神経系を灌流する循環系（血液循環・髄液循環）について学ぶ。	講義	使用テキストを読んでおくことが望ましい。
4	神経系の問題により生じる全般的な症状（意識障害・頭痛）について学ぶ。	講義	使用テキストを読んでおくことが望ましい。
5	運動系の概要と運動障害について学ぶ。	講義	使用テキストを読んでおくことが望ましい。
6	末梢神経系として脳神経系の特徴と各神経の違いについて学ぶ（概要）。	講義	使用テキストを読んでおくことが望ましい。
7	末梢神経系として脳神経系の特徴と各神経の違いについて学ぶ（検査）。	講義・演習	使用テキストを読んでおくことが望ましい。
8	試験・解説（あるいはまとめ）	試験・講義	

■受講上の注意

授業活動の状況により、上記の内容や順番を一部変更する場合もある。

■成績評価の方法

本試験、再試験ともに60％以上を合格とする。

■テキスト参考書など

病気が見える vol.7 第2版　発行：メディックメディア

■備考

講義内容に応じて遠隔講義を実施する場合もある。

■実務経験

本科目は言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

からだのしくみ入門Ⅳ

講師：戌亥 啓一

単位数：1単位	時間数：15時間	授業学年：1学年
必修選択：必修		

■科目目標

ここでは「耳」「きこえ」をテーマに、言語聴覚士として活躍する上での本分野に対する興味関心を持ち、また、後に専門基礎分野で履修する解剖生理学に向けた基盤づくりを目指す。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	きこえと音の不思議について知り、興味関心をもつ。	講義	
2	きこえと音の科学と心理について知り、興味関心を持つ。	講義	
3	耳の構造と機能（外耳）について知り、理解を深める。	講義	
4	耳の構造と機能（中耳）について知り、理解を深める。	講義	
5	耳の構造と機能（内耳：蝸牛、前庭、半規管）について知り、理解を深める。	講義	
6	耳の構造と機能（内耳：特に蝸牛）について知り、理解を深める。	講義	
7	耳の構造と機能（後迷路）について知り、理解を深める。	講義	
8	試験・まとめ	試験	

■受講上の注意

授業活動の状況や施設使用状況により、上記の内容や順番を一部変更する場合がある。

■成績評価の方法

終講試験評価にて60点以上で合格、60点未満で不合格とする。不合格の場合、再試験は願い出により1回行う。

■テキスト参考書など

関連教科書：病気が見える vol.13 第2版. メディックメディア、標準言語聴覚障害学　聴覚障害学 第3版. 医学書院、聴覚検査の実際　第5版. 南山堂

■備考

■実務経験

本科目は言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

人体の構造

講師：津山 新一郎

単位数：1単位	時間数：30時間	授業学年：1学年
必修選択：必修		

■科目目標

高校までの課程では解剖学という捉え方はないのでヒトの身体の成り立ちの理解を顕微解剖、肉眼解剖レベルから理解する。細胞、組織から器官系統までの段階を追ってかたちと機能の観点からの理解を目標とする。ヒトの身体を言語聴覚(療法)士としての minimum requirement 的観点から、考える習慣を身につける。細胞、組織レベルでは細胞間の識別、組織の機能の把握を中心にすえる。器官系では運動器(骨、筋)は頭頚部を中心にし、体肢等は省略する。心臓・脈管系については基本的事項であるのでしっかり把握する。消化・呼吸器系については系全体を理解すると同時に咽頭、嚥下の機構、気道・喉頭発声のメカニズムについては特に理解を深くする。泌尿・生殖器、内分泌器に関してはbaseとなる事項の理解と、発生の初期が生後にどうかかわるかだけの把握に留める。感覚器、神経系について聴覚に関わる脳および脳神経、聴覚器は特に理解を深めておきたい。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	細胞の構造の理解。細胞膜、細胞小器官の働きが理解できる。	講義と演習	人体を考える際の階層性の考察
2	4大組織の機能と器官での働きが理解できる。	講義と演習	運動器としての骨と筋の関連付け
3	ヒトの身体の支柱としての全身の骨格が理解できる。	講義と演習	骨格模型利用で全体の把握
4	全身の筋の概略と頭頚部と咽・喉頭の筋の働きが理解できる。	講義と演習	運動器としての骨と筋の関連付け
5	心臓の成り立ちと機能を理解できる。	講義と演習	心臓の位置・形態と機能の把握
6	全身の脈管がどのように拡がり機能するかを理解できる。	講義と演習	脈管の流れ・分布と意義の理解
7	内臓系：消化器の成り立ちの全体的理解。	講義と演習	消化管の構成と働きの関連付け
8	内臓系：嚥下運動の動作機構を理解できる。	講義と演習	嚥下を筋と神経を組合せて考える
9	内臓系：呼吸器の動作機構及び発声機構を理解できる。	講義と演習	気道と発声器の関連性の理解
10	内臓系：泌尿・生殖器の成り立ち、内分泌器の構成と相互作用の理解。	講義と演習	腎機能・造生殖細胞機能の把握
11	神経系：中枢神経の成り立ちが理解できる。	講義と演習	神経系を中枢と末梢に分けて理解
12	神経系：脳神経が理解できる、特に内耳神経の理解度を深める。	講義と演習	脳神経と機能･意義の組合せ把握
13	感覚器の機能・構成　皮膚・眼器等における知覚受容が理解できる。	講義と演習	感覚器の受容細胞の比較把握
14	感覚器の機能・構成、平衡聴覚器、内耳の有毛細胞の働きが理解できる。	講義と演習	コルチ器の形態・知覚機構の把握
15	纏めと終了試験		

■受講上の注意

解剖は範囲が広い。形態と機能の関連付けを徹底する。 人体に対する尊厳を忘れない。

■成績評価の方法

最終試験と平常点（出席　演習など）で評価する　中間試験30%, 終了試験70%の合算を最終試験とする。
※全体評価60%以上で合格、60%未満で不合格とする。不合格の場合、再試験は願い出により1回行う。

■テキスト参考書など

テキスト：入門人体解剖学（改訂6版）　藤田恒夫著　南江堂

■備考

プリント資料：レジュメを用意するので目を通しておくこと。

■実務経験

人体の機能

講師：笠井 聖仙

単位数：1単位	時間数：30時間	授業学年：1学年
必修選択：必修		

■科目目標

「人体の構造・機能・病態Ⅱ」を通して、高度に複雑化した人体の生存に必須の機能について学習するが、次のようなことを目標にして学習してほしい。
1　人体を構成する基本的な細胞や組織の機能について説明できる。DNAの異常における病態を説明できる。
2　約1日のリズムである概日リズムをそのメカニズムとリズム異常による疾病や医学における応用について説明できる。
3　身体が外界からの刺激を感知し応答する特殊感覚や神経系の基本的な機能について説明できる。
4　内分泌系が神経系と密接に関連してはたらき、人体のあらゆる細胞の活動を制御することを説明できる。内分泌系の異常による疾病を説明できる。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	一般的な細胞の機能を理解し、細胞膜の主な機能を理解し説明できる。	講義	授業内容の要約資料を事前に一読し、教科書の図表に目を通しておく。
2	細胞内小器官や核の主な機能を説明できる。	講義	授業内容の要約資料を事前に一読し、教科書の図表に目を通しておく。
3	概日リズムが内因性のものであり、その具体的な例とメカニズムついて理解し説明できる	講義	授業内容の要約資料を事前に一読し、教科書の図表に目を通しておく。
4	概日リズムが各種生理機能に見られ、疾病の発現に関与することを具体的な例をあげて理解し説明できる。また、概日リズムリズムの乱れにより胃腸障害、循環器障害、睡眠リズムの乱れが起こることを理解し説明できる。	講義	授業内容の要約資料を事前に一読し、教科書の図表に目を通しておく。
5	外界の刺激が特異的受容器により感知され、脳への投射に活動電位という信号で伝えられることを理解し説明できる。	講義	授業内容の要約資料を事前に一読し、教科書の図表に目を通しておく。
6	聴覚と平衡感覚受容機構を理解し説明できる。	講義	授業内容の要約資料を事前に一読し、教科書の図表に目を通しておく。
7	嗅覚・味覚の受容機構とそれらの社会的意義について説明できる。生きるための味覚、楽しむための味覚の違いについて説明できる。味覚障害はどのようなものがあるか、その治療法について理解し説明できる。	講義	授業内容の要約資料を事前に一読し、教科書の図表に目を通しておく。
8	生体の警告信号系としての痛みについて理解し説明できる。慢性痛発症機序について理解する。	講義	授業内容の要約資料を事前に一読し、教科書の図表に目を通しておく。
9	ホルモンであるバソプレシン、メラトニン、成長ホルモン、甲状腺ホルモンの分泌機序とその作用について説明できる。これらホルモンの分泌異常で起こる病態について説明できる。	講義	授業内容の要約資料を事前に一読し、教科書の図表に目を通しておく。
10	ホルモンである副腎皮質ホルモン、副腎髄質ホルモンの分泌機序とその作用について理解し説明できる。副腎皮質ホルモンの分泌以上によって起こる病態について説明できる。	講義	授業内容の要約資料を事前に一読し、教科書の図表に目を通しておく。
11	自律神経系の働きについて説明できる。特に、内臓を支配する迷走神経（副交感神経）の働きを理解する。自律神経系とホルモン分泌との関連について説明できる。	講義	授業内容の要約資料を事前に一読し、教科書の図表に目を通しておく。
12	3種の筋組織の基本的な機能と骨格筋フィラメントの収縮に対する役割を説明できる。反射の種類と反射弓の構成要素をあげ説明できる。自律神経系による平滑筋の調節について理解し説明できる。	講義	授業内容の要約資料を事前に一読し、教科書の図表に目を通しておく。
13	筋肉の神経支配について説明できる。筋肉を支配する運動神経が乳幼児の時期にシナプス回路網が一旦増加し、成長するにつれて脱落する。その意味合いについて理解し説明できる。	講義	授業内容の要約資料を事前に一読し、教科書の図表に目を通しておく。
14	心臓の神経支配と体液支配および心電図波形発生メカニズムについて説明できる	講義	授業内容の要約資料を事前に一読し、教科書の図表に目を通しておく。
15	終講試験とまとめ	筆記試験	

■受講上の注意
教科書を基にしたテキストを配付し、自学自習できるように問題集も配付する。授業では、図や表をもとにパワーポイントで解説するが、その内容を理解するために、配付資料に事前に目を通し、授業で得た知識をもとに、さらに復習問題や確認事項にも積極的に取り組んでほしい。

■成績評価の方法
本試験・再試験（85%）・平常点（15%）。平常点は授業における課題への取り組み状況をもって評価する。
※全体正答率60%以上で合格、60%未満で不合格とする。不合格の場合、再試験は願い出により1回行う。

■テキスト参考書など
テキスト　竹内昭博：新生理学【電子版付】第8版 日本医事新報社　参考書：「よくわかる生理学の基本としくみ」當瀬規嗣著　秀和システムほか

■備考
授業内容の要約を前もって配付する。

■実務経験

人体のしくみ総論

講師:桑木 共之

単位数:1単位	時間数:30時間	授業学年:3学年
必修選択:必修		

■科目目標

基礎医学の知識を整理し、これを元に病態、診断、治療法を学んで応用を身につける。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	STの歴史と心構え	講義	
2	医用工学−1　観察する	講義	
3	医用工学−2　働きかける	講義	
4	生命維持、バイタルサイン	講義	
5	感覚神経(五感)	講義	
6	運動神経(呼吸を中心として)	講義	
7	心と身体の健康とその破綻−1　自律神経・内分泌系による身体の調節	講義	
8	心と身体の健康とその破綻−2　脳の構造と精神機能	講義	
9	心と身体の健康とその破綻−3　心と身体の結びつき	講義	
10	心と身体の健康とその破綻−4　ストレス	講義	
11	心と身体の健康とその破綻−5　ハピネス	講義	
12	基礎医学の総復習−1(国試問題を例として)	講義	
13	基礎医学の総復習−2(国試問題を例として)	講義	
14	基礎医学の総復習−3(国試問題を例として)	講義	
15	終講試験とまとめ	筆記試験	

■受講上の注意

今まで学習した基礎医学(解剖学、生理学)を復習しておく事。

■成績評価の方法

終講試験正答60点以上で合格、60点未満で不合格とする。不合格の場合、再試験は願い出により1回行う。

■テキスト参考書など

適宜配付

■備考

■実務経験

医科学Ⅰ

講師：青山 公治、冨安 恵子、山下 佐英、川元 真由美

単位数：1単位	時間数：30時間	授業学年：1学年
必修選択：必修		

■科目目標

医療従事者にあっては、患者の健康事象はその患者を取り巻く生活要因と地域社会と密接に関わっているという視点をもつことが必要である。そのような意味で、将来、公衆衛生的素養をもった言語聴覚士として活躍するために必要な基礎的知識・技術および習慣・態度を身につけること。

そして、医学では、人間の健康について、さらに病気の原因やしくみ、症状、所見、身体構造の変化を明らかにした上で、病気と対峙する。 医学とは、病気を乗り越えて健康を維持しようとする人間の知的活動であり、その医学に基づく行為が医療である。

最後に、健康はさまざまな要因の影響をうけているが、それらは、「人間の生物としての側面」「生活習慣」「環境」「保健・医療サービス」の4つに分けて 考えることができる。 本講義では、保健・医療サービスの概要を知るとともに、疾病の予防や健康増進に関する保健師・看護師の具体的活動や役割についても学習する。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	「健康と公衆衛生学」 健康の概念と健康の決定因子を説明できる。公衆衛生学の目的とそれを達成するための方法を説明できる。	講義	配付資料、教科書、板書に基づき講義を進める。予習は教科書、復習は配付資料、板書記録および教科書を見返し整理すること
2	「保健統計」 集団としての健康水準をはかる健康指標を列挙し、主な指標についてわが国の動向を説明できる。	講義	
3	「疫学」 疫学という科学の目的を説明できる。病気の発症要因と結果という関連性及び因果性を検証する疫学研究の方法を説明できる。	講義	
4	「環境保健」 健康はヒトと生活環境の諸要因との相互作用によって成立していることを具体的に説明できる。上下水道および廃棄物処理の法的整備について説明できる。	講義	
5	「疾病の予防」 広義の予防医学の3段階のプロセスを説明できる。感染症の感染成立要因を説明できる。主な生活習慣病のリスク要因を列挙できる。	講義	
6	「母子保健」 地域における母子保健活動の目的とその現状と対策を説明できる。	講義	
7	「産業保健」 働く人々の保健活動の目的を説明できる。主な職業病を列挙できる。	講義	
8	試験とまとめ	試験	
9	病気の基本、診断と治療、予防、また医の倫理について理解できる。	講義	テキストの病気の基本・分類、診断、治療、予防医療を読んでくる。
10	医療安全、救急救命について理解できる。	講義	テキストの病気の基本・分類、診断、治療、予防医療を読んでくる。
11	看護職とは何か、保健師、助産師、看護師の役割について	講義 DVD	看護職についてのイメージをまとめてくる
12	様々な場における看護師の役割と具体的活動	講義 DVD	講義資料を準備する
13	保健所における保健師の役割と具体的活動	講義 GW	GWの時は活発に意見を交わす
14	市町村における保健師の役割と具体的活動	講義 GW	GWの時は活発に意見を交わす
15	事例を通して疾病の予防や健康増進に関しての保健師・看護師の役割と他職種との連携のあり方を考える。発表後レポート作成	GW 試験	自分の意見をまとめて臨む

■受講上の注意

授業活動の状況により、上記の内容や順番は変更する場合もある。特に「多職種連携の基礎」については、講義の進度や使用する設備環境に応じて講義回数の延長を図る。この場合、事前に日程等の伝達をする。

■成績評価の方法

テーマごとの試験およびレポート（提出物）評価にて行う。

※全体正答率60%以上で合格、60%未満で不合格とする。不合格の場合、再評価は願い出により1回行う。

■テキスト参考書など

厚生の指標「国民衛生の動向」（厚生労働統計協会）、公衆衛生学　社会・環境と健康　2025年版，医歯薬出版

■備考

GW＝グループワーク

■実務経験

本科目は医師、保健師、言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

医科学Ⅱ

講師:外薗 寿典、徳永 弘樹

単位数:1単位	時間数:15時間	授業学年:2学年
必修選択:必修		

■科目目標

本講義では、臨床医学分野の中でも「形成外科学」の分野について深めた内容を展開していく。各分野とも言語聴覚療法の専門領域に関わる重要な分野として理解を深める。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	形成外科学の概要について理解を深める。	講義	配付資料の要点を整理する。
2	形成外科の基本的な手術法について理解を深める。	講義	配付資料の要点を整理する。
3	腫瘍に対する治療について理解を深める。	講義	配付資料の要点を整理する。
4	顔面・四肢外傷、美容について理解を深める。	講義	配付資料の要点を整理する。
5	形成外科領域における言語療法について理解する。	講義	配付資料の要点を整理する。
6	口唇口蓋裂の言語的特徴について理解を深める(1)	講義	配付資料の要点を整理する。
7	口唇口蓋裂の言語的特徴について理解を深める(2)	講義	配付資料の要点を整理する。
8	試験とまとめ	試験	

■受講上の注意

授業活動の状況や施設使用状況により、上記の内容や順番を一部変更する場合がある。

■成績評価の方法

終講試験にて行う。

※全体評価60点以上で合格、60点未満で不合格とする。不合格の場合、再試験は願い出により1回行う。

■テキスト参考書など

適宜資料を配付

■備考

■実務経験

本科目は医師、言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

医科学Ⅲ

講師：上野 真、廣畑 俊和、川元 真由美、戌亥 啓一

単位数：1単位	時間数：15時間	授業学年：2学年
必修選択：必修		

■科目目標

本講義では、臨床医学分野の中でも「リハビリテーション医学」の分野について深めた内容を展開していく。リハビリテーション医学は小児～成人まであらゆる年代が対象となり、内科・外科を問わない幅広い見識が必要となる。言語聴覚療法の専門領域に関わる重要な分野として理解を深める。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	リハビリテーション医学とは その概要とポイント	講義	
2	リハビリテーション医学（1） 摂食嚥下障害の処方、原因疾患と評価治療（1）	講義	
3	リハビリテーション医学（2） 摂食嚥下障害の処方、原因疾患と評価治療（2）	講義	
4	リハビリテーション医学（3） 高次脳機能障害の処方、原因疾患と評価治療（1）	講義	
5	リハビリテーション医学（4） 高次脳機能障害の処方、原因疾患と評価治療（2）	講義	
6	多職種連携の重要性（1）	合同講義GW	GWでは積極的に取り組む
7	多職種連携の重要性（2）	合同講義GW	GWでは積極的に取り組む
8	多職種連携の重要性（3）	合同講義GW	GWでは積極的に取り組む

■受講上の注意

授業活動の状況や施設使用状況により、上記の内容や順番を一部変更する場合がある。

■成績評価の方法

テーマごとのレポート（提出物）評価にて行う。
※全体評価60点以上で合格、60点未満で不合格とする。不合格の場合、再評価は願い出により1回行う。

■テキスト参考書など

適宜配付

■備考

GW＝グループワーク

■実務経験

本科目は医師、言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

医科学Ⅳ

講師：山下 勝、大堀 純一郎、永野 広海、宮下 圭一、川畠 雅樹、小牧 祥太郎、戌亥 啓一

単位数：1単位	時間数：30時間	授業学年：2学年
必修選択：必修		

■科目目標

本講義では、臨床医学分野の中でも「耳鼻咽喉科学」の分野について深めた内容を展開していく。呼吸発声発語系および聴覚系の構造・機能・病態を基盤に言語聴覚療法のほとんどの専門領域に関わる重要な分野として理解を深める。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	耳科学　耳疾患　聴覚障害について	講義	
2	耳科学　耳疾患　めまい・平衡障害　各論	講義	
3	鼻科学　鼻疾患	講義	
4	気管食道・頭頚部科学　口腔・咽頭、嚥下障害	講義	
5	喉頭科学　喉頭領域①	講義	配付資料の要点を整理する。
6	喉頭科学　喉頭領域②	講義	配付資料の要点を整理する。
7	喉頭科学　喉頭領域③	講義	配付資料の要点を整理する。
8	呼吸器系の疾患について学ぶ。	講義	
9	喉頭の疾患について学ぶ。	講義	
10	嚥下機能の概要を学ぶ。 咽頭・唾液腺疾患について学ぶ。	講義	
11	鼻（外鼻・鼻腔）の構造・機能・病態について学ぶ。	講義	
12	口腔構音器官の疾患について学ぶ。	講義	
13	聴覚障害の分類のもととなる聴覚構造・機能の知識と疾患の種類について多覚的な視点を知る。	GW 講義	
14	伝音難聴と感音難聴についてそれぞれの特徴を深く理解する。	GW 講義	
15	試験とまとめ	試験	

■受講上の注意

授業活動の状況や施設使用状況により、上記の内容や順番を一部変更する場合がある。講義の進度や使用する設備環境に応じて講義回数の延長を図る必要性が生じる場合は、事前に日程等の伝達をする。

■成績評価の方法

テーマごとのレポート（提出物）評価にて行う。

※全体評価60点以上で合格、60点未満で不合格とする。不合格の場合、再評価は願い出により1回行う。

■テキスト参考書など

適宜資料を配付する。

病気が見える「耳鼻咽喉科」vol.13, メディックメディア

■備考

GW＝グループワーク

■実務経験

本科目は医師、言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

医科学Ⅴ

講師：小牧 祥太郎、福元 恵美、戌亥 啓一

単位数：1単位	時間数：30時間	授業学年：2学年
必修選択：必修		

■科目目標

言語聴覚士にとって重要となる音声・言語・聴覚医学に必要な神経の構造や機能、また病態について成人（高齢者含む）および小児科学の分野から理解を深め、言語聴覚障害領域における専門的内容を理解する為の基礎を学ぶ。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	脳血管障害全般と、虚血性疾患（脳梗塞（血栓・塞栓））について学ぶ。	講義	使用テキストを読んでおくことが望ましい。
2	脳血管障害の出血性疾患（脳出血・くも膜下出血）について学ぶ。	講義	使用テキストを読んでおくことが望ましい。
3	脳血管障害後の合併症（頭蓋内圧症状、水頭症など）について学ぶ。 脳血管病変（動静脈奇形、Willis動脈輪閉塞症）、脳腫瘍について学ぶ。	講義	使用テキストを読んでおくことが望ましい。
4	頭部外傷、認知症関連疾患について学ぶ。	講義	使用テキストを読んでおくことが望ましい。
5	末梢神経系疾患（ワーレンベルグ症候群、ギランバレー症候群等）について学ぶ。	講義	使用テキストを読んでおくことが望ましい。
6	末梢神経系疾患（重症筋無力症、筋ジストロフィー等）について学ぶ。	講義	使用テキストを読んでおくことが望ましい。
7	錐体外路系疾患（大脳基底核関連：パーキンソン病、ハンチントン舞踏病。小脳路関連：脊髄小脳変性症、多系統萎縮症など）について学ぶ。	講義	使用テキストを読んでおくことが望ましい。
8	主に脳画像の参照より神経疾患の復習（言語聴覚士が臨床で担当しやすい疾患を主に）を行う。	講義	使用テキストを読んでおくことが望ましい。
9	小児の発達と成長について学ぶ。	講義	配付資料を準備する。
10	小児特有の疾患と感染症について学ぶ（出生前・周産期・出生後）	講義	配付資料を準備する。
11	発達障害含む障害学について学ぶ。	講義	配付資料を準備する。
12	遺伝、疾患の原因遺伝子と遺伝型 聴覚障害の周産期・遺伝性疾患の代表例	講義	遺伝のタイプについて特徴を整理する。
13	日本人に多い聴覚障害を呈する遺伝性疾患とその対応	講義	発症頻度の高い聴覚障害を例に日本人と遺伝性疾患について理解を深める。
14	小児聴覚障害の対応と聴覚補償	講義	発症頻度の高い聴覚障害を例に遺伝性疾患とその対応について理解を深める。
15	試験・解説（あるいはまとめ）	試験 講義	

■受講上の注意

授業活動の状況や施設使用状況により、上記の内容や順番を一部変更する場合がある。

■成績評価の方法

終講試験にて行う。
※全体評価60点以上で合格、60点未満で不合格とする。不合格の場合、再試験は願い出により1回行う。

■テキスト参考書など

病気が見える vol.7 脳・神経 第2版. メディックメディア

■備考

講義内容に応じて遠隔講義を実施する場合もある。

■実務経験

本科目は言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

医科学Ⅵ

講師：吉家 清貴

単位数：2単位	時間数：40時間	授業学年：2学年
必修選択：必修		

■科目目標

内科学は、すべての臨床医学の基本であり、疾病の原因・誘因、症状、診断、治療、予防について学ぶ。
内容が多岐にわたるので、必要最低限の疾患について講義、症例を供覧するが、自主的により広く、より深く学ぶ姿勢が大切である。
医療従事者が理解しておくべき疾患について、患者からの質問があった場合に、言語療法士として簡明に説明できる能力を獲得することを目標とする。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	病理学　疾患の原因、変性、壊死とアポトーシス	講義	
2	病理学　創傷治癒、悪性腫瘍	講義	
3	神経系疾患　神経機能の局在と病変	講義	神経系の解剖・生理機能を復習しておくこと。
4	神経系疾患　認知症	講義	
5	神経系疾患　脳血管障害、神経変性疾患	講義	
6	神経系疾患　神経脱髄性疾患、運動ニューロン障害、筋無力症	講義	
7	循環器疾患１　検査法、狭心症、心筋梗塞、心臓弁膜症、不整脈	講義	循環系の解剖・生理機能を復習しておくこと。
8	循環器疾患２　動脈硬化症、動脈瘤、下肢深部静脈血栓症、高血圧	講義	
9	呼吸器疾患１　検査法、副鼻腔炎、喉頭炎、気管支喘息	講義	呼吸器系の解剖・生理機能を復習しておくこと。
10	呼吸器疾患２　慢性閉塞性肺疾患、肺線維症、呼吸異常、肺がん、胸膜疾患	講義	
11	血液・造血器疾患　検査法、貧血、白血病、悪性リンパ腫、出血傾向	講義	血液系の解剖・生理機能を復習しておくこと。
12	免疫と免疫異常　炎症、アレルギー性疾患、膠原病	講義	免疫系の解剖・生理機能を復習しておくこと。
13	消化器疾患　検査法、消化管と肝胆膵疾患	講義	消化器系の解剖・生理機能を復習しておくこと。
14	代謝疾患　代謝機能、糖尿病	講義	代謝系の解剖・生理機能を復習しておくこと。
15	代謝疾患　メタボリックシンドローム、痛風	講義	
16	内分泌疾患　検査法、脳下垂体疾患、各内分泌機能亢進・低下症	講義	内分泌系の解剖・生理機能を復習しておくこと。
17	内分泌疾患　検査法、脳下垂体疾患、各内分泌機能亢進・低下症	講義	
18	泌尿器疾患　検査法、腎炎、腎不全、尿管結石、膀胱疾患	講義	泌尿器系の解剖・生理機能を復習しておくこと。
19	感染症　感染性微生物、各臓器感染症	講義	
20	終講試験	筆記試験	

■受講上の注意
前もって講義プリントと講義ノートを配布するので、講義する範囲を一読しておく。
講義中に各自に質問をするので、関連臓器系の解剖・生理機能を復習しておく。

■成績評価の方法
国家試験自宅学習レポート 10%、最終試験 90%
※全体評価60%以上で合格、60%未満で不合格とする。不合格の場合、再試験は願い出により1回行う。

■テキスト参考書など
Crosslink basic リハビリテーションテキスト　内科学　編集：角田　亘、岡崎　史子　出版社：メジカルビュー社

■備考
書画カメラを用いて板書を映写する。講義プリント、講義ノートはホームページから pdf ファイルとしてダウンロード可能。
国家試験自宅学習は、過去問題を配布するので問題文、解答、解説を作成してもらう。

■実務経験
本科目は、医師として実務経験のある教員による授業である。

医科学Ⅶ

講師：石田 和久

単位数：1単位	時間数：15時間	授業学年：3学年
必修選択：必修		

■科目目標

薬に関する情報はテレビ番組や各種の雑誌などから得られるとともに、、インターネットや携帯端末などで容易かつ瞬時に入手できる。そのような環境の中で、必要な情報を正確に把握し、理解できることが大切である。今回の薬理学では、薬の名称や刻印された識別コード等から効果や作用、副作用などを正確に確認できる方法や添付文書の見方を学び、また、処方せんをもとに疾患名や症状を推測できる実践力を養うことを目的とする。また、実習などで遭遇する機会の多い疾患について病態を再確認し、治療薬の作用機序を理解して言語聴覚訓練に影響を及ぼす可能性についても考えられるようにする。その上で、過去の国家試験問題をもとに各回ごとに習得状況を確認する。各種の病態や薬物療法を理論的に説明できることを目標とする。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	①実際の臨床現場で、処方薬から目的や疾患を把握できるよう、検索方法や添付文書の見方を理解 し、実際の処方で活用してみる。 ②薬の多様な用法について理解を深めるとともに、食品との飲み合わせや吸収に影響を及ぼす相互作用、薬物依存等を考える。 ③中枢系の各部位を模式的に理解し、特徴的な機能を確認する。	講義 GW IT検索 医薬品集	・第1回薬理学から実施 ・インターネット活用 ・医薬品集、アプリ参照 ・国試の過去問確認
2	①脳の伝達系異常と神経疾患について、心身症、うつ病、パーキン ソン病、統合失調症等の病態と薬物療法を理解し、副作用を考える。 ②脳卒中の急性期や回復期、慢性期の薬物療法を学び、その作用から言語聴覚療法への影響を考える。	講義 GW IT検索 医薬品集	・第2回薬理学を一読しておく ・医薬品集、アプリ参照 ・国試の過去問確認
3	認知症初期の病変部位による分類をもとに、臨床で遭遇する特徴的症状を理解し、処方される薬剤の作用や副作用を学ぶ。その他、てんかんやせん妄など知っておきたい疾患に処方される薬剤について、知識を深める。	講義 GW IT検索 医薬品集	・第3回薬理学を一読しておく ・医薬品集、アプリ参照 ・国試の過去問確認
4	循環器系の疾患に対応するために、心不全、不整脈、狭心症、高血圧、血栓性疾患等の病態を心臓および循環器系を図解化して理解し、治療薬の種類と作用機序、副作用を系統的に学ぶ。	講義 GW IT検索 医薬品集	・第4回薬理学を一読しておく ・医薬品集、アプリ参照 ・国試の過去問確認
5	①注射剤を理解すべく、細胞の機能や電解質、糖、アミノ酸などの役割を理解し、臨床でよく見かける点滴製剤の特徴を学ぶ。高血糖や腎機能低下時の薬物療法への理解も深める。よく利用されるサプリメントについても確認する。 ②高齢者に多い泌尿器障害や排便困難、消化管障害等について、治療薬の種類と作用機序、副作用を考える。	講義 GW IT検索 医薬品集	・第5回薬理学を一読しておく ・サプリメント情報 ・インターネット活用 ・医薬品集、アプリ参照 ・国試の過去問確認
6	①骨粗鬆症について、骨芽細胞や破骨細胞の機能とモデリングを理解し、治療薬の種類と作用機序、副作用を学ぶ。 ②免疫系の疾患への理解を深めるべく、生体防御機構を理解し、アレルギー用剤、気管支喘息用剤、抗菌剤・抗ウィルス剤、関節リウマチ用剤に加え、抗がん剤についても理解を深める。	講義 GW IT検索 医薬品集	・第6回薬理学を一読しておく ・医薬品集、アプリ参照 ・国試の過去問確認
7	「痛み」について、伝達経路を図解化して理解し、今回までに学んだ薬の組み合わせ効果、さらにはオピオイド・非オピオイド鎮痛薬等について理解を深める。	講義 GW IT検索 医薬品集	・第7回薬理学を一読しておく ・医薬品集、アプリ参照 ・国試の過去問確認
8	試験とまとめ	試験	講義に使用した医薬品集およびアプリは利用可

■受講上の注意

私語は慎む。なお、講義中の質問および終了後の質問は積極的に行ってほしい。講義の予習とともに学んだ方法は実践してみること。講義で使用するオリジナルテキストを忘れないようにする。また、図解し演習する機会もあるので、各自で記録可能なノートなどを準備する。主体的に講義に臨むこと。

■成績評価の方法

終講試験により評価する。試験は筆記にて行い、その結果を最重要視するが、質問等を通した講義への積極的な参加など受講態度なども加味する。

■テキスト参考書など

過去5年間の国家試験問題をもとに作成したオリジナルテキストおよび医薬品集を利用。また、IT活用として正確かつ最新の薬剤情報を取得できるアプリも利用する。各回ごとの学びは最近の国家試験問題を解くことで習得したこととする。

■備考

上記のオリジナルテキストおよび医薬品集は事前配布する。講義にはインターネット環境のパソコン1台とプロジェクターを準備。インターネットの検索サイト(pmda、薬価サーチ2025 他)の閲覧およびテキストを投影する。App Store・Android無料アプリ「ヤクチエ添付文書」の活用と機能は講義中に説明する。GW＝グループワーク

■実務経験

本科目は薬剤師として実務経験のある教員による授業である。

医科学Ⅷ

講師：川元 真由美、福元 恵美

単位数：1単位	時間数：30時間	授業学年：3学年
必修選択：必修		

■科目目標

本講義では、栄養学の基本原理とその応用について学びます。特に、リハビリテーションの効果が栄養状態によりどのように影響されるかを理解し、より効率的なリハビリテーションを提供するための栄養管理の重要性を探ります。また、患者さんの栄養状態に配慮するだけでなく、将来患者さんを支える側の現学生自身の栄養管理についても学びます。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	栄養状態とリハビリテーション1 ・栄養状態がリハビリテーションに与える影響	講義・演習	実習での経験をふまえ、リハビリテーションと栄養の関係性について説明できる。
2	栄養状態とリハビリテーション2 ・リハビリテーション栄養チームにおけるSTの役割	講義・演習	NST・栄養法について説明できる。
3	栄養学の基礎1 ・栄養素の種類とその役割	講義・演習	自身の食事をふまえ、5大栄養素について説明できる。
4	栄養学の基礎2 ・「消化器系の解剖の復習」と「便と栄養の関係」について学ぶ。	講義・演習	消化器系（特に小腸・大腸）の解剖学・生理学を復習しておく。
5	栄養学の基礎3 ・血液データの見方について学ぶ。	講義・演習	血液データから栄養状態を知る。
6	栄養管理1 ・低栄養の評価と介入	講義・演習	原因・定義を理解し、低栄養について説明できる。
7	栄養管理2 ・サルコペニアの原因と対策 ・フレイルの予防と管理	講義・演習	サルコペニア・フレイルについて説明できる。
8	栄養評価と介入1 ・栄養評価	講義・演習	栄養評価法を理解する。
9	栄養評価と介入2 ・栄養介入の計画と実施	講義・演習	栄養評価について理解する。
10	グループワーク1 ・テーマの決定	演習	グループで協力して課題に取り組む。
11	グループワーク2 ・資料の作成	演習	グループで協力して課題に取り組む。
12	グループワーク3 ・資料の作成	演習	グループで協力して課題に取り組む。
13	グループワーク4 ・発表	演習・発表	グループで協力して課題に取り組む。
14	栄養評価と介入3 ・身体計測・栄養評価まとめ	講義・演習	自分自身を評価し今後の自己管理に繋げる。
15	理解度の確認／まとめ	筆記試験	

■受講上の注意

授業活動の状況や施設使用状況により、上記の内容や順番を一部変更する場合がある。

■成績評価の方法

・課題（10%）、グループワーク（30%）、単位認定試験（60%）。
※全体評価60%以上で合格、60%未満で不合格とする。不合格の場合、再試験は願い出により1回行う。

■テキスト参考書など

「PT・OT・STのためのリハビリテーション栄養 基礎からリハ栄養ケアプロセスまで 第3版」, 医歯薬出版
＊適宜、資料を配布する。

■備考

配布資料やテキストを整理し、臨床現場で活かせる資料となるように各自工夫をしてください。
パソコン使用することがあります。

■実務経験

本科目は言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

医科学Ⅸ

講師：岡田 洋一、山口 浩明、戌亥 啓一

単位数：1単位	時間数：30時間	授業学年：3学年
必修選択：必修		

■科目目標

本講義では、臨床医学分野の中でも「精神医学」の分野について深めた内容を展開していく。精神医学領域はこれまで学んだ領域の中でも特に神経内科、臨床心理学、薬理学などと深い関わりがあり、合わせて理解を深めたい。

また、精神医学には主観的な評価によるカウンセリングやセラピーが欠かせない。心理学的アプローチにはどのような方法があるのか評価手法を知り、理解する。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	精神医学の概念、精神科リハビリテーションについて理解する。	講義	配付資料の要点を整理する。
2	精神科リハビリテーションのプロセスと技法について理解する。	講義	配付資料の要点を整理する。
3	うつ病、双極性障害、トラウマとPTSDについて理解する。	講義	配付資料の要点を整理する。
4	境界性人格障害、統合失調症、アルコール依存症、嗜好問題について理解する。	講義	配付資料の要点を整理する。
5	心理評価の方法と種類についてその特徴を整理することで理解する 心理評価の中でも人格について①投影法　②質問紙法　③作業法　それぞれを例に理解を深める(1)	GW 講義	特徴の整理を丁寧に行う
6	心理評価の中でも人格について①投影法　②質問紙法　③作業法　それぞれを例に理解を深める(2)	GW 講義	整理した事柄と方法例から精神医学分野全体の理解ににつなげる
7	心理評価の中でも人格について①投影法　②質問紙法　③作業法　それぞれを例に理解を深める(3)、心理評価のまとめライフステージへの影響 分野理解への知識を問う（小テスト）	GW 講義	整理した事柄と方法例から精神医学分野全体の理解ににつなげる
8	ウエクスラー系心理検査を例として心理の量的解釈を学ぶための基本用語を知る。	講義	
9	ウエクスラー系心理検査を例に心理評価につて理解を深める(1)	GW 講義	予習・復習
10	ウエクスラー系心理検査を例に心理評価につて理解を深める(2)	GW 講義	予習・復習
11	ウエクスラー系心理検査を例に心理評価につて理解を深める(3)	GW 講義	予習・復習
12	ウエクスラー系心理検査を例に心理評価につて理解を深める(4)	GW 講義	予習・復習
13	ウエクスラー系心理検査を例に心理評価につて理解を深める(5)	GW 講義	予習・復習
14	ウエクスラー系心理検査を例に心理評価につて理解を深める(6)まとめ	GW 講義	予習・復習
15	試験とまとめ	試験	

■受講上の注意

授業活動の状況や施設使用状況により、上記の内容や順番を一部変更する場合がある。

■成績評価の方法

小テスト（40%）および終講試験（60%）による合算

※全体評価60%以上で合格、60%未満で不合格とする。不合格の場合、再試験は願い出により1回行う。

■テキスト参考書など

心の病気って何だろう？，平凡社

■備考

GW＝グループワーク

■実務経験

本科目は精神保健福祉士、言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

医科学X

講師：藤村 卓也、迫田 和也、松尾 康弘

単位数：1単位　時間数：30時間　授業学年：3学年

必修選択：必修

■科目目標

本科目は神経心理学を基礎とし、脳画像読影の基礎を理解し、脳画像から種々の障害を導き出せるようになることを目標とする。加えて、超音波やMRIの特性を理解することを目標とする。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	画像読影に必要な基礎知識として脳解剖について理解する。	講義 TBL	グループでの活動となる。積極的なディスカッションを期待する。
2	画像読影に必要な基礎知識として画像（CT/MRI/脳機能画像）について理解する。	講義 TBL	グループでの活動となる。積極的なディスカッションを期待する。
3	基本的な画像の見かたとして、脳部位の同定について理解する（外側溝、中心溝、頭頂後頭溝、錐体路と体性感覚伝導路）。	講義 TBL	グループでの活動となる。積極的なディスカッションを期待する。
4	基本的な画像の見かたとして、脳部位の同定について理解する（言語野・言語ネットワーク）。	講義 TBL	グループでの活動となる。積極的なディスカッションを期待する。
5	基本的な画像の見かたとして、脳部位の同定について理解する（言語野・言語ネットワーク）。	講義 TBL	グループでの活動となる。積極的なディスカッションを期待する。
6	基本的な画像の見かたとして、脳部位の同定について理解する（空間性注意）。	講義 TBL	グループでの活動となる。積極的なディスカッションを期待する。
7	基本的な画像の見かたとして、脳部位の同定について理解する（側頭葉内側領域、その他）。	講義 TBL	グループでの活動となる。積極的なディスカッションを期待する。
8	事例を通して読影を学ぶ（事例検討①）	講義 TBL	グループでの活動となる。積極的なディスカッションを期待する。
9	事例を通して読影を学ぶ（事例検討②）	講義 TBL	グループでの活動となる。積極的なディスカッションを期待する。
10	事例を通して読影を学ぶ（事例検討③）	講義 TBL	グループでの活動となる。積極的なディスカッションを期待する。
11	画像検査の概要を知る。	講義 演習	画像診断（超音波）の特性を予習しておく。
12	エコーについて理解を深める。	講義 演習	画像診断（超音波）の特性を予習しておく。
13	MRIについて理解を深める(1)	講義 演習	画像診断（MRI：磁気共鳴）の基本的な考え方を学習しておく。
14	MRIについて理解を深める(2)	講義 演習	画像診断（MRI：磁気共鳴）の基本的な考え方を学習しておく。
15	試験・まとめ	試験	

■受講上の注意

授業活動の状況や施設使用状況により、上記の内容や順番を一部変更する場合がある。

■成績評価の方法

・各回の講義への取り組み・ディスカッション状況（40%）
・最終試験（60%）
により総合的に評価。本試験、再試験ともに60%以上を合格とする。
再試験は願い出により1回行う。

■テキスト参考書など

藤田郁代ら編集：標準言語聴覚障害学高次脳機能障害第3版，医学書院

■備考

TBL＝ Team Based Learning

■実務経験

本科目は言語聴覚士、診療放射線技師として実務経験のある教員による授業である。

歯科学

講師：杉原 一正

単位数：1単位	時間数：20時間	授業学年：2学年
必修選択：必修		

■科目目標

構音、咀嚼、摂食嚥下の障害と関係のある歯科・口腔外科的疾患（う蝕、歯周病、口唇裂・口蓋裂、顎変形症、口腔腫瘍、嚢胞、顎骨骨折、歯性感染症、口腔粘膜疾患など）の特徴と治療法について具体的に述べることができ、臨床の現場で言語聴覚士として口腔外科学の知識と技能を治療のエビデンスに活用する能力を養う。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	臨床歯科医学の全体像と特徴について説明できる。	講義	小テストの実施
2	歯科疾患（う蝕と歯周病）の成り立ちと治療法について説明できる。	講義	小テストの実施
3	口腔領域の先天異常（口唇裂・口蓋裂など）の特徴と治療法について説明できる	講義	小テストの実施
4	口腔領域の外傷（顎骨骨折など）と嚢胞（顎骨内および軟組織内に発生する）の特徴と治療法について説明できる	講義	小テストの実施
5	口腔領域の良性腫瘍と悪性腫瘍の特徴と治療法について説明できる	講義	小テストの実施
6	口腔領域の感染症の特徴と治療法について説明できる	講義	小テストの実施
7	口腔粘膜疾患、唾液腺疾患、顎関節疾患、神経疾患の特徴と治療法について説明できる	講義	小テストの実施
8	咀嚼障害の特徴、評価法、治療法について説明できる	講義	小テストの実施
9	摂食嚥下障害のメカニズム、検査法、治療法について説明できる 器質性構音障害と口腔疾患による構音障害の特徴、評価法、治療法について説明できる	講義	小テストの実施
10	終講試験	試験	

■受講上の注意

講義の予習（前もって教科書を読んでおく）をして、主体的授業に望むこと。

■成績評価の方法

終講試験(80%)、小テスト(20%)

※全体評価60%以上で合格、60%未満で不合格とする。不合格の場合、再試験は願い出により1回行う。

■テキスト参考書など

『最新言語聴覚学講座　言語聴覚士のための臨床歯科医学・口腔外科学』医歯薬出版

■備考

資料は毎回配付する。

■実務経験

本科目は、歯科医師として実務経験のある教員による授業である。

医科学歯科学総論

講師：専任教員

単位数：2単位　時間数：60時間　授業学年：4学年

必修選択：必修

■科目目標

医科学および歯科学はその分野が多岐にわたる。それぞれを独立した領域として捉えるだけでは不十分であり、基盤となる知識や関連する知識を得てはじめて鑑別や診断につなげることができる。そのため、本講義では医科学・歯科学全般における言語聴覚士にとって必須の基礎・専門知識の整理と確認を通して、より理解を深めることを目指す。講義ではこれまでに履修した各論の資料、教科書、ノートが重要な資料となる。これらをベースに個別学習、グループ学習等、適宜形態を用いて講義を進めていく。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	基礎医学分野の知識を再確認する（医学総論・解剖学・生理学）	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
2	基礎医学分野の知識を再確認する（医学総論・解剖学・生理学）	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
3	基礎医学分野の知識を再確認する（医学総論・解剖学・生理学）	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
4	基礎医学分野の知識を再確認する（医学総論・解剖学・生理学）	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
5	基礎医学分野の知識を再確認する（病理学・内科学・小児科学）	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
6	基礎医学分野の知識を再確認する（病理学・内科学・小児科学）	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
7	基礎医学分野の知識を再確認する（病理学・内科学・小児科学）	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
8	基礎医学分野の知識を再確認する（病理学・内科学・小児科学）	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
9	基礎医学分野の知識を再確認する（病理学・内科学・小児科学）	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
10	基礎医学分野の知識を再確認する（病理学・内科学・小児科学）	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
11	基礎医学分野の知識を再確認する（精神医学・リハビリテーション医学）	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
12	基礎医学分野の知識を再確認する（精神医学・リハビリテーション医学）	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
13	基礎医学分野の知識を再確認する（歯科、口腔外科学）	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
14	基礎医学分野の知識を再確認する（歯科、口腔外科学）	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
15	まとめと中間試験	講義 試験	前半部分のまとめと復習の逐次準備を心掛ける
16	基礎医学分野の知識を再確認する（臨床神経・形成外科・耳鼻咽喉科学科）	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
17	基礎医学分野の知識を再確認する（臨床神経・形成外科・耳鼻咽喉科学科）	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
18	基礎医学分野の知識を再確認する（臨床神経・形成外科・耳鼻咽喉科学科）	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
19	基礎医学分野の知識を再確認する（臨床神経・形成外科・耳鼻咽喉科学科）	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
20	基礎医学分野の知識を再確認する（臨床神経・形成外科・耳鼻咽喉科学科）	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
21	言語聴覚療法に深くかかわる基礎医学分野の知識を再確認する（呼吸発声発語系）	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う

22	言語聴覚療法に深くかかわる基礎医学分野の知識を再確認する（呼吸発声発語系）	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
23	言語聴覚療法に深くかかわる基礎医学分野の知識を再確認する（呼吸発声発語系）	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
24	言語聴覚療法に深くかかわる基礎医学分野の知識を再確認する（神経系の構造・機能・病態）	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
25	言語聴覚療法に深くかかわる基礎医学分野の知識を再確認する（神経系の構造・機能・病態）	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
26	言語聴覚療法に深くかかわる基礎医学分野の知識を再確認する（神経系の構造・機能・病態）	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
27	言語聴覚療法に深くかかわる基礎医学分野の知識を再確認する（聴覚系の構造・機能・病態）	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
28	言語聴覚療法に深くかかわる基礎医学分野の知識を再確認する（聴覚系の構造・機能・病態）	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
29	言語聴覚療法に深くかかわる基礎医学分野の知識を再確認する（聴覚系の構造・機能・病態）	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
30	試験・まとめ	試験	

■受講上の注意

授業活動の状況や施設使用状況により、上記の内容や順番を一部変更する場合がある。

■成績評価の方法

中間試験・本試験結果を合算とする。
※全体評価60%以上で合格、60%未満で不合格とする。不合格の場合、再試験は願い出により1回行う。

■テキスト参考書など

関連科目の指定教科書等、適時資料配付を予定

■備考

GW＝グループワーク

■実務経験

本科目は言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

認知・学習心理学

講師：松尾 康弘

単位数：1単位	時間数：30時間	授業学年：1学年
必修選択：必修		

■科目目標

認知心理学は人の認知処理に関して情報処理モデル（認知モデル）を立てて、実験により検証することを特徴とする。また、学習とは、経験の結果として生じたその後の行動の変容をさす。本科目は、人の認知処理メカニズムや学習理論について理解することを目標とする。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	「感覚」・「知覚」・「認知」について理解することができる①	講義	
2	「感覚」・「知覚」・「認知」について理解することができる②	講義・TBL	
3	「感覚」・「知覚」・「認知」について理解することができる③	講義・TBL	
4	「注意」について理解することができる	講義・TBL	
5	情動の諸側面と理論について理解することができる	講義・TBL	
6	動機付けについて理解することができる	講義・TBL	
7	記憶のしくみについて理解することができる	講義・TBL	
8	記憶の分類について理解することができる	講義・TBL	
9	学習（レスポンデント条件付け）について理解することができる	講義・TBL	
10	学習（オペラント条件付け）について理解することができる	講義・TBL	
11	言語のしくみについて理解することができる	講義・TBL	
12	言語の障害について理解することができる	講義・TBL	
13	概念のしくみについて理解することができる	講義・TBL	
14	思考と推理について理解することができる	講義・TBL	
15	試験および解説	講義	

■受講上の注意

■成績評価の方法

本試験、再試験ともに60％以上を合格とする。再試験は願い出により1回行う。

■テキスト参考書など

内山靖ら編：リハベーシック心理学・臨床心理学，医歯薬出版
その他配布資料

■備考

TBL: Team Based Learning

■実務経験

本科目は、公認心理師として実務経験のある教員による授業である。

生涯発達心理学

講師：島 義弘

単位数：1単位	時間数：30時間	授業学年：1学年
必修選択：必修		

■科目目標

人の生涯にわたる発達を，心理学の観点から理解することを目標とする。発達段階ごとの特徴や課題を学び，将来，ヒューマンサービスに従事する専門職としての素地を養う。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	発達心理学とは	講義・討論	該当箇所の復習（教科書）
2	発達とは	講義・討論	該当箇所の予習・復習（教科書）
3	胎児期	講義・討論	該当箇所の予習・復習（教科書）
4	乳児期Ⅰ：身体・認知	講義・討論	該当箇所の予習・復習（教科書）
5	乳児期Ⅱ：社会性	講義・討論	該当箇所の予習・復習（教科書）
6	幼児期Ⅰ：身体・言語・認知	講義・討論	該当箇所の予習・復習（教科書）
7	幼児期Ⅱ：自己・社会性	講義・討論	該当箇所の予習・復習（教科書）
8	児童期Ⅰ：身体・認知	講義・討論	該当箇所の予習・復習（教科書）
9	児童期Ⅱ：社会性	講義・討論	該当箇所の予習・復習（教科書）
10	青年期Ⅰ：身体・認知	講義・討論	該当箇所の予習・復習（教科書）
11	青年期Ⅱ：社会性	講義・討論	該当箇所の予習・復習（教科書）
12	成人期	講義・討論	該当箇所の予習・復習（教科書）
13	老年期	講義・討論	該当箇所の予習・復習（教科書）
14	発達の遅れ，障害，マイノリティ	講義・討論	該当箇所の予習・復習（教科書）
15	全体討論	講義・討論	該当箇所の予習・復習（教科書）

■受講上の注意

予習，ディスカッション，復習の内容をノートにまとめること。授業はディスカッションを中心に行うので，積極的に参加すること。予習の際には，教科書を読むだけでなく，読んで分からないことを自分で調べるよう，努めること。

■成績評価の方法

授業（ディスカッション）への参加状況（30%）と予習・復習ノート（70%）で評価する。
※全体評価60%以上で合格、60%未満で不合格とする。不合格の場合、再試験は願い出により1回行う。

■テキスト参考書など

『教育職・心理職のための発達発達心理学』中道圭人・小川翔大（編著）ナカニシヤ出版

■備考

■実務経験

臨床心理学

講師:岩元 正知

単位数:2単位	時間数:40時間	授業学年:2学年
必修選択:必修		

■科目目標

「臨床」とは「病み、悩み、障害をもつ人間に対して、実際に、その状態像を把握し、治療すること」であり、「臨床心理」という言葉は「心理学を臨床的に応用する」と考えられる。そして、「臨床心理学」は心の内の悩みや迷い、葛藤などの解決を援助する学問である。ところで言語聴覚士国家試験の「臨床心理学」の過去出題範囲は、基礎心理学に始まり、心理統計、心理査定、精神症状、心理面接および心理療法、さらに出題回数は少ないが地域援助と多岐にわたっている。そこで本講義では出題頻度の高い心理査定、精神症状、心理面接および心理療法を中心に展開し、国家試験で問われる知識を身に付けることを目的とする。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	「臨床心理学」の基本的概念および機械に写ることのない「人間の心とは何か？」について考える機会とする。	講義	ミニ心理ゲーム「絶対に許せないのは誰？」の実施。
2	「パーソナリティ理論（性格類型論、性格特性論）」について理解する。	講義	ST国試に頻出されている「パーソナリティ理論」。国試で合格点を採るためのコツを理解すること。
3	「人格理論（質問紙法、作業検査法、投影法など）」について理解する。	講義	ST国試に頻出されている「人格検査」。国試で合格点を採るためのコツを理解すること。
4	子どもと主たる養育者（母親）との間に形成される情緒的な絆である「愛着（アタッチメント）」や、子どもの4つの愛着パターンについて理解する。	講義	自己評価式「愛着タイプ診断」の実施。
5	「抑うつ症群」について。特に、「うつ病」についての知識を理解する。	講義 DVD	講義および映像学習。映像の感想レポートの提出。
6	「双極症および関連障害群」について。特に、「双極症（躁うつ病）」についての知識や「うつ病」との違いを理解する。	講義 DVD	講義および映像学習。映像の感想レポートの提出。
7	「統合失調症スペクトラム症」について。特に、精神病の一つとされる「統合失調症」について理解する。	講義 DVD	講義および映像学習。映像の感想レポートの提出。
8	「パニック症」を含む心の病の一つ「不安症群」について理解する。	講義 DVD	講義および映像学習。映像の感想レポートの提出。
9	「強迫症および関連症群」について。特に、若者の心の病の一つ「強迫症（強迫性障害）」について理解する。	講義 DVD	講義および映像学習。映像の感想レポートの提出。
10	「解離症」「身体症状症」および「心身症」について理解する。	講義 DVD	講義および映像学習。映像の感想レポートの提出。
11	「パーソナリティ症群」について。特に、「ボーダーライン・パーソナリティ症（BPD）」についての理解を深める。	講義 DVD	講義および映像学習。映像の感想レポートの提出。
12	心的外傷およびストレス因関連症群より「心的外傷後ストレス症（PTSD）」や「適応反応症」、および「複雑性PTSD」等に関する理解を深める。	講義 DVD	講義および映像学習。映像の感想レポートの提出。
13	無意識という概念を提唱したフロイトの「精神分析」について理解する。	講義	ST国試に頻出されている「精神分析（的心理療法）」。国試で合格点を採るためのコツを理解すること。
14	ロジャーズの提唱した「クライエント（来談者）中心療法」について理解する。	講義	ST国試に頻出されている「クライエント中心療法」。国試で合格点を採るためのコツを理解すること。
15	学習理論に基づく心理療法「行動療法」について理解する。	講義 DVD	講義および映像学習。映像の感想レポートの提出。
16	神経発達障害群より「知的発達症」および「ASD（自閉スペクトラム症）」、「SLD（限局性学習症）について理解する。	講義 DVD	講義および映像学習。映像の感想レポートの提出。
17	近年、自閉症児の療育支援法として知られる「応用行動分析（ABA）」について理解する。	講義 DVD	講義および映像学習。映像の感想レポートの提出。
18	「児童虐待」および「愛着障害（反応性アタッチメント症、脱抑制型対人交流症）」、「ヤングケアラー」などについて理解する。	講義 DVD	講義および映像学習。映像の感想レポートの提出。
19	「認知療法」「認知行動療法」について、国試に対応できる知識を理解する。	講義 DVD	講義および映像学習。映像の感想レポートの提出。
20	終講試験およびまとめ	試験	

■受講上の注意

居眠りはしないこと。時間は守ること。離席する場合には必ず伝えること。すべての質問にチャレンジすること（考えてみること）。主体的に講義に臨むこと。

■成績評価の方法

試験（70%）授業中のレポート（20%）授業（各回の演習・議論への取り組み状況）への参加態度（10%）により総合的に評価する。
※全体評価60%以上で合格、60%未満で不合格とする。不合格の場合、再試験は願い出により1回行う。

■テキスト参考書など

一発合格! 公認心理師対策テキスト&予想問題集」, ファイブアカデミー

■備考

毎回、講義資料を配付する。

■実務経験

本科目は、公認心理師として実務経験のある教員による授業である。

カウンセリング論

講師：岩元 正知

単位数：1単位　時間数：30時間　授業学年：2学年

必修選択：必修

■科目目標

心理カウンセリングの基本は「信頼関係」。カウンセラー（聴き手）は相談に訪れた人（クライエント）が安心できる雰囲気を与える様に努める。実践的な体験型講義を通して、言語および非言語コミュニケーションや心理カウンセリングにおける言葉の使い方、ねぎらいやユーモラスな分脈の大切さなど、援助を必要とされるクライエントに対するカウンセリング法を学ぶことができる。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	「心身一如」。心の状態が身体の反応と相互に作用していることを理解することができる。	講義 GW	二人一組になっての体験学習を予定している。
2	コミュニケーション体験型講義を通して、信頼の架け橋となる「ラポール」を体感することができる。	講義 GW	二人一組になっての体験学習が中心。
3	言葉の遅れのある自閉症児に対する療育スキル（ABA）を、映像を通して学ぶことができる。	講義 DVD	課題レポートの提出。
4	家族に対し感謝の気持ちを言葉で伝えることの大切さを映像を通して学び、「ありがとうを実践する」ためのカウンセリングを体験する。	講義 GW	二人一組での「ありがとうを実践する」というカウンセリング体験。
5	NLPカウンセリング体験。実際にカウンセラーおよびクライエントを体験することができる。	講義 GW	二人一組でのNLPカウンセリング体験。
6	対人関係トラブルが生じたあの時、心の中で何を感じていたのか「気づき」を得る機会とする。	講義	二人一組での「対人関係から省みるカウンセリング」体験。
7	「出生順位（きょうだいの中で何番目に生まれて来たか）の秘密」についての理解を深めることができる。	講義	「きょうだい性格分析クイズ」を体験する。
8	あなたと両親の関係性や、あなたの家族での役割などついて気づくことができる。	講義 GW	二人一組での「あなたと両親について」のカウンセリング体験。
9	解決志向アプローチよりウェルフォームド・ゴール、コンプリメント、リソースについて体験する。	講義 GW	二人一組で解決志向アプローチによるカウンセリング体験。
10	5年前の自分と、今の自分を比べて成長している部分について気づくことができる。	講義 GW	二人一組で「過去からの成長を知る」カウンセリングを体験する。
11	ある出来事を体験した時、怒りや不安を感じる場合に影響する「生き方のルール（ビリーフ）」を理解することができる。	講義 GW	二人一組で「過去からの成長を知る」カウンセリングを体験する。
12	「認知の歪み」を修正し、心のバランスを整えることでストレスを軽減する「認知行動療法」式カウンセリングを理解することができる。	講義 GW	二人一組になって「7つのコラム法」によるカウンセリングを体験する。
13	VAKテストを通して、自分の優位な「認知特性（利き感覚）」を理解することができる。	講義	自分の「利き感覚」を知るためのVAKテストを体験する。
14	相手の立場に立ってみるためにゲシュタルト療法のチェアテクニック（空の椅子技法）を体験する。	講義 GW	二人一組になっての椅子技法によるカウンセリング体験。
15	終講試験およびまとめ	試験	

■受講上の注意

居眠りはしないこと。時間は守ること。離席する場合には必ず伝えること。すべての質問にチャレンジすること（考えてみること）。主体的に講義に臨むこと。

■成績評価の方法

試験（70%）授業中のレポート（20%）授業（各回の演習・議論への取り組み状況）への参加態度（10%）により相互的に評価する。
※全体評価60%以上で合格、60%未満で不合格とする。不合格の場合、再試験は願い出により1回行う。

■テキスト参考書など

テキストは特にないが、参考書として「臨床心理学」のテキスト「一発合格! 公認心理師対策テキスト&予想問題集」を使用する。

■備考

毎回、講義資料を配付する。
GW＝グループワーク

■実務経験

本科目は、公認心理師として実務経験のある教員による授業である。

心理測定法

講師:岩元 正知

単位数:1単位	時間数:15時間	授業学年:2学年
必修選択:必修		

■科目目標

人の心の状態や行動の特性などを解明するために行われる測定を「心理測定」と呼ぶ。「心理測定」は、広い意味では精神測定(一般知能の測定など)とほぼ同じ意味で用いられている。例えば、感覚・知覚で閾値を測定する「精神物理学的測定法」や、能力・性格などの研究領域での「テスト理論」、好みや社会的態度などの研究における評定法、尺度構成法など、様々な測定法がある。本講義では、言語聴覚士国家試験における心理測定法の過去出題範囲についての知識を理解することを目的とする。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	「心理測定法」の導入として、自分の誕生日からパーソナリティタイプを診断する機会とする。	講義	簡易版YG性格検査の実施。
2	「社会調査」および「質問紙法」について理解できる。	講義	
3	「尺度(名義尺度・順序尺度・間隔尺度・比率尺度)」についての知識を理解できる。	講義	
4	「精神物理学的測定法」についての知識および国試の解き方を理解できる。	講義	前回講義で学んだ尺度に関するミニテストの実施。
5	「尺度構成法(直接尺度構成法および間接尺度構成法」についての知識を理解できる。	講義	
6	「信頼性」「妥当性」についての知識および国試出題パターンを理解できる。	講義	
7	「単一事例研究法」および「多次元尺度構成法」についての知識および国試出題パターンを理解できる。	講義	
8	終講試験およびまとめ	試験	

■受講上の注意

居眠りはしないこと。時間は守ること。離席する場合には必ず伝えること。すべての質問にチャレンジすること(考えてみること)。主体的に講義に臨むこと。

■成績評価の方法

試験(70%)授業中のレポート(20%)授業(各回の演習・議論への取り組み状況)への参加態度(10%)により総合的に評価する。
※全体評価60%以上で合格、60%未満で不合格とする。不合格の場合、再試験は願い出により1回行う。

■テキスト参考書など

テキストは無し。参考書として「臨床心理学」の「一発合格! 公認心理師対策テキスト&予想問題集」を使用することがある。

■備考

毎回、講義資料を配付する。

■実務経験

本科目は、公認心理師として実務経験のある教員による授業である。

心理学総論Ⅰ

講師:専任教員

単位数:1単位	時間数:30時間	授業学年:3学年
必修選択:必修		

■科目目標

心理学にはさまざまな領域や視点、概念、理論がある。専門的な視点を深めていくほど技術や方略も高度化していくが、それら応用的な臨床技法を身につけるには多くの基礎的な知識や理論に触れておく必要がある。そのため、本講義では心理学全般における言語聴覚士にとって必須の基礎・専門知識の整理と確認を通して、より理解を深めることを目指す。講義ではこれまでに履修した各論の資料、教科書、ノートが重要な資料となる。これらをベースに個別学習、グループ学習等、適宜形態を用いて講義を進めていく。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	感覚の種類・感覚モダリティについて理解を深める。 物理量と心理量の差について理解を深める。 順応と対比・同化について理解を深める。	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
2	知覚について理解を深める。	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
3	古典的条件づけとオペラント条件づけについて理解を深める。 情動、動機づけについて理解を深める。	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
4	学習について理解を深める。	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
5	記憶過程について理解を深める。	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
6	記憶の分類について理解を深める。	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
7	概念・思考について理解を深める。	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
8	まとめと中間試験	講義 試験	前半部分のまとめと復習の逐次準備を心掛ける
9	精神物理学的測定法について理解を深める(閾値、尺度水準)	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
10	精神物理学的測定法について理解を深める(誤差)	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
11	テスト理論について理解を深める。	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
12	尺度構成法について理解を深める。	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
13	調査法について理解を深める。	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
14	データ解析法について理解を深める。	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
15	試験・まとめ	試験	

■受講上の注意

授業活動の状況や施設使用状況により、上記の内容や順番を一部変更する場合がある。

■成績評価の方法

中間試験・本試験結果を合算とする。
※全体評価60%以上で合格、60%未満で不合格とする。不合格の場合、再試験は願い出により1回行う。

■テキスト参考書など

関連科目の指定教科書等、適時資料配付を予定

■備考

GW=グループワーク

■実務経験

本科目は公認心理師、言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

心理学総論Ⅱ

講師：専任教員

単位数：1単位	時間数：30時間	授業学年：4学年
必修選択：必修		

■科目目標

心理学にはさまざまな領域や視点、概念、理論がある。専門的な視点を深めていくほど技術や方略も高度化していくが、それら応用的な臨床技法を身につけるには多くの基礎的な知識や理論に触れておく必要がある。心理学総論Ⅱではより応用的な内容を扱い、各分野について理解を深めていくことを目指す。講義ではこれまでに履修した各論の資料、教科書、ノートが重要な資料となる。これらをベースに個別学習、グループ学習等、適宜形態を用いて講義を進めていく。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	パーソナリティ理論について理解を深める。	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
2	発達各期における心理臨床的問題について理解を深める(1)	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
3	発達各期における心理臨床的問題について理解を深める(2)	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
4	異常心理とその特性について理解を深める。	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
5	臨床心理的アセスメントについて理解を深める(1)	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
6	臨床心理的アセスメントについて理解を深める(2) 心理療法について理解を深める(1)	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
7	心理療法について理解を深める(2)	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
8	まとめと中間試験	講義 試験	前半部分のまとめと復習の逐次準備を心掛ける
9	発達の規程要因、発達の研究法、発達の理論について理解を深める。	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
10	知覚・認知、愛着の発達について理解を深める。	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
11	運動、認知機能の発達について理解を深める。	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
12	遊びと社会性の発達、自己・他者認知の発達、保育・学校教育の発達について理解を深める。	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
13	青年期の発達について理解を深める。	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
14	成人期・老年期の発達について理解を深める。	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
15	試験・まとめ	試験	

■受講上の注意

授業活動の状況や施設使用状況により、上記の内容や順番を一部変更する場合がある。

■成績評価の方法

中間試験・本試験結果を合算とする。
※全体評価60%以上で合格、60%未満で不合格とする。不合格の場合、再試験は願い出により1回行う。

■テキスト参考書など

関連科目の指定教科書等、適時資料配付を予定

■備考

GW＝グループワーク

■実務経験

本科目は公認心理師、言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

言語学

講師:山下 直子

単位数:2単位	時間数:30時間	授業学年:2学年
必修選択:必修		

■科目目標

①言語のさまざまな見方を理解し、他の人にも簡単に説明できる。
②日本語がどんな言語であるか、例を挙げながら説明することができる。
③国家試験の設問に対応できる言語学の基本知識が身につけられる。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	言語とは何か(言語学概論)①: 言語学に含まれる様々な分野および言語の機能がわかる	GW 講義	
2	言語とは何か(言語学概論)②: 言語学の歴史や背景がわかる	GW 講義	
3	言語の音のしくみ(音韻論)①: 言語によって音の捉え方が異なることがわかる	GW 講義	1年次の「日本語音声学」の復習をした上で、授業に臨んでください
4	言語の音のしくみ(音韻論)②: 日本語における音のバリエーションがわかる	GW 講義	1年次の「日本語音声学」の復習をした上で、授業に臨んでください
5	言語の音と語の関係(形態論)①: 語のしくみと性質がわかる	GW 講義	1年次の「日本語学」の「日本語のことばと文字」で学んだ知識を活用します
6	言語の音と語の関係(形態論)②: 語の成り立ちや音の変化についてわかる	GW 講義	1年次の「日本語学」の「日本語のことばと文字」で学んだ知識を活用します
7	言語の音と語の関係(形態論)③: 日本語の語の特徴がわかる	GW 講義	1年次の「日本語学」の「日本語のことばと文字」で学んだ知識を活用します
8	言語の文のしくみ(統語論)①: 文の構造が図式化できる	GW 講義	1年次の「日本語学」の「日本語のルール」で学んだ知識を活用します
9	言語の文のしくみ(統語論)②: 日本語の文の特徴がわかる(1)	GW 講義	
10	言語の文のしくみ(統語論)③: 日本語の文の特徴がわかる(2)	GW 講義	
11	言語の意味と運用(意味論)①: 語や文の意味の捉え方についてわかる	GW 講義	1年次の「日本語学」の「日本語の使い分け」で学んだ知識を活用します
12	言語の意味と運用(意味論)②: 場面や状況によって意味の捉え方が変化することがわかる	GW 講義	1年次の「日本語学」の「日本語の使い分け」で学んだ知識を活用します
13	言語の意味と運用(語用論)③ 言語と文化の関係についてわかる	GW 講義	1年次の「日本語学」の「ことばを使わない日本語の表現」で学んだ知識を活用します
14	言語とは何か(言語学総論)③: 言語学の用語の意味を、他の人に自分のことばで説明できる	GW 講義	最終試験の詳しい説明も行います
15	終了試験	試験	

■受講上の注意
①毎回、翌回の授業に向けた「事前タスク」を提示します(初回を除く)。
必ず＜事前タスク＞(「私のノート」の作成)に取り組んだ上で、次の授業に臨んでください。
②グループワークやペアワークを多く行いますので、積極的に参加してください。

■成績評価の方法
終了試験(筆記試験)で評価を行います。(最終講義日に実施。)
試験は、多肢選択問題(60%)、記述問題(40%)で構成されます。
記述問題は事前に提示する複数の設問の中から1～2問出題します。
※全体評価60%以上で合格、60%未満で不合格とする。不合格の場合、再試験は願い出により1回行う。

■テキスト参考書など
『日本語教師のための入門言語学』(スリーエーネットワーク)
＊タイトルに「日本語教師のための」とありますが、内容は普遍的なものです。

■備考
テキストは毎回必ず持ってきてください。
また、授業の際にはプリント等の資料も配布します。各自ファイルを用意して、配布資料をしっかり自己管理し、ファイルは毎回必ず

■実務経験

音声学

講師：山下 直子

単位数：2単位	時間数：30時間	授業学年：2学年
必修選択：必修		

■科目目標

①日本語の音声のしくみが詳しくわかる
②日本語の音声のしくみについて自分の言葉で説明することができる
③音を正確に聞き取り、記述することができる
④国家試験に対応できる音声学の知識を身につけられる

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	五十音図とIPA： 五十音図をIPAで記述することができる	演習 講義	1年次の「日本語音声学」の復習を行います
2	母音①： 基本母音のしくみと特徴がわかる	演習 講義	
3	母音②： 様々な母音のしくみと特徴が説明できる	演習 講義	
4	子音①： 様々な子音のしくみと特徴がわかる	講義 GW	翌週のグループ発表の準備も行います
5	子音②： 様々な子音のしくみと特徴が説明できる（1）	発表 演習	グループ発表を行います
6	子音③： 様々な子音の仕組みと特徴が説明できる（2）	発表 演習	グループ発表を行います
7	子音④： 特殊音の特徴がわかる	演習 講義	
8	様々な音声現象①： 子音と母音の様々な音声変化のしくみがわかる	講義 GW	グループ発表の準備も行います
9	様々な音声現象②： 子音と母音の様々な音声変化のしくみが説明できる	発表 演習	グループ発表を行います
10	音節とモーラ： 音節とモーラのしくみについて理解できる	演習 講義	
11	アクセントとイントネーション① 日本語のアクセント、イントネーション、プロミネンスについてわかる	講義 GW	翌週のグループ発表の準備も行います
12	アクセントとイントネーション②： 日本語のアクセント、イントネーション、プロミネンスについて説明できる（1）	発表 演習	グループ発表を行います
13	アクセントとイントネーション③： 日本語のアクセント、イントネーション、プロミネンスについて説明できる（2）	発表 演習	グループ発表を行います
14	誤った音声の記述・分析： 誤りのある音声を聞き取り、それを記述・分析できる	演習 GW	最終試験の詳しい説明も行います
15	修了試験	試験	筆記試験と聴解試験を行います

■受講上の注意

①グループワークを多く行いますので、積極的に参加してください。
②グループ発表が3回あります。メンバーと協力して発表に臨んでください。
③テキスト付属の音声を聞きながら授業を行います。授業には必ずスマートフォン（充電済み）とイヤホンを持ってきてください。

■成績評価の方法

以下の①と②により評価を行います。
①グループ発表の成果（50%）：
〈主な評価観点〉(1)内容の正確さ (2)例示 (3)パフォーマンス (4)協力体制
②修了試験（50%）：
〈試験方法〉(1)筆記試験 (2)聴解試験
※全体評価60%以上で合格、60%未満で不合格とする。不合格の場合、再試験は願い出により1回行う。

■テキスト参考書など

『たのしい音声学』（竹内京子・木村琢也 著，2019年，くろしお出版）

■備考

テキストは毎回必ず持ってきてください。
授業での配布資料（随時）、グループ発表資料などは、各自ファイルし、自己管理してください。

■実務経験

音響・聴覚心理学

講師：松尾 康弘

単位数：2単位　時間数：40時間　授業学年：2学年

必修選択：必修

■科目目標

言語聴覚士はコミュニケーションに障害を持たれた方へ支援を行う。コミュニケーションには音声も含まれ、そこには「音」が存在する。本科目は「音」について物理学的側面および心理学的側面から講義し、「音」について理解を深めることを目標とする。さらに、音響分析装置を用いて「音声」を観察し、臨床に応用できるようにする。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	「音」の定義について理解できる	講義・PBL	
2	身近な「音」の違いに気づくことができる	講義・PBL	
3	（音）波の基本的性質について理解できる	講義・PBL	学習のねらいに沿って予習しておくこと
4	共鳴について理解できる	講義・PBL	学習のねらいに沿って予習しておくこと
5	波の現象（うなり・回折等）を理解できる	講義・PBL	学習のねらいに沿って予習しておくこと
6	音の強さと大きさ・音圧について理解できる	講義・PBL	学習のねらいに沿って予習しておくこと
7	デシベル計算に必要な数学的知識（対数log）を確認する	講義・PBL	指数および対数log 計算が苦手な学生は復習しておくこと。可能であれば高校で使用した数学の教科書を準備しておくこと。
8	デシベルの計算ができるようになる	講義・PBL	指数および対数log 計算が苦手な学生は復習しておくこと。可能であれば高校で使用した数学の教科書を準備しておくこと。
9	音のスペクトルについて理解できる	講義・PBL	学習のねらいに沿って予習しておくこと
10	音声とサウンドスペクトログラムについて理解する	講義・TBL	学習のねらいに沿って予習しておくこと
11	音響分析装置Praat を用いて音響分析できる①	講義・TBL	事前に音響分析装置Praat をダウンロードしたPCをチームに1 台持参すること
12	音響分析装置Praat を用いて音響分析できる②	講義・TBL	事前に音響分析装置Praat をダウンロードしたPCをチームに1 台持参すること
13	音響分析装置Praat を用いて音響分析できる③	講義・TBL	事前に音響分析装置Praat をダウンロードしたPCをチームに1 台持参すること
14	音響分析装置Praat を用いて音響分析できる④	講義・TBL	事前に音響分析装置Praat をダウンロードしたPCをチームに1 台持参すること
15	音の心理物理学について理解することができる。	講義・TBL	学習のねらいに沿って予習しておくこと
16	音の心理物理学について理解することができる。	講義・TBL	学習のねらいに沿って予習しておくこと
17	聴覚の周波数分析とマスキング現象について理解することができる。	講義・TBL	学習のねらいに沿って予習しておくこと
18	両耳の聞こえについて理解することができる	講義・TBL	学習のねらいに沿って予習しておくこと
19	環境と聴覚の関係について理解することができる。	講義・TBL	学習のねらいに沿って予習しておくこと
20	試験・解説	試験	

■受講上の注意

音響分析装置を使用するため、ノート型PC を持っていることが望ましい。多少の数学的知識が必要なため、高校数学を復習しておくこと。

■成績評価の方法

本試験、再試験ともに60％以上を合格とする。再試験は願い出により1回行う。

■テキスト参考書など

竹内京子ら編著：Crosslink 言語聴覚療法テキスト　音響・音声学

言語聴覚士テキスト

■備考

PBL: Problem Based Learning, TBL: Team Based Learning

■実務経験

本科目は言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

言語発達学

講師：川元 真由美

単位数：1単位	時間数：30時間	授業学年：1学年
必修選択：必修		

■科目目標

子どもがどのような過程でことばを習得していくのか。について学ぶ講義です。
ことばは生涯を通して形作られていきますがその中でも出生から学齢期までのことばの発達は言語コミュニケーションの基盤となります。
この講義では、前言語期（ことばが出始める前の時期）・幼児期・学童期に分けてそれぞれの時期のことばの発達（理解力・発話能力・読み能力など）を理解し、定型発達児の言語発達の全体像を把握する。また、こども園・幼稚園見学を通して子どもの発達について理解を深めることを目標とする。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	こどもの発達（身体・認知・ことば）について学ぶ。	講義/GW	資料の確認
2	前言語期のことばの発達について理解する。	講義/GW	小テスト実施
3	幼児前期のことばの発達について理解する。	講義/GW	小テスト実施
4	言語発達を促す大人の役割について学ぶ。	講義/GW	小テスト実施
5	幼児後期のことばの発達について理解する。	講義/GW	小テスト実施
6	学童期のことばの発達について理解する。	講義/GW	小テスト実施
7	前言語期～幼児期のことばをはぐくむ関わり方・遊びを学ぶ。 グループにてことばをはぐくむ遊びについて考える。	講義/GW	小テスト実施
8	幼稚園見学・活動①	学外活動	幼稚園での活動となる。事故がないように十分注意して臨む。
9	幼稚園見学・活動②	学外活動	幼稚園での活動となる。事故がないように十分注意して臨む。
10	幼稚園見学・活動③	学外活動	幼稚園での活動となる。事故がないように十分注意して臨む。
11	幼稚園見学・活動の振り返り（ポスター作成）	GW	見学・活動の記録を用意する。
12	こども園見学・活動①	学外活動	こども園での活動となる。事故がないように十分注意して臨む。
13	こども園見学・活動②	学外活動	こども園での活動となる。事故がないように十分注意して臨む。
14	こども園見学・活動の振り返り（ポスター作成）	GW	見学・活動の記録を用意する。
15	単位認定試験・まとめ	試験/講義	これまでの復習をしておくこと。

■受講上の注意
何らかの配慮が必要な場合は申し出てください。
グループワーク・ディスカッションの際は肯定的なことばを使用してください。

■成績評価の方法

終講試験にて60点以上で合格、60点未満で不合格とする。不合格の場合、再試験は願い出により1回行う。

■テキスト参考書など
標準言語聴覚障害学　言語発達障害学　第3版　医学書院
※適宜資料を配布する。

■備考

GW＝グループワーク

■実務経験

本科目は言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

言語とコミュニケーション総論Ⅰ

講師：専任教員

単位数：1単位　時間数：30時間　授業学年：3学年

必修選択：必修

■科目目標

本講義は、音声・言語学にとって必須の知識について理解を深め、言語聴覚士としての活動に向けた知識の整理、確認を行うことを目標としている。音声学、言語学というSpeech・Language コミュニケーションの基盤への十分な理解を求めたい。実際にこれまでに履修した各論の資料、教科書、ノートが重要な資料となる。これらをベースに個別学習、グループ学習等、適宜形態を用いて講義を進めていく。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	音声の基本的な性質、音の構造、音声と音韻について理解を深める。	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
2	発声発語器官と構音について理解を深める。	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
3	国際音声記号（IPA）について理解を深める(1)	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
4	国際音声記号（IPA）について理解を深める(2)	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
5	母音と子音、連続音について理解を深める。	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
6	超分節的特徴について理解を深める。	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
7	日本語のの音声学的特徴について理解を深める。	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
8	まとめと中間試験	講義 試験	前半部分のまとめと復習の逐次準備を心掛ける
9	言語の基本的な性質、言語の単位について理解を深める。	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
10	音素、音節、モーラ、アクセントなど音韻論について理解を深める。	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
11	形態素と単語、形態論的プロセス、異形態など形態論について理解を深める。	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
12	語順、単文の構造など統語論について理解を深める。	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
13	ボイス、テンスとアスペクト、モダリティなど統語論について理解を深める。	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
14	意味論、語用論、文字論、類型論などその他の言語学分野について理解を深める。	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
15	試験・まとめ	試験	

■受講上の注意

授業活動の状況や施設使用状況により、上記の内容や順番を一部変更する場合がある。

■成績評価の方法

中間試験・本試験結果を合算とする。
※全体評価60%以上で合格、60%未満で不合格とする。不合格の場合、再試験は願い出により1回行う。

■テキスト参考書など

関連科目の指定教科書等、適時資料配付を予定

■備考

GW＝グループワーク

■実務経験

本科目は言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

言語とコミュニケーション総論Ⅱ

講師：専任教員

単位数：1単位　時間数：30時間　授業学年：4学年

必修選択：必修

■科目目標

本講義は、音響学、聴覚心理学の必須知識について理解を深め、言語聴覚士としての活動に向けた知識の整理、確認を行うことを目標としている。音声学、言語学と同様に音響学、聴覚心理学の視点はSpeech・Language コミュニケーションの基盤として密接に関連づいており、十分な理解を求めたい。実際にこれまでに履修した各論の資料、教科書、ノートが重要な資料となる。これらをベースに個別学習、グループ学習等、適宜形態を用いて講義を進めていく。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	音の物理と心理、純音と複合音、周波数・位相・振幅について理解を深める。	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
2	音圧と音の強さ、時間波形と周波数スペクトルについて理解を深める。	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
3	音響管の周波数特性について理解を深める。	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
4	線形システム、音源特性、声道の周波数特性、放射特性、ソース・フィルタ理論について理解を深める。	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
5	母音と子音の音響学的特徴について理解を深める。	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
6	超分節的特徴の音響特徴について理解を深める。	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
7	音響分析について理解を深める。	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
8	まとめと中間試験	講義 試験	前半部分のまとめと復習の逐次準備を心掛ける
9	音の心理物理特性について理解を深める(1)	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
10	音の心理物理特性について理解を深める(2)	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
11	聴覚フィルタ・臨界帯域について理解を深める。	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
12	聴覚マスキングについて理解を深める。	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
13	両耳聴効果について理解を深める。	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
14	環境による聴覚への影響について理解を深める。	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
15	試験・まとめ	試験	

■受講上の注意

授業活動の状況や施設使用状況により、上記の内容や順番を一部変更する場合がある。

■成績評価の方法

中間試験・本試験結果を合算とする。
※全体評価60%以上で合格、60%未満で不合格とする。不合格の場合、再試験は願い出により1回行う。

■テキスト参考書など

関連科目の指定教科書等、適時資料配付を予定

■備考

GW＝グループワーク

■実務経験

本科目は言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

障害児教育学

講師：片岡 美華

単位数：1単位	時間数：30時間	授業学年：1学年
必修選択：必修		

■科目目標

STとして障害のある子どもと接する上で必要となる、障害のある子どもたちへの教育の視点および、現在行われている特別支援教育制度を概括的にとらえることを目的とする。具体的には以下の二点を授業目標とする。
①障害のある子どもたちへの教育について、現代までの事績をつかみ、今日求められている障害のある子どもへの教育の意義と目的を明らかにする。
②特別支援教育の制度や法律を概括的にとらえ、連携や教育的支援の内容を理解する。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	特別支援教育とは何か。障害の概念（ICIDHからICFへの視点の転換）	講義	
2	障害児教育通史	講義	
3	障害児者の権利獲得の歴史と教育	講義	
4	障害児教育とインクルージョン	講義	
5	特別支援教育制度①（特別支援学校・センター的役割）	講義	
6	特別支援教育制度②（特別支援学級）	講義	
7	特別支援教育制度③（発達障害・通常学級）	講義	
8	通常学級における特別支援教育（通級制度・ユニバーサルデザイン教育）	講義	
9	学校全体支援体制と特別支援教育コーディネーターの役割	講義	
10	保護者への支援（障害受容・就学支援）	講義	
11	家庭、関係諸機関との連携と個別の教育支援計画	講義	
12	障害者の自立～進路選択・就労支援・セルフ･アドボカシー～	講義	
13	きょうだい支援と教育相談	講義	
14	教育相談と支援の視点	講義・演習	
15	まとめと試験	試験	

■受講上の注意

講義内容は、進み具合等によって順番や内容が若干替わることがあります。

■成績評価の方法

授業中に課すミニレポート（30%）と小テスト（5%）、および期末試験（65%）により本試験・再試験ともに総合的に判断する。
※全体評価60%以上で合格、60%未満で不合格とする。不合格の場合、再試験は願い出により1回行う。

■テキスト参考書など

玉村公二彦・黒田学・向井啓二・平沼博将・清水貞夫編著：「新版　キーワードブック特別支援教育　－インクルーシブ教育時代の基礎知識」（2019）クリエイツかもがわ

■備考

臨床発達心理士としての経験を生かして、事例を盛り込むとともに特に第14回の授業ではロールプレイングを交えながらより実践的に学べるようにする。

■実務経験

社会保障とリハビリテーション

講師:下村 孝子、戌亥 啓一

単位数:1単位　時間数:15時間　授業学年:1学年

必修選択:必修

■科目目標

社会福祉、社会保障制度について体系的に 学習し、その内容を理解することができる。臨床現場(実習を含め)で、クライエントの利用可能な社会資源について、具体的にイメージできる能力を養い、制度を活かす方法を検討することができる。
またリハビリテーションの概要について理解を広げ、今後の専門的な学習に対する関心を高める。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	社会保障制度の概念を理解できる。 自分の身の周りにある社会保険制度を考え、理解できる。	講義	
2	健康保険制度の概要や給付内容を理解できる。	講義	
3	介護保険制度や年金保険制度の概要や給付内容を理解できる。	講義	
4	生活保護制度の概要や給付内容を理解できる。	講義	
5	社会福祉に関する法律(主に障害者)の概要を理解できる。	講義	
6	さまざまなリハビリテーション分野への理解と関心を深める。 関連職種を知り、それぞれの役割について理解と関心を深める。	講義	
7	リハビリテーションの基礎知識としてICFおよび主な用語や概念を理解する。 リハビリテーション援助技術の概要を知る。	講義	
8	試験・まとめ	試験	前回までの内容を復習する

■受講上の注意

授業活動の状況や施設使用状況により、上記の内容や順番を一部変更する場合がある。

■成績評価の方法

筆記試験/講義を受講して感じたこと等をレポートとして60分程度でまとめる。
※評価60点以上で合格、60点未満で不合格とする。不合格の場合、再評価は願い出により1回行う。

■テキスト参考書など

■備考

■実務経験

本科目は社会保険労務士、言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

言語聴覚障害学総論

講師：松尾 康弘

単位数：1単位	時間数：30時間	授業学年：1学年
必修選択：必修		

■科目目標

【一般目標】
・言語聴覚障害の特性と種類、言語聴覚士の役割・専門性及び言語聴覚療法の基本概念について理解する。
【到達目標】
・言語聴覚士の歴史的な流れとその意味を概説できる
・言語聴覚療法の対象者について具体的に説明できる
・言語聴覚療法の一般的な流れを説明できる
・言語聴覚療法とチームアプローチについて説明できる
・言語聴聴覚士の職業倫理について説明できる
・言語聴覚士に関連する法律を概説できる
・言語聴覚士の社会的活動の必要性について説明できる

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	言語聴覚士の仕事や定義について説明できる。言語聴覚士の歴史を理解し、未来について熟考することができる。	講義 TBL	テキストの第1章を予習しておくこと
2	言語聴覚障害入門としてコミュニケーション過程や言語聴覚障害の概要について理解することができる	講義	テキスト第2章を予習しておくこと
3	言語聴覚障害入門としてコミュニケーション過程や言語聴覚障害の概要について理解することができる	講義 TBL	テキスト第2章を予習しておくこと
4	言語聴覚士養成の全体構造や言語聴覚士国家試験の概要について理解できる	講義 TBL	テキスト第3章を予習しておくこと
5	言語聴覚療法の評価の基本概念について理解することができる	講義 TBL	テキスト第4章を予習しておくこと
6	言語聴覚療法の評価の基本概念について理解することができる	講義 TBL	テキスト第4章を予習しておくこと
7	言語聴覚療法とチームアプローチについて理解することができる	講義 TBL	テキスト第5章を予習しておくこと
8	言語聴覚療法とチームアプローチについて理解することができる	講義 TBL	テキスト第5章を予習しておくこと
9	言語聴覚士の職業倫理について理解することができる	講義 TBL	テキスト第6章を予習しておくこと
10	言語聴覚士のリスクマネジメントについて理解することができる	講義 TBL	テキスト第7章を予習しておくこと
11	言語聴覚士のリスクマネジメントについて理解することができる	講義 TBL	テキスト第7章を予習しておくこと
12	言語聴覚士の研究活動について理解できる	講義 TBL	テキスト第8章を予習しておくこと
13	言語聴覚士の社会的活動について理解できる	講義 TBL	テキスト第9章を予習しておくこと
14	言語聴覚士の社会的活動の必要性について理解することができる	講義 TBL	テキスト第9章を予習しておくこと
15	試験・解説	試験	

■受講上の注意
講義の大半を座学とTBLで実施します。各講義のねらいに従ってテキスト等で必ず予習を行う。
特に「言語聴覚士の社会的活動～」については、講義の進度や使用する設備環境に応じて講義回数の延長を図る。この場合、事前に日程等の伝達をする。

■成績評価の方法

終講試験にて60点以上で合格、60点未満で不合格とする。不合格の場合、再試験は願い出により1回行う。

■テキスト参考書など

内山量史ら編：クリア言語聴覚療法1言語聴覚障害総論，健帛社

■備考

TBL＝能動的学習を育成することを重視し、グループで協働して互いに教え合う能力を鍛える少人数チームでの学習教育法です。

■実務経験

本科目は言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

言語聴覚療法評価学

講師:川元 真由美

単位数:1単位	時間数:15時間	授業学年:2学年
必修選択:必修		

■科目目標

本講義では、言語聴覚障害の評価・診断につながる情報収集および記録、観察レポートについて具体的事例や実施法を学ぶ。
情報収集の種類は、背景を成す情報、現象に関する情報などがあり、情報収集の方法には面接、質問紙、観察、検査、その他カルテや報告書、関連職種等から得るものなど多岐にわたる。守秘義務等の留意事項を含め重要な項目を学ぶ。
観察レポートについては、情報収集や記録をもとに一般的な形式を活用した作成を目指す。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	言語聴覚障害の評価・診断について臨床実習マニュアルを参照しながら、その流れを確認・理解する	講義・演習	
2	情報収集の種類や対象について具体的な事例を交え確認する	講義・演習	
3	情報収集の対象を具体的に想定し、その方法・流れを理解する	講義・演習	
4	観察・記録の方法、ポイントについて具体的な事例を交え確認する	講義・演習	
5	観察したものを表現・表記する方法を知る(1)	講義・演習	
6	観察したものを表現・表記する方法を知る(2)	講義・演習	
7	レポート作成を通し、客観的な評価視点を得る(1)	講義・演習	
8	レポート作成を通し、客観的な評価視点を得る(2)	講義・演習	

■受講上の注意

■成績評価の方法
授業毎の課題及び最終レポートにて総合的に判断する。
＊全体評価60点以上で合格、60点未満で不合格とする。不合格の場合、再評価は願い出により1回行う。

■テキスト参考書など
臨床実習マニュアル、技術ガイド、配布資料

■備考

■実務経験
本科目は、言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

言語聴覚療法評価学演習Ⅰ

講師:高吉 進

単位数:1単位　時間数:30時間　授業学年:1学年

必修選択:必修

■科目目標

神経心理学は脳を中心とする神経系と言語・認知を中心とする精神機能との関係を究明する学問である。
本講義では、成人領域の神経心理学的疾患を理解し、神経心理学的検査の概要および目的を説明することができることを到達目標とする。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	神経心理学について	TBL	
2	注意検査の概要・目的	TBL	テキスト①p193～195を予習する
3	記憶検査の概要・目的	TBL	テキスト①p173～174を予習する
4	遂行機能検査の概要・目的	TBL	テキスト①p193を予習する
5	前頭葉機能検査の概要・目的	TBL	テキスト①p193～195を予習する
6	失行の検査の概要・目的	TBL	テキスト①p141～143を予習する
7	失認の検査の概要・目的	TBL	テキスト①p56～57を予習する
8	半側空間無視の検査の概要・目的	TBL	テキスト①p78～79を予習する
9	認知・知的機能検査の概要・目的①	TBL	テキスト①p233～235を予習する
10	認知・知的機能検査の概要・目的②	TBL	テキスト①p233～235を予習する
11	失語症の検査の概要・目的①	TBL	テキスト②p161を予習する
12	失語症の検査の概要・目的②	TBL	テキスト②p163～164を予習する
13	失語症の検査の概要・目的③	TBL	テキスト②p163～164を予習する
14	失語症の検査の概要・目的④	TBL	テキスト②p163～164を予習する
15	単位認定試験・解説	試験 講義	これまでの講義を復習する

■受講上の注意

各講義のねらいに合わせて、予習・復習を行う。

■成績評価の方法

終講試験にて60点以上で合格、60点未満で不合格とする。不合格の場合、再試験は願い出により1回行う。

■テキスト参考書など

①標準言語聴覚障害学 高次脳機能障害学第3版　②標準言語聴覚障害学 失語症学第3版　③各種検査マニュアル

■備考

TBLとは、能動的学習を育成することを重視し、グループで協働して互いに教え合う能力を鍛える少人数チームでの学習教育法である。

■実務経験

本科目は言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

言語聴覚療法評価学演習Ⅱ

講師:高吉 進

単位数:1単位　時間数:30時間　授業学年:2学年

必修選択:必修

■科目目標

本講義では、言語聴覚療法評価学演習Ⅰで実施した成人領域の神経心理学的検査の実施手順を理解し、各検査の検査項目を説明できることを到達目標とする。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	神経心理学的検査について	TBL	
2	注意検査の実施手順	TBL	参考資料①を復習する
3	記憶検査の実施手順	TBL	参考資料①を復習する
4	遂行機能検査の実施手順	TBL	参考資料①を復習する
5	前頭葉機能検査の実施手順	TBL	参考資料①を復習する
6	失行の検査の実施手順	TBL	参考資料①を復習する
7	失認の検査の実施手順	TBL	参考資料①を復習する
8	半側空間無視の検査の実施手順	TBL	参考資料①を復習する
9	認知・知的機能検査の実施手順①	TBL	参考資料①を復習する
10	認知・知的機能検査の実施手順②	TBL	参考資料①を復習する
11	失語症の検査の実施手順①	TBL	参考資料①を復習する
12	失語症の検査の実施手順②	TBL	参考資料①を復習する
13	失語症の検査の実施手順③	TBL	参考資料①を復習する
14	失語症の検査の実施手順④	TBL	参考資料①を復習する
15	単位認定試験・解説	試験 講義	これまでの講義を復習する

■受講上の注意

各講義のねらいに合わせて、予習・復習を行う。

■成績評価の方法

終講試験にて60点以上で合格、60点未満で不合格とする。不合格の場合、再試験は願い出により1回行う。

■テキスト参考書など

①言語聴覚療法評価学演習Ⅰの講義資料　②各種検査マニュアル

■備考

TBLとは、能動的学習を育成することを重視し、グループで協働して互いに教え合う能力を鍛える少人数チームでの学習教育法である。

■実務経験

本科目は言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

言語聴覚療法管理学Ⅰ

講師：山口 浩明、専任教員

単位数：1単位	時間数：15時間	授業学年：4学年
必修選択：必修		

■科目目標

「言語聴覚療法管理学」では、医療、福祉、教育現場における言語聴覚士の役割を学び、自分自身が言語聴覚士として活動する際の知見を得る事を目標としている。

本講義では、特に鹿児島県における発達支援、施設マネジメントを取り上げる。言語聴覚療法を支えるシステムと制度を理解し、言語聴覚療法の質及び業務・情報・安全等に関する管理について学ぶとともに職業倫理を遵守する態度を養う。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	鹿児島県における教育・保健・福祉分野のSTの領域について理解できる。 「子どもの発達支援を考えるSTの会」について理解できる。	講義	左記の情報をHPなどで確認しておく
2	言語聴覚士が取得できる資格（特別支援教育士、臨床発達心理士、特別支援学校自立活動教諭一種免許状）について理解できる。	講義	左記資格等の情報をHPなどで確認しておく
3	小児分野における地域連携システムの概要について理解できる。	講義 GW	講義のねらいに従い、予習をする
4	巡回相談、乳幼児健診、発達相談、発達教室、子育て支援センター等における言語聴覚士の役割について理解できる。	講義 GW	講義のねらいに従い、予習をする
5	施設マネジメント、部門マネジメントの実際を知る(1)	講義 GW	疑問や興味を大事に解決・消化する 積極的な考えや行動を意識する
6	施設マネジメント、部門マネジメントの実際を知る(2)	講義 GW	疑問や興味を大事に解決・消化する 積極的な考えや行動を意識する
7	多職種、他施設とのマネジメントにおける働き方と留意点(1)	講義 GW	疑問や興味を大事に解決・消化する 積極的な考えや行動を意識する
8	多職種、他施設とのマネジメントにおける働き方と留意点(2)	講義 GW	疑問や興味を大事に解決・消化する 積極的な考えや行動を意識する

■受講上の注意

授業活動の状況や施設使用状況により、上記の内容や順番を一部変更する場合がある。

■成績評価の方法

テーマごとのレポート（提出物）評価にて行う。

※全体評価60点以上で合格、60点未満で不合格とする。不合格の場合、再評価は願い出により1回行う。

■テキスト参考書など

適宜配布

■備考

GW＝グループワーク

■実務経験

本科目は言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

言語聴覚療法管理学Ⅱ

講師：原口 友子、松下 裕二、松尾 康弘

単位数：1単位　時間数：15時間　授業学年：4学年

必修選択：必修

■科目目標

「言語聴覚療法管理学」では、医療、福祉、教育現場における言語聴覚士の役割を学び、自分自身が言語聴覚士として活動する際の知見を得る事を目標としている。

本講義では、特に職能団体（鹿児島県言語聴覚士会）の意義・活動の学びを通して自身の将来の言語聴覚士像について改めて考えを深める。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	言語聴覚士の職業倫理ついて理解できる。	講義 GW	日本言語聴覚士協会および鹿児島県言語聴覚士協会HPを確認しておく
2	保健・医療・福祉をとりまく諸制度とマネジメントについて理解できる。	講義 GW	日本言語聴覚士協会および鹿児島県言語聴覚士協会HPを確認しておく
3	鹿児島県の言語聴覚士の活動について将来的な視点を持つ。	講義 GW	日本言語聴覚士協会および鹿児島県言語聴覚士協会HPを確認しておく
4	言語聴覚療法の業務のマネジメントおよび医療安全管理・リスクマネジメントについて理解できる。	GW 演習	
5	言語聴覚士の社会的責務と言語聴覚士・言語聴覚療法の発展についてイメージできる。	GW 演習	
6	言語聴覚士のキャリアについて考え理解できる(1)	GW	
7	言語聴覚士のキャリアについて考え理解できる(2)	GW	
8	言語聴覚士のキャリアについて考え理解できる(3)	GW	

■受講上の注意

授業活動の状況や施設使用状況により、上記の内容や順番を一部変更する場合がある。

■成績評価の方法

テーマごとのレポート（提出物）評価にて行う。

※全体評価60点以上で合格、60点未満で不合格とする。不合格の場合、再評価は願い出により1回行う。

■テキスト参考書など

適宜配布。4～5については、内山量史ら編：クリア言語聴覚療法1言語聴覚障害総論，健帛社を使用する。

■備考

GW＝グループワーク

■実務経験

本科目は言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

失語症学Ⅰ

講師:高吉 進

単位数:1単位	時間数:30時間	授業学年:1学年
必修選択:必修		

■科目目標

〇方向目標

失語症者に関する言語聴覚士の役割を理解し、失語症の発現メカニズム、症状、症候群を説明するコミュニケーションスキルを身につける。

〇到達目標

・失語症の発現メカニズムを説明できる。
・失語症の症状を説明できる。
・失語症候群を説明できる。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	失語症と言語聴覚士の役割	講義・TBL	テキスト①p1～2を予習する
2	言語の構造	講義・TBL	テキスト①p6～7を予習する
3	言語の神経学的基盤	講義・TBL	テキスト①p17～22を予習する
4	失語症の原因疾患	講義・TBL	テキスト①p34～35を予習する
5	失語症の言語症状①	講義・TBL	テキスト①p46～47を予習する
6	失語症の言語症状②	講義・TBL	テキスト①p49～50を予習する
7	失語症の近縁症状・随伴しやすい障害	講義・TBL	テキスト①p58～59を予習する
8	失語症候群の成り立ち	講義・TBL	テキスト①p74～75を予習する
9	失語症の古典的分類①	講義・TBL	テキスト①p76～85を予習する
10	失語症の古典的分類②	講義・TBL	テキスト①p86～99を予習する
11	古典分類以外の失語症	講義・TBL	テキスト①p101～107を予習する
12	失語症の言語聴覚療法の全体像	講義・TBL	テキスト①p144～145を予習する
13	失語症者とのコミュニケーションのとり方	講義・TBL	テキスト①p150～151を予習する
14	失語症者とのコミュニケーション訓練	講義・TBL	テキスト①p150～151を復習する
15	単位認定試験・解説	試験・解説	講義1～14を復習する

■受講上の注意

各講義のねらいに従ってテキストで予習・復習を行う。

■成績評価の方法

終講試験にて60点以上で合格、60点未満で不合格とする。不合格の場合、再試験は願い出により1回行う。

■テキスト参考書など

標準言語聴覚障害学 失語症学第3版

■備考

TBLとは、能動的学習を育成することを重視し、グループで協働して互いに教え合う能力を鍛える少人数チームでの学習教育法である。

■実務経験

本科目は、言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

失語症学Ⅱ

講師:高吉 進

単位数:1単位	時間数:30時間	授業学年:2学年
必修選択:必修		

■科目目標

〇方向目標

失語症の評価法・訓練法を理解し、実践するための知識を習得する。

〇到達目標

・失語症の評価・診断の原則を説明できる。
・失語症検査の目的・方法を説明できる。
・失語症の訓練法を説明できる。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	失語症の評価・診断	講義・TBL	テキスト①p154～158
2	総合的失語症検査	講義・TBL	テキスト①p161を予習する
3	失語症の特定検査	講義・TBL	テキスト①p162～164を予習する
4	認知機能等の情報収集	講義・TBL	テキスト①p167～168を予習する
5	失語症の評価のまとめ	講義・TBL	テキスト①p179を予習する
6	失語症の回復過程	講義・TBL	テキスト①p192～198を予習する
7	言語治療の理論と技法①	講義・TBL	テキスト①p220～226を予習する
8	言語治療の理論と技法②	講義・TBL	テキスト①p227～230を予習する
9	言語治療の理論と技法③	講義・TBL	テキスト①p234～236を予習する
10	言語治療の実際①	講義・TBL	テキスト①p263～265を予習する
11	言語治療の実際②	講義・TBL	テキスト①p266～268を予習する
12	言語治療の実際③	講義・TBL	テキスト①p282～283,290～294,321を予習する
13	失語症研究の歴史	講義・TBL	テキスト①p340～349を予習する
14	総合的失語症検査の実施手順	講義・TBL	検査マニュアルを予習する
15	単位認定試験・解説	試験・講義	講義1～14を復習する

■受講上の注意

各講義のねらいに従ってテキストで予習・復習を行ってください。

■成績評価の方法

終講試験にて60点以上で合格、60点未満で不合格とする。不合格の場合、再試験は願い出により1回行う。

■テキスト参考書など

本講義で使用するテキスト①標準言語聴覚障害学　失語症学第3版

■備考

TBLとは，能動的学習を育成することを重視し，グループで協働して互いに教え合う能力を鍛える少人数チームでの学習教育法です。

■実務経験

本科目は、言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である

高次脳機能障害学Ⅰ

講師：松尾 康弘

単位数：1単位　時間数：30時間　授業学年：1学年

必修選択：必修

■科目目標

脳血管障害等で生じる後遺症は、運動・感覚障害だけでなく高次脳機能障害も多く認められる。本科目では、脳機能を踏まえ、認知・行為のメカニズム、神経心理学の概要を理解することを目標とする。
・神経心理学の基本概念が理解できる。
・背景症状および各種失認症・失行症の定義および病態が説明できる。
・背景症状および各種失認症・失行症の評価および訓練法について説明できる。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	神経心理学および高次脳機能障害について理解できる	講義・PBL	学習のねらいに沿って、テキストの第1章を予習しておくこと
2	神経心理学および高次脳機能障害についてプレゼンテーションができる	講義・PBL	プレゼンテーションができるように、テキストの第1章を復習しておくこと
3	視覚認知およびその障害について理解できる	講義・PBL	学習のねらいに沿って、テキストの第2章を予習しておくこと
4	視覚認知およびその障害についてプレゼンテーションができる	講義・PBL	プレゼンテーションができるように、テキストの第2章を復習しておくこと
5	視空間認知とその障害について理解できる	講義・PBL	学習のねらいに沿って、テキストの第3章を予習しておくこと
6	視空間認知とその障害についてプレゼンテーションができる	講義・PBL	プレゼンテーションができるように、テキストの第3章を復習しておくこと
7	聴覚認知とその障害について理解できる	講義・PBL	学習のねらいに沿って、テキストの第4章を予習しておくこと
8	聴覚認知とその障害についてプレゼンテーションができる	講義・PBL	プレゼンテーションができるように、テキストの第4章を復習しておくこと
9	触覚認知とその障害について理解できる	講義・PBL	学習のねらいに沿って、テキストの第5章を予習しておくこと
10	触覚認知とその障害についてプレゼンテーションができる	講義・PBL	プレゼンテーションができるように、テキストの第5章を復習しておくこと
11	身体意識・病態認知とその障害について理解できる	講義・PBL	学習のねらいに沿って、テキストの第6 章を予習しておくこと
12	身体意識・病態認知の障害についてプレゼンテーションができる	講義・PBL	プレゼンテーションができるように、テキストの第6章を復習しておくこと
13	行為・動作のメカニズムとその障害について理解できる	講義・PBL	学習のねらいに沿って、テキストの第7章を予習しておくこと
14	行為・動作のメカニズムとその障害についてプレゼンテーションができる	講義・PBL	プレゼンテーションができるように、テキストの第7章を復習しておくこと
15	試験・解説	試験・解説	

■受講上の注意

本講義はPBLを中心として実施するため、事前の予習が必須となる。学習上の留意点を確認して予習をしておくこと。また講義は基本的に2講義で1セットとなっており、1講義目はまとめ学習、2講義目はまとめた内容を他者へプレゼンテーションを行う。積極的なディスカッションを期待する。

■成績評価の方法

・各回の講義への取り組み・ディスカッション状況（20%）
・ワークシート提出（40%）
・最終試験（40%）
により総合的に評価。本試験、再試験ともに60%以上を合格とする。
再試験は願い出により1回行う。

■テキスト参考書など

藤田郁代ら編集：標準言語聴覚障害学高次脳機能障害第3版，医学書院

■備考

PBL: Problem Based Learning（問題発見解決型学習）

■実務経験

本科目は、言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

高次脳機能障害学Ⅱ

講師：松尾 康弘

単位数：1単位　時間数：30時間　授業学年：2学年

必修選択：必修

■科目目標

近年、脳機能研究が進み、古典的な高次脳機能障害（失行・失認）だけでなく、意識障害、注意障害、記憶障害、認知症といった全体的症状に対する支援において、言語聴覚士の期待が高まっている。本科目ではコミュニケーションに係る高次脳機能障害の理解ができることを目標とする。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	記憶とその障害について理解できる	講義・PBL	学習のねらいに沿って、テキストの第8章を予習しておくこと
2	記憶とその障害についてプレゼンテーションができる	講義・PBL	プレゼンテーションができるように、テキストの第8章を復習しておくこと
3	前頭葉と高次脳機能障害の関係について理解できる	講義・PBL	学習のねらいに沿って、テキストの第9章を予習しておくこと
4	前頭葉と高次脳機能障害の関係についてプレゼンテーションができる	講義・PBL	プレゼンテーションができるように、テキストの第9章を復習しておくこと
5	数処理・計算とその障害について理解できる	講義・PBL	事前に資料を配布する。その資料を活用し、予習をすること。
6	数処理・計算の障害についてプレゼンテーションができる	講義・PBL	プレゼンテーションができるように、復習しておくこと
7	脳梁離断症状について理解できる	講義・PBL	学習のねらいに沿って、テキストの第10章を予習しておくこと
8	脳梁離断症状についてプレゼンテーションができる	講義・PBL	プレゼンテーションができるように、テキストの第10章を復習しておくこと
9	認知症について理解できる	講義・PBL	学習のねらいに沿って、テキストの第11章を予習しておくこと
10	認知症についてプレゼンテーションができる	講義・PBL	プレゼンテーションができるように、テキストの第11章を復習しておくこと
11	脳外傷に伴う高次脳機能障害について理解できる	講義・PBL	学習のねらいに沿って、テキストの第12章を予習しておくこと
12	脳外傷に伴う高次脳機能障害についてプレゼンテーションができる	講義・PBL	プレゼンテーションができるように、テキストの第12章を復習しておくこと
13	認知コミュニケーション障害について理解できる	講義・PBL	学習のねらいに沿って、テキストの第13章を予習しておくこと
14	認知コミュニケーション障害についてプレゼンテーションができる	講義・PBL	プレゼンテーションができるように、テキストの第13章を復習しておくこと
15	試験・解説	試験・解説	

■受講上の注意

本講義はPBLを中心として実施するため、事前の予習が必須となる。学習上の留意点を確認して予習をしておくこと。また講義は基本的に2講義で1セットとなっており、1講義目はまとめ学習、2講義目はまとめた内容を他者へプレゼンテーションを行う。積極的なディスカッションを期待する。

■成績評価の方法

・各回の講義への取り組み・ディスカッション状況（20%）
・ワークシート提出（40%）
・最終試験（40%）
により総合的に評価。本試験、再試験ともに60%以上を合格とする。
再試験は願い出により1回行う。

■テキスト参考書など

藤田郁代ら編集：標準言語聴覚障害学 高次脳機能障害第3版，医学書院

■備考

PBL: Problem Based Learning(問題発見解決型学習)

■実務経験

本科目は、言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

失語・高次脳機能障害学演習Ⅰ

講師：高吉 進

単位数：1単位　時間数：30時間　授業学年：2学年

必修選択：必修

■科目目標

〇方向目標

代表的な神経心理学的検査の概要・実施手順を理解し、対象者に実践する技術を身に付ける。

〇到達目標

・SLTAおよび簡易的な認知機能検査の概要を理解し、マニュアルに沿って検査を実施することができる。

・検査結果をまとめ、結果を分析することができる。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	SLTAの概要・実施手順①	TBL	検査マニュアルを予習する
2	SLTAの概要・実施手順②	TBL	検査マニュアルを予習する
3	SLTAの概要・実施手順③	TBL	検査マニュアルを予習する
4	SLTAの概要・実施手順④	TBL	検査マニュアルを予習する
5	SLTAの概要・実施手順⑤	TBL	検査マニュアルを予習する
6	SLTAの概要・実施手順⑥	TBL	検査マニュアルを予習する
7	SLTAの概要・実施手順⑦	TBL	検査マニュアルを予習する
8	SLTAの概要・実施手順⑧	TBL	検査マニュアルを予習する
9	認知機能検査の概要・実施手順①	TBL	検査マニュアルを予習する
10	認知機能検査の概要・実施手順②	TBL	検査マニュアルを予習する
11	症例演習①	実技	検査を復習する
12	症例演習②	実技	検査を復習する
13	SLTA結果のまとめ	TBL	検査を復習する
14	SLTA結果の分析	TBL	検査を復習する
15	単位認定試験・解説	試験・講義	講義1～14を復習する

■受講上の注意

各講義のねらいに合わせて、予習・復習を行う。

■成績評価の方法

終講試験にて60点以上で合格、60点未満で不合格とする。不合格の場合、再試験は願い出により1回行う。

■テキスト参考書など

各種検査マニュアル

■備考

TBLとは、能動的学習を育成することを重視し、グループで協働して互いに教え合う能力を鍛える少人数チームでの学習教育法である。

■実務経験

本科目は、言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

失語・高次脳機能障害学演習Ⅱ

講師：高吉 進、有川 瑛人

単位数：1単位　時間数：30時間　授業学年：3学年

必修選択：必修

■科目目標

〇方向目標

失語症や高次脳機能障害を理解し、検査や訓練を実施するための基本的臨床技能を身に付ける。

〇到達目標

・失語・高次脳機能検査をマニュアルに則り、実践できる。

・対象者を想定し、訓練目標や訓練内容を立案し、模擬的に実施できる。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	特定検査の実践①	講義・TBL	検査マニュアルを予習する
2	特定検査の実践②	講義・TBL	検査マニュアルを予習する
3	特定検査の実践③	講義・TBL	検査マニュアルを予習する
4	特定検査の実践④	講義・TBL	検査マニュアルを予習する
5	言語情報処理の認知神経心理学的モデル（小嶋）による分析①	講義・TBL	テキスト①p13～51を予習する
6	言語情報処理の認知神経心理学的モデル（小嶋）による分析②	講義・TBL	テキスト①p13～51を予習する
7	言語情報処理の認知神経心理学的モデル（小嶋）による訓練①	講義・TBL	テキスト①p75～94を予習する
8	言語情報処理の認知神経心理学的モデル（小嶋）による訓練②	講義・TBL	テキスト①p75～94を予習する
9	失語症訓練の実際①	講義・TBL	配付資料を予習する
10	失語症訓練の実際②	講義・TBL	配付資料を予習する
11	失語症訓練の実際③	講義・TBL	配付資料を予習する
12	失語症訓練の実際④	講義・TBL	配付資料を予習する
13	失語症模擬症例演習①	講義・TBL	これまでの講義を復習する
14	失語症模擬症例演習②	講義・TBL	これまでの講義を復習する
15	簡易的認知機能検査演習①	講義・TBL	検査マニュアルを予習する
16	簡易的認知機能検査演習②	講義・TBL	検査マニュアルを予習する
17	知能検査演習①	講義・TBL	検査マニュアルを予習する
18	知能検査演習②	講義・TBL	検査マニュアルを予習する
19	知能検査演習③	講義・TBL	検査マニュアルを予習する
20	知能検査演習④	講義・TBL	検査マニュアルを予習する
21	知能検査演習⑤	講義・TBL	検査マニュアルを予習する

22	知能検査演習⑥	講義・TBL	検査マニュアルを予習する
23	注意検査演習①	講義・TBL	検査マニュアルを予習する
24	注意検査演習②	講義・TBL	検査マニュアルを予習する
25	記憶検査演習①	講義・TBL	検査マニュアルを予習する
26	記憶検査演習①	講義・TBL	検査マニュアルを予習する
27	認知リハビリテーション①	講義・TBL	これまでの講義を復習する
28	認知リハビリテーション②	講義・TBL	これまでの講義を復習する
29	認知リハビリテーション③	講義・TBL	これまでの講義を復習する
30	単位認定試験・解説	試験・講義	これまでの講義を復習する

■受講上の注意

各講義のねらいに従って、予習・復習をする。

■成績評価の方法

終講試験にて60点以上で合格、60点未満で不合格とする。不合格の場合、再試験は願い出により1回行う。

■テキスト参考書など

テキスト①:なるほど！失語症の評価と治療、各種検査マニュアル

■備考

TBLとは能動的学習を育成することを重視し、グループで協働して互いに教え合う能力を鍛える少人数チームでの学習教育法である。

■実務経験

本科目は、言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

失語・高次脳機能障害学特論

講師：専任教員

単位数：2単位　時間数：60時間　授業学年：4学年

必修選択：必修

■科目目標

言語聴覚療法専門科目の各特論は、言語聴覚士にとって必須の基礎・専門知識について知識と理解を深め、4年間の集大成につなげる講義である。本講義は卒業後の言語聴覚士としての活動に向けた知識の整理、確認を目標としており、実際にこれまでに履修した各論の資料、教科書、ノートが重要な資料となる。これらをベースに個別学習、グループ学習等、適宜形態を用いて講義を進めていく。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	失語症の定義について理解を深める。	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
2	失語症の鑑別について理解を深める。	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
3	失語症の原因疾患について理解を深める。	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
4	失語症の病巣について理解を深める。	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
5	言語側性化について理解を深める。	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
6	失語症候群の一般症状について理解を深める。	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
7	失語症候群の発語面の症状について理解を深める(1)	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
8	失語症候群の理解面の症状について理解を深める。	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
9	復唱の障害について理解を深める。	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
10	読字と書字の障害について理解を深める。	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
11	古典的失語症候群について理解を深める。	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
12	語義失語、皮質下性失語、交叉性失語について理解を深める。	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
13	語唖、語聾、失読失書について理解を深める。	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
14	原発性進行型失語症、後天性失語症について理解を深める。	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
15	まとめと中間試験	講義 試験	前半部分のまとめと復習の逐次準備を心掛ける
16	失語症の評価、診断過程、評価法について理解を深める(1)	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
17	失語症の評価、診断過程、評価法について理解を深める(2)	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
18	失語症のリハビリテーション過程、言語訓練の理論と技法について理解を深める(1)	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
19	失語症のリハビリテーション過程、言語訓練の理論と技法について理解を深める(2)	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
20	神経心理学の基本概念について理解を深める。	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
21	各種高次脳機能障害の病巣・症状・対応する検査について理解を深める(1)	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う

22	各種高次脳機能障害の病巣・症状・対応する検査について理解を深める(2)	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
23	各種高次脳機能障害の病巣・症状・対応する検査について理解を深める(3)	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
24	各種高次脳機能障害の病巣・症状・対応する検査について理解を深める(4)	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
25	各種高次脳機能障害の病巣・症状・対応する検査について理解を深める(5)	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
26	各種高次脳機能障害の病巣・症状・対応する検査について理解を深める(6)	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
27	各種高次脳機能障害の病巣・症状・対応する検査について理解を深める(7)	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
28	高次脳機能障害の訓練・援助の基本原則について理解を深める。	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
29	高次脳機能障害の訓練・援助の方法、チームアプローチについて理解を深める。	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
30	試験・まとめ	試験	

■受講上の注意

授業活動の状況や施設使用状況により、上記の内容や順番を一部変更する場合がある。

■成績評価の方法

中間試験・本試験結果を合算とする。
※全体評価60%以上で合格、60%未満で不合格とする。不合格の場合、再試験は願い出により1回行う。

■テキスト参考書など

適宜資料を配付

■備考

GW＝グループワーク

■実務経験

本科目は言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

言語発達障害学Ⅰ

講師：福元 恵美

単位数：1単位　時間数：30時間　授業学年：1学年

必修選択：必修

■科目目標

定型の言語獲得過程を指標として、発達障害に伴う言語発達障害の特徴と支援、各種評価法の概要を理解することを目標とする。特に知的能力障害・自閉症スペクトラム障害・注意欠如/多動性障害・特異的言語発達障害・限局性学習障害・脳性麻痺・小児失語症について理解を深める。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	言語発達障害の概要について学ぶ。 （言語発達障害の分類と定義・背景・臨床について）	講義	言語発達学の復習をしておくこと。
2	知的能力障害の特徴について理解する。	講義	予習・復習 小テスト実施。
3	知的能力障害の指導・支援について理解する。	講義	予習・復習 小テスト実施。
4	自閉症スペクトラム障害の特徴について理解する。	講義	予習・復習 小テスト実施。
5	自閉症スペクトラム障害の指導と支援について理解する。	講義	予習・復習 小テスト実施。
6	注意欠如/多動性障害の特徴について理解する。	講義	予習・復習 小テスト実施。
7	注意欠如/多動性障害の指導・支援について理解する。	講義	予習・復習 小テスト実施。
8	特異的言語発達障害の特徴を理解し、指導・支援の方法を学ぶ。	講義	予習・復習 小テスト実施。
9	限局性学習障害の特徴を理解し、指導・支援の方法を学ぶ。	講義	予習・復習 小テスト実施。
10	脳性麻痺・重複障害の特徴について理解する。	講義	予習・復習 小テスト実施。
11	脳性麻痺・重複障害の指導・支援について理解する。	講義	予習・復習 小テスト実施。
12	小児失語症の特徴を理解し、指導・支援の方法を学ぶ。	講義	予習・復習 小テスト実施。
13	情報収集の仕方や各種検査の概要を学ぶ。①	講義	予習・復習 小テスト実施。
14	情報収集の仕方や各種検査の概要を学ぶ。②	講義	予習・復習 小テスト実施。
15	単位認定試験・まとめ	試験、講義	これまでの復習をしておく。

■受講上の注意

予習として指定された教科書や資料の項目を読んでおくこと。
授業活動の状況により上記の内容・講義順番を変更する場合もある。

■成績評価の方法

終講試験にて60点以上で合格、60点未満で不合格とする。不合格の場合、再試験は願い出により1回行う。

■テキスト参考書など

標準言語聴覚障害学　言語発達障害学第3版，医学書院
その他の参考資料は随時配付する。

■備考

■実務経験

本科目は、言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

言語発達障害学Ⅱ

講師：福元 恵美

単位数：1単位　時間数：30時間　授業学年：2学年

必修選択：必修

■科目目標

・こどもの全体像の把握、問題点の抽出のために必要な評価と基本的なアプローチ方法について学ぶ。特に言語発達支援に必要な考え方を理解する。
・事例を用い、言語発達障害児とその家族への支援についてグループワークを通して自分の意見を述べられるようになる。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	国リハ式（S-S法）言語発達遅滞検査について概要を理解する。	講義、演習	予習、復習 必要な検査道具・物品の準備
2	国リハ式（S-S法）言語発達遅滞検査の実施ができるようになる。①	演習	予習、復習 必要な検査道具・物品の準備
3	国リハ式（S-S法）言語発達遅滞検査の実施ができるようになる。②	演習	予習、復習 必要な検査道具・物品の準備
4	国リハ式（S-S法）言語発達遅滞検査の実施ができるようになる。③	演習	予習、復習 必要な検査道具・物品の準備
5	発達段階に応じた指導について学ぶ。 （前言語期・幼児前期・幼児後期・学童期）	講義、グループワーク	自分の考えを伝え、相手の話をよく聞き、グループとしての意見をまとめられるようにする。
6	自閉症スペクトラム障害児・者への支援、SSTについて学ぶ。①	講義	復習
7	自閉症スペクトラム障害児・者への支援、SSTについて学ぶ。②	講義	復習
8	脳性麻痺児・者への支援について学ぶ。①	講義	復習
9	脳性麻痺児・者への支援について学ぶ。②	講義	復習
10	指導・支援の方法と原則について学ぶ。 （発達論的アプローチ、行動療法、インリアルアプローチについて）	講義	復習
11	指導・支援の方法と原則について学ぶ。 （国リハ式〈S-S法〉言語発達遅滞検査に基づく指導、太田ステージについて）	講義	復習
12	ICT支援について、多言語児童生徒の学習支援について学ぶ。	講義	復習
13	環境調整・地域連携について学ぶ。	講義	復習
14	事例検討 （事例を用い全体像の把握、問題点抽出、支援方法について考える）	講義、グループワーク	自分の考えを伝え、相手の話をよく聞き、グループとしての意見をまとめられるようにする。
15	単位認定試験・まとめ	試験、解説	これまでの講義の復習をしておく。

■受講上の注意
言語発達障害学の総括。言語発達学・発達心理学・認知学習心理学の知識を復習する。
授業活動の状況により上記の内容・講義順番を変更する場合もある。

■成績評価の方法
終講試験にて60点以上で合格、60点未満で不合格とする。不合格の場合、再試験は願い出により1回行う。

■テキスト参考書など
言語発達障害学第3版，医学書院
その他の参考資料は随時配布する。

■備考

■実務経験
本科目は言語聴覚士として実務経験のある教員により実施する。

言語発達障害学Ⅲ

講師：雲井 未歓

単位数：2単位	時間数：40時間	授業学年：2学年
必修選択：必修		

■科目目標

1. 学習障害（特異的読み書き障害）の定義、診断基準を理解し、説明することができる。
2. 学習障害（特異的読み書き障害）の検査（音読検査）を実施することができる。
3. 読み書き障害の原因とサブタイプについて理解し、状態像に応じた支援方法を考えることができる。
4. 各種発達障害の状態像・特徴について、言語機能・言語発達の諸側面との関連から理解する。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	インクルーシブ社会に向けた障害理解と支援の枠組みを理解し、支援者としての自己の在り方と目標を確認する	講義	リハビリテーション概念と社会保障の基本的内容の予習
2	学習障害の定義と分類、診断基準について学ぶ	講義	教科書・資料の予習・復習
3	学習障害の原因と脳の機能障害部位について学ぶ	講義	教科書・資料の予習・復習
4	学習障害（特異的読み障害）の診断手順と音読検査の実施方法について学ぶ（症例1の分析）	講義 GW	グループ別の学習・発表を含む
5	学習障害（特異的読み障害）の診断手順と音読検査の実施方法について学ぶ（症例2の分析）	講義 GW	グループ別の学習・発表を含む
6	学習障害のサブタイプと臨床症状の多様性について学ぶ	講義	教科書・資料の予習・復習
7	読み書きの認知的機序と読み書き困難の背景について学ぶ	講義	教科書・資料の予習・復習
8	学習障害児のアセスメントと治療的介入の方法・内容について学ぶ	講義	教科書・資料の予習・復習
9	読み書きの学習支援教材の特徴と活用方法について学ぶ	講義	教科書・資料の予習・復習
10	学習障害児への読み書きの学習支援方法について学ぶ（ひらがなの読み書き）	講義	教科書・資料の予習・復習
11	学習障害児への読み書きの学習支援方法について学ぶ（漢字の読み書き）	講義	教科書・資料の予習・復習
12	ADHDやASDを合併する学習障害の事例について学ぶ	講義	教科書・資料の予習・復習
13	特別支援教育における学習障害への対応とRTIモデルについて学ぶ	講義	教科書・資料の予習・復習
14	言語の多様な機能的側面と知的障害における言語媒介学習について学ぶ	講義 GW	グループ別の学習・発表を含む
15	発達障害児（特にADHD）における実行機能と言語・社会的発達について学ぶ	講義 GW	グループ別の学習・発表を含む
16	発達障害児（特にADHDとASD）におけるとソーシャルスキルの支援について学ぶ	講義 GW	グループ別の学習・発表を含む
17	発達障害児（特にASD）における言語・コミュニケーション障害と心の理論について学ぶ	講義 GW	グループ別の学習・発表を含む
18	発達障害児（特にASD）における弱い中枢性統合と構造化による支援について学ぶ	講義 GW	グループ別の学習・発表を含む
19	二次障害のリスクと予防的対応ついて学ぶ	講義	教科書・資料の予習・復習
20	試験・まとめ	試験	

■受講上の注意

■成績評価の方法

終講試験評価60点以上で合格、60点未満で不合格とする。不合格の場合、再試験は願い出により1回行う。

■テキスト参考書など

特異的発達障害診断・治療のための実践ガイドライン−わかりやすい診断手順と支援の実際−,診断と治療社

■備考

GW＝グループワーク

■実務経験

言語発達障害学演習Ⅰ

講師:福元 恵美

単位数:1単位　時間数:30時間　授業学年:3学年

必修選択:必修

■科目目標

本科目では小児領域で使用頻度の多い検査(発達検査・知能検査・言語検査・認知学習検査)を中心に客観的視点とそれを活用した実践をさらに深めること、加えて分析・解釈の視点を経験することを目標とする。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	評価の目的、観点、手順、まとめ方について学ぶ。 基本情報の収集と手順を説明できるようにする。	講義、グループワーク	講義内容を復習
2	発達検査の概要を把握し、実施できるようになる。①	講義、グループワーク	講義内容を復習
3	発達検査の概要を把握し、実施できるようになる。②	講義、グループワーク	講義内容を復習
4	知能検査の概要を把握し、実施できるようになる。①	講義、グループワーク	講義内容を復習
5	知能検査の概要を把握し、実施できるようになる。②	講義、グループワーク	講義内容を復習
6	言語検査の概要を把握し、実施できるようになる。①	講義、グループワーク	講義内容を復習
7	言語検査の概要を把握し、実施できるようになる。②	講義、グループワーク	講義内容を復習
8	言語検査の概要を把握し、実施できるようになる。③	講義、グループワーク	講義内容を復習
9	言語検査の概要を把握し、実施できるようになる。④	講義、グループワーク	講義内容を復習
10	言語検査の概要を把握し、実施できるようになる。⑤	講義、グループワーク	講義内容を復習
11	学習・認知検査の概要を把握し、実施できるようになる。①	講義、グループワーク	講義内容を復習
12	学習・認知検査の概要を把握し、実施できるようになる。②	講義、グループワーク	講義内容を復習
13	症例を用いて評価を行い、問題点抽出を行う 。①	講義、グループワーク	講義内容を復習
14	症例を用いて評価を行い、問題点抽出を行う 。②	講義、グループワーク	講義内容を復習
15	単位認定試験・解説	試験・まとめ	各種検査に関する試験とレポートを作成する。

■受講上の注意

積極的参加および予習・復習が必要である.

講義の進行状況により上記の内容や順番を変更することがある。

■成績評価の方法

・各種検査に関する試験を実施。

※60点以上で合格、60点未満で不合格とする。不合格の場合、再試験は願い出により1回行う。

■テキスト参考書など

配布資料

■備考

■実務経験

本科目は言語聴覚士、公認心理師として実務経験のある教員による授業である。

言語発達障害学演習Ⅱ

講師：福元 恵美

単位数：2単位　時間数：60時間　授業学年：3学年

必修選択：必修

■科目目標

言語発達障害児の評価は1）ことばに関連する諸側面の状態を明らかにする。2）障害の原因の推定。3）具体的目標の設定。4）長期的展望を提起するために行われる。
本科目では正常発達など情報収集に必要な知識をもとに、適切な検査を選択し、実施できることを目標にする。実際に子ども（幼児）に対してことばの発達スクリーニングを行い、評価のまとめを実施する。
また、子どもや保護者、周囲の方に必要な支援や訓練方法等も考えられる力を身につけられるようにする。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	きらきらチェック（ことばの発達スクリーニング）について理解する。 （令和8年度よりのびのびチェックへ名称変更）	講義	言語発達について復習をしておく。
2	初回インテーク	講義・演習	講義と演習を組み合わせて行う。
3	質問-応答関係検査の概要を理解する。 検査が行えるようになる。	講義・演習	講義と演習を組み合わせて行う。
4	質問-応答関係検査演習	演習	質問-応答関係検査について復習をしておく。
5	質問-応答関係検査演習	演習	質問-応答関係検査について復習をしておく。
6	構音検査を実施できるようになる。	演習	構音検査の復習を行う。
7	構音検査を実施できるようになる。	演習	構音検査の復習をしておく。
8	仮名単語の音読を被検者にとり、反応に合わせて対応ができるようになる。	演習	
9	質問-応答関係検査、構音検査、仮名単語の音読課題を被検者にとれるようになる。	演習	各検査、課題の練習を行う。
10	しらゆきこども園での検査演習①	演習	質問-応答関係検査、構音検査、音読の仕方など復習・練習をしておくこと。
11	しらゆきこども園での検査演習②	演習	質問-応答関係検査、構音検査、音読の仕方など復習・練習をしておくこと。
12	しらゆきこども園での検査演習③	演習	質問-応答関係検査、構音検査、音読の仕方など復習・練習をしておくこと。
13	しらゆきこども園での検査演習④	演習	質問-応答関係検査、構音検査、音読の仕方など復習・練習をしておくこと。
14	検査結果のまとめができるようになる。①	演習	個人情報漏洩に注意する。
15	検査結果のまとめができるようになる。②	演習	個人情報漏洩に注意する。
16	検査結果の解釈ができるようになる。①	グループワーク	検査結果の内容を把握しておく。
17	検査結果の解釈ができるようになる。②	グループワーク	検査結果の内容を把握しておく。
18	公開講座（ことばの発達チェック）について目的を理解する。	講義	定型のことばの発達について復習をしておく。
19	質問応答関係検査（全部・簡易版）の実施ができる。①	演習	質問応答関係検査の復習をしておく。
20	質問応答関係検査（全部・簡易版）の実施ができる。②	演習	質問応答関係検査の復習をしておく。
21	PVT-R絵画語彙発達検査の実施ができる。①	演習	PVT-R絵画語彙発達検査の復習をしておく。

22	PVT-R絵画語彙発達検査の実施ができる。②	演習	PVT-R絵画語彙発達検査の復習をしておく。
23	被検者（小児）に対して実際に検査がとれるようになる。①	演習	これまでの検査の復習をしておく。
24	被検者（小児）に対して実際に検査がとれるようになる。②	演習	これまでの検査の復習をしておく。
25	被検者（小児）に対して実際に検査がとれるようになる。③	演習	これまでの検査の復習をしておく。
26	被検者（小児）に対して実際に検査がとれるようになる。④	演習	これまでの検査の復習をしておく。
27	検査結果から評価のまとめができるようになる。①	講義・グループワーク	復習をしておく。
28	検査結果から評価のまとめができるようになる。②	講義・グループワーク	復習をしておく。
29	検査結果から評価のまとめができるようになる。③	講義・グループワーク	復習をしておく。
30	担当児の検査結果から評価のまとめを行う。 レポートを作成する。	単位認定試験・解説	これまで実施した内容の復習を行う。

■受講上の注意

学外演習も兼ねているため、言葉遣いや身なりに特に気を付けること。
個人情報保護について十分理解し取り組むこと。

■成績評価の方法

きらきらチェック時の内容と秋の公開講座（ことばのチェック）演習それぞれ評価を行い、評価点を合算する。
・きらきらチェック実施時の様子（服装・態度・検査手順）10点/100点
・きらきらチェック評価まとめ（評価内容・考察・誤字脱字等）60点/100点
・公開講座（ことばのチェック）演習時のレポート30点/100点
上記の合計で60点以上で合格、60点未満で不合格とする。不合格の場合、再試験は願い出により1回行う。

■テキスト参考書など

随時資料を配布する。

■備考

令和8年度よりきらきらチェックからのびのびチェックへ名称変更を行う。
発達チェックの対象児も年長児から年中児へ変更。

■実務経験

本科目は言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

言語発達障害学特論

講師:専任教員

単位数:2単位　時間数:60時間　授業学年:4学年

必修選択:必修

■科目目標

言語聴覚療法専門科目の各特論は、言語聴覚士にとって必須の基礎・専門知識について知識と理解を深め、4年間の集大成につなげる講義である。本講義は卒業後の言語聴覚士としての活動に向けた知識の整理、確認を目標としており、実際にこれまでに履修した各論の資料、教科書、ノートが重要な資料となる。これらをベースに個別学習、グループ学習等、適宜形態を用いて講義を進めていく。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	標準的言語発達、言語・コミュニケーションの障害について理解を深める。	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
2	言語発達障害の診断基準・国際疾病分類について理解を深める。	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
3	言語発達障害と関連する主要な障害の種類と疾患(1)	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
4	言語発達障害と関連する主要な障害の種類と疾患(2)	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
5	言語発達障害と関連する主要な障害の種類と疾患(3)	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
6	言語発達障害学の療育、教育・就労支援体制について理解を深める。	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
7	言語発達障害学の評価・収集する情報の種類	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
8	発達検査(1)	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
9	発達検査(2)	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
10	知能検査(1)	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
11	知能検査(2)	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
12	言語発達検査(1)	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
13	言語発達検査(2)	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
14	学習認知検査	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
15	まとめと中間試験	講義 試験	前半部分のまとめと復習の逐次準備を心掛ける
16	コミュニケーション検査(1)	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
17	コミュニケーション検査(2)	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
18	言語発達障害の評価・情報の整理、指導訓練の方針、目標・プログラム設定、家族指導・多職種連携方針	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
19	言語発達段階に即した指導(前言語期)	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
20	言語発達段階に即した指導(幼児前期)	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
21	言語発達段階に即した指導(幼児後期)	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う

22	言語発達段階に即した指導(学童期)	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
23	言語発達段階に即した指導(青年・成人期)	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
24	言語発達障害の障害別指導・支援(1)	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
25	言語発達障害の障害別指導・支援(2)	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
26	言語発達障害の障害別指導・支援(3)	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
27	言語発達障害への働きかけの諸技法(1)	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
28	言語発達障害への働きかけの諸技法(2)	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
29	言語発達障害への働きかけの諸技法(3)	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
30	試験・まとめ	試験	

■受講上の注意

授業活動の状況や施設使用状況により、上記の内容や順番を一部変更する場合がある。

■成績評価の方法

中間試験・本試験結果を合算とする。
※全体評価60%以上で合格、60%未満で不合格とする。不合格の場合、再試験は願い出により1回行う。

■テキスト参考書など

適宜資料を配付

■備考

GW＝グループワーク

■実務経験

本科目は言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

発声発語障害学Ⅰ

講師:福元 恵美

単位数:1単位	時間数:15時間	授業学年:1学年
必修選択:必修		

■科目目標

言語聴覚障害学のうち、小児から成人までの発声発語障害領域を学ぶ。
①発声発語障害に関する基礎的な知識や病態を理解する。
②小児の構音獲得について学び、それを指標として機能性構音障害の概要を理解する。
③新版構音検査の概要を理解し、検査の実施ができるようになる。
④構音訓練の適応と注意点について理解する。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	話しことば(Speech)の障害と言語聴覚士の関わりについて理解する。	講義	復習
2	発達途上の構音の誤りと機能性構音障害について理解する。	講義	復習
3	異常構音(声門破裂音・咽頭摩擦音・咽頭破裂音・側音化構音・口蓋化構音・鼻咽腔構音)の特徴を理解する。①	講義	復習
4	異常構音(声門破裂音・咽頭摩擦音・咽頭破裂音・側音化構音・口蓋化構音・鼻咽腔構音)の特徴を理解する。②	講義	復習
5	新版構音検査の概要を知り、検査の実施ができるようになる。①	講義・演習	新版構音検査のマニュアルと記録用紙を準備する。
6	新版構音検査の概要を知り、検査の実施ができるようになる。②	講義・演習	新版構音検査のマニュアルと記録用紙を準備する。
7	構音訓練の適応と注意点について理解する。	講義・演習	復習
8	単位認定試験・解説	試験・講義	これまでの復習をしておく。

■受講上の注意

授業活動の状況により、上記の内容や順番は変更する場合もある。

■成績評価の方法

終講試験にて60点以上で合格、60点未満で不合格とする。不合格の場合、再試験は願い出により1回行う。

■テキスト参考書など
・標準言語聴覚障害学　発声発語障害学　医学書院
・適宜資料を配布する。

■備考

■実務経験

本科目は、言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

発声発語障害学Ⅱ

講師:川元 真由美

単位数:1単位	時間数:15時間	授業学年:1学年
必修選択:必修		

■科目目標

発声発語障害のなかでも流暢性障害(吃音)に関する理論と技術を学ぶ。吃音は幼児期に始まり発達・学習・環境などの多要因が関与すると考えられているものの、他の言語聴覚障害の領域に比べると未だ解明されていないことも多い。正しい知識を有し、患者様やご家族と向き合える知識及び技術を習得することを目標とする。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	吃音の定義を理解した上で、吃音者が抱える問題について言語面・心理面の症状を踏まえ説明できる。	講義/GW	事前学習①＊事前学習②の提示 GWでは積極的に活動を行う。
2	吃音の概要1（症状） 吃音症状について説明することができる。	講義/GW	小テスト＊事前学習③の提示 GWでは積極的に活動を行う。
3	吃音の概要2（メカニズム） 吃音のメカニズムについて説明できる。	講義/GW	小テスト＊事前学習④の提示 GWでは積極的に活動を行う。
4	評価 1（検査の概要・進展段階） 吃音評価の概要を把握し、進展段階について説明できる	講義/GW	小テスト＊事前学習⑤の提示 GWでは積極的に活動を行う。
5	評価 2（評価） 各種評価について概要を理解する。	講義/GW	小テスト＊事前学習⑥の提示 GWでは積極的に活動を行う。
6	評価 3（評価演習）	講義/GW	小テスト＊事前学習⑦の提示 GWでは積極的に活動を行う。
7	吃音の臨床 訓練・指導・支援法の概要を理解する。	講義/GW	小テスト＊事前学習⑧の提示 GWでは積極的に活動を行う。
8	終講試験およびまとめ	講義/GW	

■受講上の注意

授業活動の状況により、上記の内容や順番は変更する場合もある。

■成績評価の方法

課題(30%)・単位認定試験(70%)により総合的に判断し、本試験・再試験ともに60点/100点以上を合格とする。
不合格の場合、再試験は願い出により1回行う。

■テキスト参考書など

標準言語聴覚障害学　発声発語障害学 第3版，医学書院
言語聴覚療法技術ガイド，文光堂

■備考

GW＝グループワーク

■実務経験

本科目は、言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

発声発語障害学Ⅲ

講師:徳永 弘樹

単位数:1単位　時間数:20時間　授業学年:2学年

必修選択:必修

■科目目標

発声発語障害のなかでも、口腔・中咽頭がん等や口蓋裂にて生じる器質性構音障害を理解する。
器質性構音障害の評価の内容や実施方法を理解する。
異常構音に関する耳のトレーニングを実施し理解を深める。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	口唇口蓋裂に関する基礎知識	講義	
2	口唇口蓋裂に関する言語の問題点	講義	
3	口唇口蓋裂のチーム医療の流れ	講義	
4	口蓋裂言語検査	講義	
5	口蓋裂言語検査	演習	
6	構音障害の評価と訓練の流れ	講義	
7	言語評価・報告書	講義	
8	系統的構音訓練の手順	講義	
9	構音障害の特徴・聞き取り	演習	
10	試験・解説(あるいはまとめ)	試験	

■受講上の注意

■成績評価の方法

終講試験評価60点以上で合格、60点未満で不合格とする。不合格の場合、再試験は願い出により1回行う。

■テキスト参考書など

適宜資料を配布

■備考

■実務経験

本科目は、言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

発声発語障害学Ⅳ

講師：小牧 祥太郎

単位数：1単位	時間数：20時間	授業学年：2学年
必修選択：必修		

■科目目標

喉頭病変、発声の困難さにより生じる音声障害について病態と訓練方法を理解する。呼吸器についての知識を基本に、発声発語にかかわる諸器官の構造・機能を理解するとともに、聴覚印象評価、発声機能検査、音声（音響）分析検査、発声に関する多彩な訓練法等を経験し理解を深めることが目標となる。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	音声障害の病態を捉え定義について理解する。	GW・講義	特になし
2	発声にかかわる器官の構造を発声機能の視点で理解する。	講義	呼吸器や喉頭周囲の構造について復習しておく事が望ましい。
3	声帯を中心とした喉頭の（間接的・直接的）観察方法を知り、観察方法による描出方法の違いから喉頭周辺の構造について理解を深める。	講義・演習	機器の種類・名称と喉頭の描出方法の違いを整理する。
4	声の質を捉えGRBAS等の声の質の評価法を理解する。 音声（音響）分析検査（MDVP等）の使用意義を理解する。	講義・演習	声の多角的な表現方法の概要を整理する。
5	音声障害の原因と分類および症状について理解を深める。 音声障害の代表的な疾患について理解を深める。	講義	疾患の画像所見を中心に使用テキストを読んでおくことが望ましい。
6	音声障害の指導・訓練と治療（手術、薬剤含む）について概要を知る。	講義・演習	疾患を元に指導・訓練法の体系的な把握に努める。
7	症状対処的音声治療・包括的音声治療を経験し理解を深める。	講義・演習	喉頭周囲の構造と状態（病態）をイメージしながら行う。
8	無喉頭発声の種類と特徴について理解を深める。	GW・講義	無喉頭後の状態を理解するために、呼吸・発声機能の構造について復習を行う事。
9	痙攣性発声障害の位置づけと訓練・関連知識を深める。	GW・講義	発声機能の構造・機能について復習を行う事。
10	試験・解説（あるいはまとめ）	試験・講義	

■受講上の注意

授業活動の状況により、上記の内容や順番は変更する場合もある。

■成績評価の方法

本試験、再試験ともに60％以上を合格とする。

■テキスト参考書など

シリーズ監修 藤田 郁代：標準言語聴覚障害学　発声発語障害学 第3版, 医学書院
配付資料

■備考

講義内容に応じて遠隔講義を実施する場合もある。

■実務経験

本科目は言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

発声発語障害学Ⅴ

講師：小牧 祥太郎

単位数：1単位	時間数：20時間	授業学年：2学年
必修選択：必修		

■科目目標

コミュニケーション障害分野において特に発現率が多いDysarthriaを対象に、基礎知識の習得、生じうる疾患を把握して、運動障害による発話障害を捉え、Dysarthriaのタイプ分類について理解する。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	Dysarthriaの病態を理解する。症例VTRよりDysarthriaの全体像について学ぶ。	講義	特になし
2	Speechの仕組みの理解を深める（復習）。 Dysarthriaのタイプ分類の考え方を理解する。	講義	使用テキストを読んでおくことが望ましい。 （参照するページは講義の際に案内
3	上位運動ニューロン障害タイプのDysarthrialについて理解する（皮質延髄路両側性障害について）。	講義	使用テキストを読んでおくことが望ましい。 （参照するページは講義の際に案内
4	上位運動ニューロン障害タイプのDysarthrialについて理解する（皮質延髄路一側性障害について）。	講義	使用テキストを読んでおくことが望ましい。 （参照するページは講義の際に案内
5	下位運動ニューロン障害タイプによるDysarthrialについて学ぶ。	講義	使用テキストを読んでおくことが望ましい。 （参照するページは講義の際に案内
6	仮性球麻痺・球麻痺の違いについて理解する（病態・症状について）。	講義	使用テキストを読んでおくことが望ましい。 （参照するページは講義の際に案内
7	錐体外路障害タイプによるDysarthrialについて学ぶ。	講義	使用テキストを読んでおくことが望ましい。 （参照するページは講義の際に案内
8	小脳障害タイプによるDysarthrialについて学ぶ。	講義	使用テキストを読んでおくことが望ましい。 （参照するページは講義の際に案内
9	運動系多重障害タイプによるDysarthrialについて学ぶ。	講義	使用テキストを読んでおくことが望ましい。 （参照するページは講義の際に案内
10	試験・解説（あるいはまとめ）	試験・講義	

■受講上の注意

授業活動の状況により、上記の内容や順番は変更する場合もある。

■成績評価の方法

本試験、再試験ともに60％以上を合格とする。

■テキスト参考書など

西尾正輝著「ディサースリア臨床標準テキスト 第2版」医歯薬出版株式会社
病気が見える　Vol.7 第2版 メディックメディア

■備考

講義内容に応じて遠隔講義を実施する場合もある。

■実務経験

本科目は、言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

発声発語障害学演習Ⅰ

講師：川路 麻里亜、南 久美
福元 恵美、川元真由美

単位数：1単位　時間数：30時間　授業学年：2学年

必修選択：必修

■科目目標

発声発語障害学Ⅰ・Ⅱで学んだ内容を基盤とし、構音検査と構音訓練、吃音検査と吃音の臨床について学び、評価・訓練が行えるようになることを目標とする。
本講義では、特に①新版構音検査の評価・まとめができるようになる。②機能性構音障害や異常構音に対する構音訓練ができるようになる。③吃音に対する評価・訓練の理解。を目標とする。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	機能性構音障害について復習。 新版構音検査について復習。	講義	新版構音検査のマニュアルと記録用紙を準備する。
2	新版構音検査が実施できるようになる。（症例の音声データを用いて）	演習	新版構音検査のマニュアルと記録用紙を準備する。
3	新版構音検査のまとめができるようになる。①	演習	新版構音検査のマニュアルと記録用紙を準備する。
4	新版構音検査のまとめができるようになる。②	演習	新版構音検査のマニュアルと記録用紙を準備する。
5	機能性構音障害に対する訓練が行えるようになる。①	講義 演習	復習
6	機能性構音障害に対する訓練が行えるようになる。②	講義 演習	復習
7	異常構音について復習。 異常構音に対する構音訓練を理解する。	講義 演習	復習
8	異常構音に対する構音訓練が行えるようになる。	講義 演習	復習
9	吃音評価の復習、吃音検査法の実施	講義 演習	復習
10	吃音の訓練・指導・支援の概要を理解する①	講義 演習	復習
11	吃音の訓練・指導・支援の概要を理解する②	講義 演習	復習
12	吃音の訓練・指導・支援の概要を理解する③	講義 演習	復習
13	吃音の症例をもとに評価・訓練を理解する①	講義 演習	復習
14	吃音の症例をもとに評価・訓練を理解する②	講義 演習	復習
15	単位認定試験、まとめ	試験、講義	これまでの復習をしておく。

■受講上の注意

授業活動の状況により、上記の内容や順番は変更する場合もある。

■成績評価の方法

終講試験にて60点以上で合格、60点未満で不合格とする。不合格の場合、再試験は願い出により1回行う。

■テキスト参考書など
・標準言語聴覚障害学　発声発語障害学　医学書院
・適宜資料を配布する。

■備考

■実務経験

本科目は言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

発声発語障害学演習Ⅱ

講師：小牧 祥太郎

単位数：1単位　時間数：40時間　授業学年：3学年

必修選択：必修

■科目目標

コミュニケーション障害分野において特に発現率が多いDysarthriaの発話の異常性を理解し、運動障害、神経学的特徴を加味しDysarthriaのタイプ分類の判定方法について学ぶ。その後、標準ディサースリア検査（以下、AMSD）を通して発声発語器官評価の具体的な実施方法を学び、治療にあたり発声発語器官への介入方法、発話の調整手法を理解する。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	Dysarthriaの障害構造に関して、発声発語障害学Ⅴで学んだ内容をもとに復習を行う。	講義・演習	確認問題を実施し習熟状況の把握を行う。
2	Dysarthriaの発話特徴について全体像をつかむ。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。講義中、適宜リスニングを実施する。
3	Dysarthriaの発話特徴について運動障害タイプに応じた特徴をつかむ。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。講義中、適宜リスニングを実施する。
4	医学的診断・発話特徴・神経学的特徴からDysarthriaを捉える。	講義・演習	使用テキストを読んでおくことが望ましい。（参照するページは講義の際に案内を行う。）
5	模擬症例を通して、運動障害の特徴、発話特徴などよりタイプ分類について考察する。	講義・演習	特になし
6	Dysarthriaへのアプローチについて概要をつかみ、タイプ別の介入方法を捉える。	講義・演習	使用テキストを読んでおくことが望ましい。（参照するページは講義の際に案内を行う。）
7	発声発語器官への評価・介入の意義を理解し、AMSDの検査内容の構成、実施概要を学ぶ。また、定性的な評価、定量的な評価の側面について理解する。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
8	AMSDを実際に行い、評価の視点と状態の解釈を行う（呼吸機能について）。	講義・演習	AMSDに必要な道具を準備すること（道具の詳細は講義内にて述べる）。
9	AMSDを実際に行い、評価の視点と状態の解釈を行う（発声機能・鼻咽腔閉鎖機能について）。	講義・演習	AMSDに必要な道具を準備すること（道具の詳細は講義内にて述べる）。
10	AMSDを実際に行い、評価の視点と状態の解釈を行う（口腔構音機能（運動範囲・反射の評価）について）。	講義・演習	AMSDに必要な道具を準備すること（道具の詳細は講義内にて述べる）。
11	AMSDを実際に行い、評価の視点と状態の解釈を行う（口腔構音機能（交互反復・筋力）について）。	講義・演習	AMSDに必要な道具を準備すること（道具の詳細は講義内にて述べる）。
12	AMSDを実際に行い、評価の視点と状態の解釈を行う（補助検査とその他の補足説明）。	講義・演習	AMSDに必要な道具を準備すること（道具の詳細は講義内にて述べる）。
13	発声発語器官（呼吸機能）を理解し、介入方法について学ぶ。	講義・演習	講義とGWを適宜切り替えて行う。実習室にて講義を実施予定。
14	発声発語器官（発声機能）を理解し、介入方法について学ぶ。	講義・演習	講義とGWを適宜切り替えて行う。実習室にて講義を実施予定。
15	発声発語器官（鼻咽腔閉鎖機能・口腔構音機能）を理解し、介入方法について学ぶ。	講義・演習	講義とGWを適宜切り替えて行う。実習室にて講義を実施予定。
16	発話速度の調整法と、訓練時の課題音（対照生成ドリルなど）の設定について学ぶ。	講義・演習	講義とGWを適宜切り替えて行う。
17	模擬症例を想定し、評価視点の共有や訓練プログラムの立案についてCase Study（症例検討）を行う。	講義・演習	講義とGWを適宜切り替えて行う。
18	模擬症例を想定し、発声発語器官検査としてAMSDの実技試験を行う。	講義・演習	AMSDの必要物品を準備し、実習着を着用する。※物品準備も実技試験の採点対象とする。
19	模擬症例を想定し、発声発語器官検査としてAMSDの実技試験を行う。 検査実施後にフィードバックを行い改善事項等の共有を行う。	講義・演習	AMSDの必要物品を準備し、実習着を着用する。※物品準備も実技試験の採点対象とする。
20	試験・解説（あるいはまとめ）	試験・講義	

■受講上の注意

授業活動の状況や実習室の利用状況に応じて、上記の内容や順番は変更する場合がある。
講義内容によっては徒手的な介入を行う為、講義前後は入念な手指の清潔管理に努めること。

■成績評価の方法

AMSD実技試験とその後のレポートで30%相当、期末の単位認定試験にて70%相当とし、上記2つにおいて、本試験・再試験共に60%以上を合格とする。

■テキスト参考書など

ディサースリア臨床標準テキスト　第2版　医歯薬出版株式会社、標準ディサースリア検査　インテルナ出版、その他、適宜資料を配布する。

■備考

■実務経験

本科目は、言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

摂食嚥下障害学Ⅰ

講師：小牧 祥太郎

単位数：1単位	時間数：30時間	授業学年：2学年
必修選択：必修		

■科目目標

昨今、高齢社会に伴い摂食嚥下障害は社会的な問題となっている。言語聴覚士は、医師または歯科医師の指示のもとに、診療の補助として嚥下訓練を実施でき、嚥下訓練の実施が法的に明記されている唯一の専門職である。本講義では、摂食嚥下の基礎である解剖・生理から嚥下モデル、摂食嚥下障害を生じうる疾患や病態について学ぶ。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	摂食嚥下障害の概要を理解する（嚥下障害と取り巻く状況について）。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
2	摂食嚥下障害の理解に必要な解剖を理解する（口腔・咽頭を中心に）。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
3	摂食嚥下障害の理解に必要な解剖を理解する（喉頭・食道を中心に）。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
4	咀嚼の生理と神経機構について理解する。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
5	嚥下モデルについて理解する（モデルの概要について）。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。動画サイトなどで嚥下モデルを見ておくことを推奨する。
6	嚥下モデルについて理解する（従来モデル（3、4期モデル）、臨床モデル（5期モデル））。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。動画サイトなどで嚥下モデルを見ておくことを推奨する。
7	嚥下モデルについて理解する（プロセスモデル）。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。動画サイトなどで嚥下モデルを見ておくことを推奨する。
8	摂食嚥下に関わる神経機構について理解する（嚥下反射・呼吸と咳嗽反射）。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
9	年齢による嚥下状態の変化を理解する（小児嚥下（発達的変化）、高齢者嚥下（機能低下、服薬の影響）について）。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
10	摂食嚥下障害の誤嚥の症状と分類について理解する。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
11	摂食嚥下障害を起こす疾患について理解する（運動障害性（神経性））。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
12	摂食嚥下障害を起こす疾患について理解する（器質性・機能性）。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
13	高次脳機能障害、認知症 etc の問題に伴う摂食嚥下障害について理解する。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
14	摂食嚥下障害の合併症（誤嚥性肺炎・脱水・低栄養 etc）について理解する。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。嚥下モデルについてレポートを課す場合がある。
15	試験・解説（あるいはまとめ）	試験・講義	

■受講上の注意

授業活動の状況により、上記の内容や順番は変更する場合もある。

■成績評価の方法

本試験、再試験ともに60％以上を合格とする。

■テキスト参考書など

最新言語聴覚学講座　摂食嚥下障害学　医歯薬出版株式会社
その他参考資料は随時配布を行う。

■備考

講義内容に応じて遠隔講義を実施する場合もある。

■実務経験

本科目は、言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

摂食嚥下障害学Ⅱ

講師：小牧 祥太郎

単位数：1単位　時間数：30時間　授業学年：3学年

必修選択：必修

■科目目標

本講義では、嚥下造影検査、嚥下内視鏡検査を中心とする摂食嚥下障害の各種検査法と評価法について学び、適切な治療方針を選択できるようになる事を目標とする。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	摂食嚥下障害について復習を行う（主に嚥下時動態などの基礎について）。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。2学年次の講義である「摂食嚥下障害学Ⅰ」の内容について十分復習を行っておくこと。
2	摂食 嚥下評価における情報収集（基本的情報・医学的情報）、嚥下器官検査（構音器官）について学ぶ。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
3	嚥下器官検査（音声所見）、理学的所見、神経学的所見（反射）について学ぶ。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
4	神経学的所見（脳神経）、簡便な検査（水飲み検査、反復唾液飲み検査など）について学ぶ。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
5	呼吸動態の評価（酸素飽和度状態の見方）、嚥下誘発検査について学ぶ。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
6	唾液分泌検査、特殊な状況下での評価（着色水テスト等）について学ぶ。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
7	不顕性誤嚥を測れる検査、研究的意味合いの強い検査について学ぶ。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
8	嚥下造影検査の概要とその適応について、また、使用機器について学ぶ。 嚥下造影検査の読影方法を理解し、異常所見とその解釈について学ぶ。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
9	症例ごとの嚥下造影検査の異常所見について学び、説明を実施する。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。 グループに分かれてCase studyを実
10	嚥下造影検査装置について実際の機器の見学を行う。また、その際に造影検査のリスク等について学ぶ。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。診療放射線学科教員の協力のもと、嚥下造影にて使用する機器の見学を行う。
11	嚥下内視鏡検査を理解し、嚥下造影検査との観察項目の比較について学ぶ。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
12	研究的側面の強い検査について学ぶ。 頸部聴診法について学び、実践を行う。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
13	摂食嚥下障害の重症度分類について学ぶ（藤島のグレード等を参考に）。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
14	摂食嚥下障害のリハビリテーションの概要と訓練介入の進め方について学ぶ。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
15	試験・解説（あるいはまとめ）	試験・講義	

■受講上の注意

授業活動の状況や実習室の利用状況に応じて、上記の内容や順番を一部変更する場合がある。

■成績評価の方法

本試験、再試験ともに60％以上を合格とする。

■テキスト参考書など

最新言語聴覚学講座　摂食嚥下障害学　医歯薬出版株式会社
その他参考資料は随時配布を行う。

■備考

講義内容に応じて遠隔講義を実施する場合もある。

■実務経験

本科目は、言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

摂食嚥下障害学演習

講師：小牧 祥太郎

単位数：1単位　時間数：30時間　授業学年：3学年

必修選択：必修

■科目目標

本講義では、摂食嚥下障害学Ⅱの講義で学んだ、摂食嚥下障害の評価をもとに、訓練手法、代償法、外科的手術による摂食嚥下障害への対応を学ぶ。また、代替栄養方法なども学び、全体的な摂食嚥下障害患者のマネジメントについて理解する事を目標とする。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	摂食嚥下障害患者への評価手順について復習を行う。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。3学年次の講義である「摂食嚥下障害学Ⅱ」の内容について十分復習を行っておくこと。
2	訓練介入における運動理論等を知り、訓練立案の考え方を学ぶ。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
3	間接嚥下訓練について学ぶ（口腔ケア、サーマルスティミュレーション、皮膚のアイスマッサージ、嚥下体操　等）。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
4	間接嚥下訓練について学ぶ(呼吸訓練、頸部の可動域訓練、頸部挙上訓練、発声訓練等）。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
5	間接嚥下訓練について学ぶ(鼻咽腔閉鎖機能訓練、口腔構音器官訓練、バルーン訓練、構音訓練、電気刺激訓練等）。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
6	直接嚥下訓練について学ぶ(姿勢調整、環境調整、嚥下誘発訓練、K-point刺激、スライス法、息こらえ嚥下、努力嚥下、メンデルソン法）。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
7	摂食嚥下障害における代償法について学ぶ(姿勢の調整、頭位の調整（頸部屈曲・回旋）、一側嚥下、交互嚥下、一口量の調整、複数回嚥下等）。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
8	嚥下障害患者の代償法における嚥下調整食について学ぶ。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
9	模擬症例を用いて、食事の際の観察視点や問題点抽出を学ぶ。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
10	頭頸部腫瘍により生じる嚥下障害へのリハビリ介入について理解する。また、歯科補綴的治療、再建術について学ぶ。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
11	摂食嚥下障害の外科治療について学ぶ（誤嚥防止術、嚥下機能改善術）。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
12	摂食嚥下障害におけるチーム医療（NST含む）・緊急時の対応（吸引等）について学ぶ。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
13	摂食嚥下障害患者の患者管理について学ぶ（IVH、経管栄養の対象について）。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
14	摂食嚥下障害患者の模擬症例を用いて、検査～訓練介入、予後の推定といった一連の流れについて学ぶ。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。Case studyを実施予定。時間内に検討事項がまとまらない場合はレポートとして課すことも検討する。
15	終講試験とまとめ	試験・講義	

■受講上の注意

授業活動の状況や実習室の利用状況に応じて、上記の内容や順番を一部変更する場合がある。

■成績評価の方法

本試験、再試験ともに60%以上を合格とする。

■テキスト参考書など

最新言語聴覚学講座　摂食嚥下障害学　医歯薬出版株式会社
その他参考資料は随時配布を行う。

■備考

講義内容に応じて遠隔講義を実施する場合もある。

■実務経験

本科目は言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

発声発語・摂食嚥下障害学特論

講師：専任教員

単位数：2単位　時間数：60時間　授業学年：4学年

必修選択：必修

■科目目標

言語聴覚療法専門科目の各特論は、言語聴覚士にとって必須の基礎・専門知識について知識と理解を深め、4年間の集大成につなげる講義である。本講義は卒業後の言語聴覚士としての活動に向けた知識の整理、確認を目標としており、実際にこれまでに履修した各論の資料、教科書、ノートが重要な資料となる。これらをベースに個別学習、グループ学習等、適宜形態を用いて講義を進めていく。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	発声の物理的特徴について理解を深める。	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
2	発声の生理と調節について理解を深める。 発声機構と障害のメカニズムについて理解を深める。	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
3	声帯の器質的病変、運動障害について理解を深める。	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
4	その他の音声障害について理解を深める。	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
5	音声障害の検査（観察、聴覚心理的検査、その他検査）について理解を深める。	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
6	音声障害の治療について理解を深める。 音声訓練の種類と特徴、方法について理解を深める。	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
7	無喉頭音声について理解を深める。	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
8	構音と共鳴、構音障害について理解を深める。	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
9	発声発語器官の形態と機能の検査について理解を深める。	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
10	発話明瞭度、構音特徴について理解を深める。	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
11	機能性構音障害について理解を深める。	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
12	器質性構音障害の発生メカニズムと特徴について理解を深める。	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
13	鼻咽腔閉鎖機能に関する疾患・症状について理解を深める。	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
14	舌・口腔底切除、中咽頭切除、顎切除とその評価・訓練について理解を深める。	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
15	まとめと中間試験	講義 試験	前半部分のまとめと復習の逐次準備を心掛ける
16	運動障害性構音障害の発生メカニズムと特徴について理解を深める。	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
17	運動障害性構音障害の検査と訓練について理解を深める(1)	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
18	運動障害性構音障害の検査と訓練について理解を深める(2)	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
19	運動障害性構音障害の検査と訓練について理解を深める(3)	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
20	摂食嚥下のメカニズムについて理解を深める。	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
21	嚥下の生理・年齢による変化、神経・筋機構について理解を深める。	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う

22	摂食・嚥下障害の検査と評価について理解を深める(1)	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
23	摂食・嚥下障害の検査と評価について理解を深める(2)	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
24	摂食・嚥下障害の治療・訓練について理解を深める(1)	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
25	摂食・嚥下障害の治療・訓練について理解を深める(2)	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
26	気管切開患者について理解を深める。	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
27	吃音・流暢性障害の定義について理解を深める。	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
28	吃音の検査・評価について理解を深める。	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
29	吃音の訓練・指導について理解を深める。	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
30	試験・まとめ	試験	

■受講上の注意

授業活動の状況や施設使用状況により、上記の内容や順番を一部変更する場合がある。

■成績評価の方法

中間試験・本試験結果を合算とする。
※全体評価60%以上で合格、60%未満で不合格とする。不合格の場合、再試験は願い出により1回行う。

■テキスト参考書など

適宜資料を配付

■備考

GW＝グループワーク

■実務経験

本科目は言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

聴覚障害学Ⅰ

講師：戌亥 啓一

単位数：1単位	時間数：30時間	授業学年：1学年
必修選択：必修		

■科目目標

聴覚障害は目に見えない、他者に気づかれにくい障害である。そのため障害についての理解や当事者の心中を推し量ることは難しい。言語聴覚士は聴覚障害に対する専門職であり、この分野における各方面からの期待は大きく、言語聴覚士を目指す本講義の受講者には聴覚領域に対して興味と関心をもってもらえることを目標の1つとしている。

受講者においては、聴覚の仕組みを理解し、その上で聴覚障害の種類と特性を知り、言語聴覚士として各種聴覚検査や助言、指導、訓練を行うための知識を身につけることが就業までの目的となる。本講義は導入の位置づけにあり、聴覚領域の講義は上位学年も含め複数の設定されていることから、まずは本講義を通して基礎的な理解を十分に得ることを目標とする。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	聴覚障害の基礎知識について理解を深める (1) 耳が音を感じる仕組みと構造、両耳聴の効果から聴覚の機能について理解を深める。	講義	他の講義や教科書であいまいな点を1つずつ解消していく、聴覚野さまざまな機能をまとめる。
2	聴覚障害の基礎知識について理解を深める (2) 難聴とは？音と聴覚器と伝導路について	講義	全体像から局所の理解に進むようにする。
3	補装具や補聴援助機器から聞こえや聴覚についての理解を深める。	講義	試聴前にイメージをもちギャップを楽しむ。
4	聴器の発達と脳科学からの視点について理解を深める。	講義	発達の知識との関連性を意識して抽出する。
5	頻度の高い難聴のタイプとその特徴による影響について理解を深める。	講義	聴器の構造と障害・症状が密接に関係していることを知る。
6	聴覚障害のさまざまな原因と影響について理解を深める。	講義	聴器の構造と障害・症状が密接に関係していることを知る。
7	まとめ・試験（中間）	試験	
8	平衡機能とその評価・指導について理解を深める。 めまいと平衡機能検査、支援方法について理解を深める。	講義	平衡機能と聴覚機能が密接に関係していることを知る。
9	聴覚障害トピックス：社会のニーズと取組み(1) 聴覚障害トピックス：先端研究・関連技術など(2)	講義	
10	聴覚障害と視覚的コミュニケーションについて理解を深める (1)	講義 演習	体験から聴覚障害児・者の生活上の思いを想像し、考察をしてみる。
11	聴覚障害と視覚的コミュニケーションについて理解を深める (2)	講義 演習	体験から聴覚障害児・者の生活上の思いを想像し、考察をしてみる。
12	代表的な聴覚検査の体験と通して聴覚とその障害についての理解を深める(1)	講義 演習	聴器の構造や障害のタイプが密接に関係していることを知る。 操作・体験から学ぶことも多いので、疑問・発見を楽しむ。
13	代表的な聴覚検査の体験と通して聴覚とその障害についての理解を深める(2)	講義 演習	聴器の構造や障害のタイプが密接に関係していることを知る。 操作・体験から学ぶことも多いので、疑問・発見を楽しむ。
14	代表的な聴覚検査の体験と通して聴覚とその障害についての理解を深める(3)	講義 演習	聴器の構造や障害のタイプが密接に関係していることを知る。 操作・体験から学ぶことも多いので、疑問・発見を楽しむ。
15	試験・まとめ	試験	

■受講上の注意

授業活動の状況や施設使用状況により、上記の内容や順番を一部変更する場合がある。

■成績評価の方法

中間試験・本試験結果を合算とする。

※全体評価60%以上で合格、60%未満で不合格とする。不合格の場合、再試験は願い出により1回行う。

■テキスト参考書など

病気が見える 耳鼻咽喉科 vol.13 第1版, メディックメディア

配付資料

■備考

■実務経験

本科目は言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

聴覚障害学Ⅱ

講師:戌亥 啓一、竹松 知紀

単位数:1単位　時間数:30時間　授業学年:2学年

必修選択:必修

■科目目標

・聴覚障害児・者のコミュニケーション手段と情報伝達特徴の概要を理解する。
・乳幼児・小期聴覚障害、成人中途障害、加齢性対応の特徴について理解を深める。
・わが国および鹿児島県の聴覚障害児教育について理解し、教育現場の現状を知る。
・鹿児島県の聴覚障害児教育について理解し、支援体制・関係機関について理解を深める。
・聴覚障害に関わる支援、制度、補聴援助機器について理解を深める。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	乳幼児・小期聴覚障害の特徴と評価・指導の流れについて理解を深める (1)	講義	事前配付資料の通読及び確認
2	乳幼児・小期聴覚障害の特徴と評価・指導の流れについて理解を深める (2)	講義	事前配付資料の通読及び確認
3	成人中途障害、加齢性難聴の特徴と評価・指導の流れについて理解を深める (1)	講義	事前配付資料の通読及び確認
4	成人中途障害、加齢性難聴の特徴と評価・指導の流れについて理解を深める (2)	講義	事前配付資料の通読及び確認
5	聴覚の機能と代償手段のまとめ	講義 演習	
6	日本語の音と聞こえについて理解を深める。 日本語の音の聞き取りづらさや聞き間違いから聴覚障害の理解を深める。	講義	日本語を詳しく知ることの重要性を知り、その科学的特徴を整理する。
7	わが国の聴覚障害児教育について理解を深める。 聾学校とは、その位置づけについて理解を深める。	講義 演習	時代背景の推察が重要なポイントとなる。地域における拠点機能に加え、教育的、社会的観点からの理解が重要である。
8	まとめ・試験(中間)	試験	
9	鹿児島県の聴覚障害児・者への支援体制・関係機関について理解を深める。	講義 演習	教育的、社会的観点からの理解が重要である。
10	乳幼児・小期聴覚障害の指導・訓練について理解を深める。	講義 演習	
11	成人中途障害、加齢性難聴への指導・訓練について理解を深める。	講義 演習	
12	鹿児島県の聴覚障害児・者への支援体制・関係機関について理解を深める。 補聴器メーカー(1)	講義 演習	多角的な観点からの理解が重要である。
13	鹿児島県の聴覚障害児・者への支援体制・関係機関について理解を深める。 補聴器メーカー(2)	講義 演習	多角的な観点からの理解が重要である。
14	鹿児島県の聴覚障害児・者への支援体制・関係機関について理解を深める。 補聴器メーカー(3)	講義 演習	多角的な観点からの理解が重要である。
15	試験・まとめ	試験	

■受講上の注意

授業活動の状況や施設使用状況により、上記の内容や順番を一部変更する場合がある。

■成績評価の方法

中間試験・本試験結果を合算とする。
※全体評価60%以上で合格、60%未満で不合格とする。不合格の場合、再試験は願い出により1回行う。

■テキスト参考書など

藤田郁代監修:標準言語聴覚障害学　聴覚障害学 第3版, 医学書院

■備考

■実務経験

本科目は言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

聴覚障害学Ⅲ

講師：良久 万里子

単位数：1単位　時間数：15時間　授業学年：2学年

必修選択：必修

■科目目標

・視覚聴覚二重障害者を理解し，視覚聴覚二重障害者とのコミュニケーションスキルを高める。
・視覚聴覚二重障害者の困難やニーズに対してのサポート力を高める。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	視覚聴覚二重障害の定義	講義	予習・復習を可能な範囲で行う。
2	視覚聴覚二重障害者のコミュニケーション手段	講義	予習・復習を可能な範囲で行う。
3	視覚聴覚二重障害者の困難とニーズ	講義	予習・復習を可能な範囲で行う。
4	視覚聴覚二重障害者の実態	講義	予習・復習を可能な範囲で行う。
5	視覚聴覚二重障害者の移動介助方法	講義 演習	予習・復習を可能な範囲で行う。
6	視覚聴覚二重障害者の福祉サービス．関連機関との連携	講義	予習・復習を可能な範囲で行う。
7	視覚聴覚二重障害者のサポート方法・訓練	講義 演習	予習・復習を可能な範囲で行う。
8	試験・まとめ	試験	

■受講上の注意

■成績評価の方法

終講試験評価60点以上で合格、60点未満で不合格とする。不合格の場合、再試験は願い出により1回行う。

■テキスト参考書など

資料配付

■備考

■実務経験

聴覚障害学Ⅳ

講師：草野 愛

単位数：2単位	時間数：40時間	授業学年：3学年
必修選択：必修		

■科目目標

聴覚障害者に対して難聴支援を行うにあたり、その対象や使用する機器は多岐にわたり、適切に使用できているか把握するための評価方法も異なる。本講義では補聴器及び人工内耳等人工聴覚器についてその目的、仕組みや特徴、調整方法、評価法などの概要について学習する。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	補聴器の構造、機能	講義	講義資料を必ず持する
2	補聴器の構造、機能（2）	講義	補聴器の仕組みを理解する
3	補聴器の機能と適合の流れ	講義	補聴器の仕組みを理解する
4	補聴器適合の流れ（2）	講義	講義資料を必ず持する
5	補聴器特性	講義	講義資料を必ず持する
6	補聴器特性の測定と調整方法	講義	講義資料を必ず持する
7	補聴器特性調整と評価の詳細、関連疾患について	講義	講義資料を必ず持する
8	伝音難聴、騒音、補聴援助システム	講義	解剖学的な知識を踏まえたうえで補聴器の違いを学習する
9	SG、CROS補聴器、人工聴覚器	講義	解剖学的な知識を踏まえたうえで補聴器の違いを学習する
10	人工内耳の構造、機能	講義	人工内耳の仕組みを理解する
11	人工内耳の機能、EAS適応基準	講義	解剖学的な知識を踏まえたうえで各人工内耳の違いを学習する
12	人工内耳の流れ、術前	講義	マッピング手法の違いを学習する
13	マッピング	講義	マッピング手法の違いを学習する
14	マッピングの流れ、装用効果の評価	講義	現行の標準化、非標準化の評価法について学習する
15	小児のマッピングハビリテーション	講義	マッピング手法の違いを学習する
16	小児のマッピング、言語指導	講義	現行の標準化、非標準化の評価法について学習する
17	言語指導と普通教育、聾学校の教育	講義	講義資料を必ず持する
18	補足事項	講義	福祉・行政の支援システムについて理解する
19	補足事項（2）	講義	
20	試験・まとめ	試験	

■受講上の注意

配付する資料等に適宜講義内容を追記してください。

■成績評価の方法

レポート30点、筆記試験70点（本試験、再試験

※全体評価60点以上で合格、60点未満で不合格とする。不合格の場合、再試験は願い出により1回行う。

■テキスト参考書など

言語聴覚士テキスト（医歯薬出版株式会社）、聴覚検査の実際（日本聴覚医学会）、その他適宜資料を配付する。

■備考

■実務経験

本科目は、実務経験のある言語聴覚士による授業である。

聴覚障害学演習Ⅰ

講師:徳永 弘樹、戌亥 啓一

単位数:1単位	時間数:30時間	授業学年:2学年
必修選択:必修		

■科目目標

聴覚検査への理解を深める。
演習を通して聴覚検査の流れや実施方法の詳細を理解する。
・各種聴覚検査についてその目的や特徴を把握する。
・音場、幼児聴力検査、自覚・他覚的検査など目的別検査の分類に精通する。
・特に標準純音聴力検査を中心に各種検査に対する基礎的手技の習熟を目指す。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	聴覚検査の種類	講義	
2	純音聴力検査について	講義	
3	純音聴力検査	演習	
4	純音聴力検査(マスキング)	演習	
5	語音聴力検査について	講義	
6	語音聴力検査(語音了解閾値検査)	演習	
7	語音聴力検査(語音明瞭度検査)	演習	
8	試験(中間)	試験	
9	小児聴力検査(1)	講義 演習	
10	小児聴力検査(2)	演習	
11	インピーダンスオージオメトリー(1)	講義 演習	
12	インピーダンスオージオメトリー(2)	講義 演習	
13	その他聴覚検査(自記オージオメトリー、特殊検査など)(1)	講義 演習	
14	その他聴覚検査(自記オージオメトリー、特殊検査など)(2)	演習	
15	試験・まとめ	試験	

■受講上の注意
検査に対する講義は概略の解説および演習を通して実施・進行していく。オージオグラム、オージオメータの用語・単位・原理についての理解、また各検査名とさまざまな区分についてその根拠から整理・理解していく。

■成績評価の方法
中間試験・本試験結果を合算とする。
※全体評価60%以上で合格、60%未満で不合格とする。不合格の場合、再試験は願い出により1回行う。

■テキスト参考書など
①聴覚検査の実際, 南山堂、②藤田郁代監修:標準言語聴覚障害学　聴覚障害学 第3版, 医学書院　③病気が見える 耳鼻咽喉科 vol.13 第1版, メディックメディア

■備考

■実務経験
本科目は言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

聴覚障害学演習Ⅱ

講師：戌亥 啓一

単位数：1単位	時間数：40時間	授業学年：3学年
必修選択：必修		

■科目目標

聴覚障害学において聴覚の評価や検査は診断に影響する非常に重要な領域である。各種検査への理解に加えて実践する技術を習得することは言語聴覚士の職域や自己の就業時選択肢の拡大につながる。実戦の経験を得て技能の獲得を実感してもらいたい。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	補聴器の評価（適合検査）を理解する。	講義 演習	
2	補聴器の評価（特性測定）を理解する(1)	講義 演習	
3	補聴器の評価（特性測定）を理解する(2)	演習	
4	人工内耳マッピングと評価を理解する。	演習	
5	新生児聴覚スクリーニングの理解する。	演習	
6	AERの理解と実践をする(1)	講義 演習	
7	AERの理解と実践をする(2)	演習	
8	OAEの理解と実践をする。	講義 演習	
9	まとめ・試験（中間）	試験	
10	成人検査概要・実施手順の確認をする(1)	演習	
11	成人検査概要・実施手順の確認をする(2)	演習	
12	成人検査概要・実施手順の確認をする(3)	演習	
13	小児検査概要・実施手順の確認をする(1)	演習	
14	小児検査概要・実施手順の確認をする(2)	演習	
15	成人検査概要・実施手順の実践をする(1)	演習	
16	成人検査概要・実施手順の実践をする(2)	演習	
17	成人検査概要・実施手順の実践をする(3)	演習	
18	成人検査概要・実施手順の実践をする(4)	演習	
19	実技試験（OSCE） ①標準純音聴力検査　②その他選抜	試験	各検査施行上の留意点を確認する。
20	試験・まとめ	試験	

■受講上の注意

授業活動の状況や施設使用状況により、上記の内容や順番を一部変更する場合がある。

■成績評価の方法

中間試験・本試験結果を合算とする。
※全体評価60%以上で合格、60%未満で不合格とする。不合格の場合、再試験は願い出により1回行う。

■テキスト参考書など

①聴覚検査の実際, 南山堂、②藤田郁代監修：標準言語聴覚障害学　聴覚障害学 第3版, 医学書院　③病気が見える 耳鼻咽喉科 vol.13 第1版, メディックメディア

■備考

■実務経験

本科目は言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

聴覚障害学特論

講師:専任教員

単位数:2単位　時間数:60時間　授業学年:4学年

必修選択:必修

■科目目標

言語聴覚療法専門科目の各特論は、言語聴覚士にとって必須の基礎・専門知識について知識と理解を深め、4年間の集大成につなげる講義である。本講義は卒業後の言語聴覚士としての活動に向けた知識の整理、確認を目標としており、実際にこれまでに履修した各論の資料、教科書、ノートが重要な資料となる。これらをベースに個別学習、グループ学習等、適宜形態を用いて講義を進めていく。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	聴覚障害と発達への影響について理解を深める。 聴覚障害の原因と種類、特性について理解を深める。	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
2	聴力の程度と聴こえの特性について理解を深める。 聴覚障害に併発する症状について理解を深める。	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
3	小児聴覚検査と種類について理解を深める。	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
4	聴覚障害に関連する情報収集のための検査・評価について理解を深める。	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
5	聴覚障害の指導・支援と計画について理解を深める。	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
6	コミュニケーションモードと指導法について理解を深める。	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
7	幼児期までの療育、養育者支援、就学支援、社会連携・チームアプローチについて理解を深める。	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
8	成人聴覚障害の原因と種類・特性について理解を深める。	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
9	聴こえの障害特性、併発する症状について理解を深める。	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
10	聴覚検査法の適用と鑑別・目的(1)	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
11	聴覚検査法の適用と鑑別・目的(2)	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
12	聴覚検査法の適用と鑑別・目的(3)	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
13	平衡機能の検査と評価について理解を深める。 言語・コミュニケーションの評価について理解を深める。	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
14	聴覚障害者への指導・支援と計画について理解を深める。 就学・就労支援と地域連携について理解を深める。	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
15	まとめと中間試験	講義 試験	前半部分のまとめと復習の逐次準備を心掛ける
16	補聴器の構造と機能について理解を深める。 デジタル補聴器の機能について理解を深める。	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
17	補聴器の増幅特性について理解を深める。 オープンフィッティングについて理解を深める。	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
18	補聴器の周波数特性の測定について理解を深める。	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
19	補聴器のフィッティングについて理解を深める。	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
20	補聴器適合検査について理解を深める。 補聴器の装用指導について理解を深める。	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
21	人工聴覚器の構造・機能、手術適応について理解を深める(1)	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う

22	人工聴覚器の構造・機能、手術適応について理解を深める(2)	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
23	人工内耳の装用訓練・指導について理解を深める。 マッピングについて理解を深める。	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
24	人工内耳の装用効果の評価について理解を深める。	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
25	補聴援助システムについて理解を深める。	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
26	情報保障と支援システムについて理解を深める。	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
27	視覚聴覚二重障害の種類と特性について理解を深める。 視覚聴覚二重障害の原因疾患とその特性について理解を深める。	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
28	視覚聴覚二重障害者のコミュニケーションモードについて理解を深める。	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
29	視覚聴覚二重障害の評価と訓練について理解を深める。	講義 GW	GWと個別学習を適宜切り替えて行う
30	試験・まとめ	試験	

■受講上の注意

授業活動の状況や施設使用状況により、上記の内容や順番を一部変更する場合がある。

■成績評価の方法

中間試験・本試験結果を合算とする。
※全体評価60%以上で合格、60%未満で不合格とする。不合格の場合、再試験は願い出により1回行う。

■テキスト参考書など

適宜資料を配付

■備考

GW＝グループワーク

■実務経験

本科目は言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

地域言語聴覚療法学Ⅰ

講師：堀川 憲子、松尾 康弘、川元 真由美

単位数：1単位	時間数：15時間	授業学年：3学年
必修選択：必修		

■科目目標

本講義は言語聴覚障害や摂食嚥下障害のある障害児者、高齢者の地域における生活を支援するための諸制度や自立支援、就労支援、地域包括ケアシステム及び多職種連携など言語聴覚士に必要な知識・技能ならびに支援のあり方について理解することを目標とする。特に、歯科領域における地域支援、および災害リハビリテーション、多職種連携について理解を深める。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	地域リハビリテーションとは？意義と重要性について理解する。	講義	
2	地域リハビリテーションにかかわるシステムや制度について理解する。	講義	
3	地域での診療に向けて、小児歯科・高齢者歯科を理解する。	講義	小児歯科・高齢者歯科を理解する。
4	災害時における医療職種および言語聴覚士の役割について理解しする。避難所運営ゲーム（HUG）を通して、災害時における対応を理解する。	GW	GW(グループでの活動)となる。積極的な活動を期待する。
5	災害時における医療職種および言語聴覚士の役割について理解しする。避難所運営ゲーム（HUG）を通して、災害時における対応を理解する。	GW	GW(グループでの活動)となる。積極的な活動を期待する。
6	多職種連携の発展（1）	合同講義GW	GW(グループワーク)では積極的に取り組む
7	多職種連携の発展（2）	合同講義GW	GW(グループワーク)では積極的に取り組む
8	多職種連携の発展（3）	合同講義GW	GW(グループワーク)では積極的に取り組む

■受講上の注意

授業活動の状況や施設使用状況により、上記の内容や順番を一部変更する場合がある。特に「歯科」の関連講義については、講義の進度や使用する設備環境に応じて講義回数の延長を図る。この場合、事前に日程等の伝達をする。

■成績評価の方法

テーマごとのレポート（提出物）評価にて行う。

※全体評価60点以上で合格、60点未満で不合格とする。不合格の場合、再評価は願い出により1回行う。

■テキスト参考書など

資料配付

■備考

■実務経験

本科目は歯科医師、言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

地域言語聴覚療法学Ⅱ

講師：専任教員

単位数：1単位　時間数：15時間　授業学年：4学年

必修選択：必修

■科目目標

本講義名は「地域」を冠しているものの、その内容は「医療」「福祉」「教育」といったリハビリテーションの活動領域を包括したものであり、リハビリテーションに関わる上で基本となる社会福祉、社会保障制度について体系的に 学習し、その内容を理解し、近い将来に赴く 臨床現場（実習を含め）で、クライエントの利用可能な社会資源や必要な制度・関係法について、具体的にイメージできる能力を養い、制度を活かす方法を検討することができるようになることを目標とする。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	地域包括ケアシステムの概要について理解できる。	講義 GW	講義のねらいに従い予習をする。
2	地域包括ケアシステムとリハビリテーションの関係について理解できる。	講義 GW	講義のねらいに従い予習をする。
3	地域社会において言語聴覚療法を有用な資源として活かす視点を得るため、調査・検討を行う（1）	講義 GW	社会活動全般の資料を参照することが役立つ。
4	地域社会において言語聴覚療法を有用な資源として活かす視点を得るため、調査・検討を行う（2	講義 GW	社会活動全般の資料を参照することが役立つ。
5	多職種連携の実践（1　準備段階）	講義 GW	GW(グループワーク)では積極的に取り組む。
6	多職種連携の実践（2）	合同講義GW	GW(グループワーク)では積極的に取り組む。
7	多職種連携の実践（3）	合同講義GW	GW(グループワーク)では積極的に取り組む。
8	多職種連携の実践（4）	合同講義GW	GW(グループワーク)では積極的に取り組む。

■受講上の注意

授業活動の状況や施設使用状況により、上記の内容や順番を一部変更する場合がある。

■成績評価の方法

テーマごとのレポート（提出物）評価にて行う。
※全体評価60点以上で合格、60点未満で不合格とする。不合格の場合、再評価は願い出により1回行う。

■テキスト参考書など

資料配付

■備考

■実務経験

本科目は言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

見学実習Ⅰ

講師：専任教員

単位数：1単位　時間数：45時間　授業学年：1学年

必修選択：必修

■科目目標

見学実習Ⅰは今後の長期を見据えた各実習に向けての導入の位置づけである。さまざまな形態・領域の施設とそこに従事するスタッフを模範に以下の目標達成に向け取組んでいく。、
・さまざまな領域の施設を見学し、その特徴と地域における役割を学ぶ。
・各施設における言語聴覚士の役割と業務を学ぶ。
・職業倫理（守秘義務など）について学ぶ。
・言語聴覚療法の現場における見学方法（ステップA　※別紙ルーブリック表参照）を学ぶ。

■科目内容

■学習のねらい

（1）学内でのオリエンテーション
・臨床実習マニュアルをもとに実習全般について確認および諸注意を認識し、活動方法を学ぶ。
・臨床実習経験者からの講話および対話から具体的な事項を学ぶ。

（2）実習施設でのオリエンテーション
・施設の組織、管理運営の概要、職務規程の説明（勤務時間、休憩時間、電話・PC使用、個人情報に関する規則、更衣室の使用、喫煙、清掃、戸締りなど）
・部署、部門の概要と業務（運営規則、職員構成、職員と学生の活動範囲と義務・責任など）
・実習に伴う諸注意（安全面、衛生面、個人情報、器具、備品、図書の取り扱いなど）
・その他

（3）臨床参加・活動内容
学生の個々の経験を考慮した上でスモールステップの見学を重ねる。詳細は別紙ル―ブリップ表を参照する。
学生は各段階に応じた目標及び目的を理解し、それらに到達するよう十分な準備～指導者の姿勢や行動を模範とする。

（4）学生は見学実習後に報告書を作成・提出する。また指導者から段階到達のために必要なフィードバックを受けることで目標・目的を修正・更新していく。

■方法

実習および関連する学習等

■学習上の留意点

■受講上の注意
見学実習前オリエンテーションへの参加（事前通達有）及び臨床実習マニュアルの参照

■成績評価の方法
実習成績表および報告会成績による総合評価行う（臨床実習マニュアル参照）。
※合格基準未達の場合は遂行状況に応じた対応を図る。

■テキスト参考書など
鹿児島医療技術専門学校　臨床実習マニュアル、その他関連分野参考書

■備考

■実務経験

本科目は言語聴覚士として実務経験のある教員、指導者による授業である。

見学実習Ⅱ

講師：専任教員

単位数：1単位　時間数：45時間　授業学年：2学年

必修選択：必修

■科目目標

見学実習Ⅱでは見学実習Ⅰを通して得た知見を活かし、見学実習Ⅲに向けた基盤となる更に発展的な施設見学を重ねる。
・さまざまな領域の施設を見学し、その特徴と地域における役割を学ぶ。
・各施設における言語聴覚士の役割と業務を学ぶ。
・職業倫理（守秘義務など）について学ぶ。
・言語聴覚療法の現場における見学方法（ステップB　※別紙ルーブリック表参照）を学ぶ。

■科目内容

■学習のねらい

（1）学内でのオリエンテーション
・臨床実習マニュアルをもとに実習全般について確認および諸注意を認識し、活動方法を学ぶ。
・臨床実習経験者からの講話および対話から具体的な事項を学ぶ。

（2）実習施設でのオリエンテーション
・施設の組織、管理運営の概要、職務規程の説明（勤務時間、休憩時間、電話・PC使用、個人情報に関する規則、更衣室の使用、喫煙、清掃、戸締りなど）
・部署、部門の概要と業務（運営規則、職員構成、職員と学生の活動範囲と義務・責任など）
・実習に伴う諸注意（安全面、衛生面、個人情報、器具、備品、図書の取り扱いなど）
・その他

（3）臨床参加・活動内容
学生の個々の経験を考慮した上でスモールステップの見学を重ねる。詳細は別紙ルーブリップ表を参照する。
学生は各段階に応じた目標及び目的を理解し、それらに到達するよう十分な準備～指導者の姿勢や行動を模範とする。

（4）学生は見学実習後に報告書を作成・提出する。また指導者から段階到達のために必要なフィードバックを受けることで目標・目的を修正・更新していく。

■方法

実習および関連する学習等

■学習上の留意点

■受講上の注意
見学実習前オリエンテーションへの参加（事前通達有）及び臨床実習マニュアルの参照

■成績評価の方法
実習成績表および報告会成績による総合評価行う（臨床実習マニュアル参照）。
※合格基準未達の場合は遂行状況に応じた対応を図る。

■テキスト参考書など
鹿児島医療技術専門学校　臨床実習マニュアル、その他関連分野参考書

■備考

■実務経験

本科目は言語聴覚士として実務経験のある教員、指導者による授業である。

見学実習Ⅲ

講師：専任教員

単位数：1単位　時間数：45時間　授業学年：2学年

必修選択：必修

■科目目標

見学実習Ⅲでは医療提供施設における言語聴覚士の役割と業務を学ぶ。ここでは、約1週間を目安として1つの施設において集中的な実習期間を設ける。

これまでの見学実習Ⅰ・Ⅱで培った見学のステップを活かし、この実習を通して今後の評価実習および総合臨床実習につながる長期施設実習における実習生としての基本的な行動や活動概要、周囲の環境とのかかわり方の過程、言語聴覚障害がある人の抱える問題と背景を学ぶ。

■科目内容

■学習のねらい

（1）学内でのオリエンテーション
・臨床実習マニュアルをもとに実習全般について確認および諸注意を認識し、活動方法を学ぶ。
・臨床実習経験者からの講話および対話から具体的な事項を学ぶ。

（2）実習施設でのオリエンテーション
・施設の組織、管理運営の概要、職務規程の説明（勤務時間、休憩時間、電話・PC使用、個人情報に関する規則、更衣室の使用、喫煙、清掃、戸締りなど）
・部署、部門の概要と業務（運営規則、職員構成、職員と学生の活動範囲と義務・責任など）
・実習に伴う諸注意（安全面、衛生面、個人情報、器具、備品、図書の取り扱いなど）
・その他

（3）実習参加・活動
a. 指導者は、学生－指導者－教員連絡表（臨床実習マニュアル書式⑦）を参照し、学生の個々の能力と経験を考慮した上で基礎的かつ広範な知識・技術を身に付ける機会を与えられる。
b. 指導者は個別指導以外に、可能であれば以下のような場面の見学機会を与える。学生は実習の一環としてこれらに参加する。
スタッフミーティング、症例検討会、医師による回診、手術見学、症例発表、文献抄読等の課題提示、他の関連部門の見学など

（4）臨床活動（見学 → 模倣 ）
学生は、見学を通して言語聴覚療法の詳細な説明を受ける。「何が行われていたのか」積極的な質問や調べ学習が求められる。
進歩に応じて自ら考え判断していく機会があれば、自身の考えを指導者に伝達していくなど、能動的な活動を行えるよう意識していくと実習活動がより充実したものになる。

（5）学生は実習後に実習報告を行い実習報告書の提出を行う。具体的な書式は個々の活動内容によってより適切な形式を採用する。

■方法

実習および関連する学習等

■学習上の留意点

■受講上の注意
実習前オリエンテーションへの参加（事前通達有）及び臨床実習マニュアルの参照を行う。特に出席および欠席・遅刻・早退等への対応については十分把握すること。

■成績評価の方法
実習成績表および報告会成績による総合評価行う（臨床実習マニュアル参照）。
※合格基準未達の場合は遂行状況に応じた対応を図る。

■テキスト参考書など
鹿児島医療技術専門学校　臨床実習マニュアル、その他関連分野参考書

■備考

■実務経験

本科目は言語聴覚士として実務経験のある教員、指導者による授業である。

見学実習Ⅳ

講師：専任教員

単位数：1単位	時間数：45時間	授業学年：3学年
必修選択：必修		

■科目目標

見学実習Ⅳでは、これまでの見学実習で得た知見をもとに言語聴覚療法のさまざまな分野にかかわっていく。言語聴覚士としての専門知識を広く修めた段階にあって、専門的で広い視点や次のステップとして評価につながる見学を意識して取り組んでいく。

この実習を通して今後の評価実習および総合臨床実習につながる長期施設実習における実習生としての基本的な行動や活動概要、周囲の環境とのかかわり方の過程、言語聴覚障害がある人の抱える問題と背景を学ぶ。

■科目内容

■学習のねらい

（1）学内でのオリエンテーション
・臨床実習マニュアルをもとに実習全般について確認および諸注意を認識し、活動方法を学ぶ。
・臨床実習経験者からの講話および対話から具体的な事項を学ぶ。

（2）実習施設でのオリエンテーション
・施設の組織、管理運営の概要、職務規程の説明（勤務時間、休憩時間、電話・PC使用、個人情報に関する規則、更衣室の使用、喫煙、清掃、戸締りなど）
・部署、部門の概要と業務（運営規則、職員構成、職員と学生の活動範囲と義務・責任など）
・実習に伴う諸注意（安全面、衛生面、個人情報、器具、備品、図書の取り扱いなど）
・その他

（3）臨床参加・活動内容
学生の個々の経験を考慮した上でスモールステップの見学を重ねる。詳細は別紙ル―ブリップ表を参照する。
学生は各段階に応じた目標及び目的を理解し、それらに到達するよう十分な準備～指導者の姿勢や行動を模範とする。

（4）学生は見学実習後に報告書を作成・提出する。また指導者から段階到達のために必要なフィードバックを受けることで目標・目的を修正・更新していく。

■方法

実習および関連する学習等

■学習上の留意点

■受講上の注意

実習前オリエンテーションへの参加（事前通達有）及び臨床実習マニュアルの参照

■成績評価の方法

実習成績表および報告会成績による総合評価行う（臨床実習マニュアル参照）。
※合格基準未達の場合は遂行状況に応じた対応を図る。

■テキスト参考書など

鹿児島医療技術専門学校　臨床実習マニュアル、その他関連分野参考書

■備考

■実務経験

本科目は言語聴覚士として実務経験のある教員、指導者による授業である。

評価実習

講師：専任教員

単位数：6単位	時間数：270時間	授業学年：3学年
必修選択：必修		

■科目目標

・臨床の基本的態度と評価・診断技能を学ぶ。
・他職種との連携や言語聴覚士の臨床以外の業務について学ぶ。
・言語聴覚障害がある人との適切なコミュニケーションを学ぶ。
・指導者の指導の下、対象者の神経学的、神経心理学的特徴が明らかとなる評価法を選択し、実施することを学ぶ。
・実施した評価結果を分析することを学ぶ。

■科目内容

■学習のねらい

（1）学内でのオリエンテーション・実習施設情報収集・事前準備
・臨床実習マニュアルをもとに実習全般について確認および諸注意を認識し、活動方法を学ぶ。
・臨床実習経験者からの講話および対話から具体的な事項を学ぶ。
・臨床実習施設配置に応じた実習生個々の情報収集および準備を行う。

（2）実習前OSCE（客観的臨床能力試験）
・講義形式、TBL形式にて成人領域および小児領域の自作スクリーニング検査を作成する。
・スクリーニング検査を実施して、模擬症例の障害を推定し、今後実施すべき検査を選択できることを目標とする。
・本試験は4年次総合臨床実習を含めた一連の学習である。

（3）実習施設でのオリエンテーション
・施設の組織、管理運営の概要、職務規程の説明（勤務時間、休憩時間、電話・PC使用、個人情報に関する規則、更衣室の使用、喫煙、清掃、戸締りなど）
・部署、部門の概要と業務（運営規則、職員構成、職員と学生の活動範囲と義務・責任など）
・実習に伴う諸注意（安全面、衛生面、個人情報、器具、備品、図書の取り扱いなど）
・その他

（4）実習参加・活動
a. 指導者が学生の担当する対象者の選択と割り当てをするにあたっては、学生－指導者－教員連絡表（臨床実習マニュアル書式⑦）を参照し、学生の個々の能力と経験を考慮した上で基礎的かつ広範な知識・技術を身に付ける機会を与えられる。
b. 指導者は個別指導以外に、可能であれば以下のような機会を与える。学生は臨床実習の一環としてこれらに参加する。
スタッフミーティング、症例検討会、医師による回診、手術見学、症例発表、文献抄読等の課題提示、他の関連部門の見学など

（5）臨床活動（見学 → 評価模倣 → 評価実施）
学生は、まず見学を通して言語聴覚療法の詳細な説明を受ける。特に実習開始から間もない時期は、「どのような障害に、どのような目的、方法で」言語聴覚療法が行われているのかイメージできるよう積極的な質問や調べ学習が求められる。
例　数回の見学後に評価等の模倣、指導者が大丈夫だと判断した時点を「実施」とし、以降はその技術に限定して実施など、実施項目（can）を増やしていく。一定レベルに達した後は、進歩に応じて自ら考え判断していく機会を得るよう、自身の考えを指導者に伝達していくことも肝要である。

（6）学生は実習後に実習報告を行い実習報告書の提出を行う。具体的な書式は個々の活動内容によってより適切な形式を採用する。

■方法

実習および関連する学習等

■学習上の留意点

■受講上の注意
臨床実習前オリエンテーションへの参加（事前通達有）及び臨床実習マニュアルの参照を行う。
特に出席および欠席・遅刻・早退等への対応については十分把握すること。

■成績評価の方法
OSCE（客観的臨床能力試験）、実習成績表および報告会の各成績による総合評価行う（臨床実習マニュアル参照）。
※合格基準未達の場合は遂行状況に応じた対応を図る。

■テキスト参考書など
鹿児島医療技術専門学校　臨床実習マニュアル、その他関連分野参考書

■備考

■実務経験

本科目は言語聴覚士として実務経験のある教員、指導者による授業である。

総合臨床実習

講師：専任教員

単位数：9単位　時間数：405時間　授業学年：4学年

必修選択：必修

■科目目標

・言語聴覚士の指導者の助言・指導のもとに典型的な対象児・者に提供できる基本的言語聴覚療法を学ぶ。
・対象者を評価し、言語聴覚療法の実施計画を作成し、言語聴覚療法を実施することを学ぶ。
・対象者の障害特徴を掘り下げて調べる検査や、それに対応した療（訓練・指導・支援）の方法を考案することを学ぶ。
・多職種と連携してリハビリテーションを実施する方法を学ぶ。

■科目内容

■学習のねらい

（1）学内でのオリエンテーション・実習施設情報収集・事前準備
・臨床実習マニュアルをもとに実習全般について確認および諸注意を認識し、活動方法を学ぶ。
・臨床実習経験者からの講話および対話から具体的な事項を学ぶ。
・臨床実習施設配置に応じた実習生個々の情報収集および準備を行う。

（2）実習施設でのオリエンテーション
・施設の組織、管理運営の概要、職務規程の説明（勤務時間、休憩時間、電話・PC使用、個人情報に関する規則、更衣室の使用、喫煙、清掃、戸締りなど）
・部署、部門の概要と業務（運営規則、職員構成、職員と学生の活動範囲と義務・責任など）
・実習に伴う諸注意（安全面、衛生面、個人情報、器具、備品、図書の取り扱いなど）
・その他

（3）実習参加・活動
a. 指導者が学生の担当する対象者の選択と割り当てをするにあたっては、学生－指導者－教員連絡表（臨床実習マニュアル書式⑦）を参照し、学生の個々の能力と経験を考慮した上で基礎的かつ広範な知識・技術を身に付ける機会を与えられる。
b. 指導者は個別指導以外に、可能であれば以下のような機会を与える。学生は臨床実習の一環としてこれらに参加する。
スタッフミーティング、症例検討会、医師による回診、手術見学、症例発表、文献抄読等の課題提示、他の関連部門の見学など

（4）臨床活動（見学 → 評価・指導・訓練模倣 → 評価・指導・訓練実施）
　学生は、まず見学を通して言語聴覚療法の詳細な説明を受ける。特に実習開始から間もない時期は、「どのような障害に、どのような目的、方法で」言語聴覚療法が行われているのかイメージできるよう積極的な質問や調べ学習が求められる。
例　数回の見学後に訓練等の模倣、指導者が大丈夫だと判断した時点を「実施」とし、以降はその技術に限定して実施など、実施項目（can）を増やしていく。一定レベルに達した後は、進歩に応じて自ら考え判断していく機会を得るよう、自身の考えを指導者に伝達していくことも肝要である。

（5）学生は実習後に実習報告を行い実習報告書の提出を行う。具体的な書式は個々の活動内容によってより適切な形式を採用する。

（6）実習後OSCE（客観的臨床能力試験）
・OSCEを通じてこれまでの臨床実習で培った臨床技能を客観的に評価する。
・実習生個々の臨床実習経過等を勘案し、共通基礎および特定領域を対象とした内容とする。
・本試験は3年次評価実習を含めた一連の学習である。

■方法

実習および関連する学習等

■学習上の留意点

■受講上の注意
臨床実習前オリエンテーションへの参加（事前通達有）及び臨床実習マニュアルの参照を行う。
特に出席および欠席・遅刻・早退等への対応については十分把握すること。

■成績評価の方法
OSCE（客観的臨床能力試験）、実習成績表および報告会の各成績による総合評価行う（臨床実習マニュアル参照）。
※合格基準未達の場合は遂行状況に応じた対応を図る。

■テキスト参考書など
鹿児島医療技術専門学校　臨床実習マニュアル、その他関連分野参考書

■備考

■実務経験

本科目は言語聴覚士として実務経験のある教員、指導者による授業である。

言語聴覚研究Ⅰ

講師:専任教員

単位数:2単位	時間数:30時間	授業学年:2学年
必修選択:選択		

■科目目標

担当指導者の指導のもと研究活動を行い、信頼性と妥当性にそった研究計画の立案と実行を行う。学内発表までの過程を通して1つの研究テーマを形にする。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
	(1)担当指導者との調整を行い、研究概要を共有する。 (2)担当指導者との調整を行い、段階を踏んだ具体的な計画を共有する。 (3)情報収集、テーマ設定のための活動を進める。 論文検索サイトを活用して情報収集を行うとともに情報の整理を進め方向性を絞っていく。 (4)企画書の作成、計画立案を通して、研究概要を具体的に表現できるようにする。 (5)中間発表に向けた具体的な発表形式および内容の準備を行う。 (6)学内発表を行い多様な意見を得るとともに指導者と調査を行い今後の計画を検討する。また、他者の発表を聴講することを通して多様な研究を認識する。 (7)学内発表で得た意見をもとに研究活動の保管や修正を行い、より充実した内容を目指す。 情報の分析と活用から仮説を検証し、図表作成および文章化する。 検証からさらに情報を収集・統合し発展的な展開を描く。 (8)情報をまとめ、適切な形式で表現(学内発表)する。	本講義は担当指導者との個別指導を中心に実施される。	

■受講上の注意

■成績評価の方法

発表内容およびその他代替と認められる実績にて評価する。

■テキスト参考書など

適宜使用

■備考

■実務経験

本科目は言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

言語聴覚研究Ⅱ

講師:専任教員

単位数:3単位	時間数:45時間	授業学年:3学年
必修選択:選択		

■科目目標

「言語聴覚研究Ⅰ」を履修した後、担当指導者の指導のもと研究活動を行い、学内発表の後、学外発表を見据えた活動を行う。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
	(1)担当指導者との調整を行い、研究概要を共有する。 (2)担当指導者との調整を行い、段階を踏んだ具体的な計画を共有する。 (3)情報収集、テーマ設定のための活動を進める。 論文検索サイトを活用して情報収集を行うとともに情報の整理を進め方向性を絞っていく。 (4)企画書の作成、計画立案を通して、研究概要を具体的に表現できるようにする。 (5)中間発表に向けた具体的な発表形式および内容の準備を行う。 (6)学内発表を行い多様な意見を得るとともに指導者と調査を行い今後の計画を検討する。また、他者の発表を聴講することを通して多様な研究を認識する。 (7)学内発表で得た意見をもとに研究活動の保管や修正を行い、より充実した内容を目指す。 情報の分析と活用から仮説を検証し、図表作成および文章化する。 検証からさらに情報を収集・統合し発展的な展開を描く。 (8)学会もしくはジャーナルにて研究成果を報告する過程および一般的な形式を学ぶ。	本講義は担当指導者との個別指導を中心に実施される。	

■受講上の注意

■成績評価の方法

発表内容およびその他代替と認められる実績にて評価する。

■テキスト参考書など

適宜使用

■備考

■実務経験

本科目は言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。